

鹿児島県史料集
(39)

薩摩藩天保改革関係史料 一

鹿児島県史料刊行会

鹿児島県史料集
(39)

薩摩藩天保改革関係史料 一

鹿児島県史料刊行会

刊行のことば

鹿児島県史料集第三十九集として、ここに「薩摩藩天保改革関係史料 一」を刊行いたします。

本書は天保期の薩摩藩の財政・藩政改革に多大の貢献をした調所笑左衛門広郷【安永五年（一七七六）～嘉永元年（一八四八）】の史料、並びに改革方随従として調所の直下で政策の発案・推進役として活躍した海老原清熙（宗之丞・雍斎）【亨和三年（一八〇三）～明治二十年前後（一八八七年頃）】の日記や記憶に基づく記録報告書を中心に収載したものです。

県史料集の刊行は、資料の保存をはかるとともに、地方史研究の利用や県民の文化向上に役立てることを目的としております。

今回は、鹿児島県歴史資料センター黎明館調査史料室長の尾口義男氏によって原稿作成・編集・校閲・校訂が進められ、刊行の運びとなりました。お忙しい中、長期間にわたるお骨折りに対し、心からお礼申し上げます。

平成十二年三月

鹿児島県立図書館長

前 城 美 章

例言

一、本史料集には、鹿児島県立図書館所蔵の「海老原清純履歴概略」と「海老原雍斎君御取調書類草稿」、及び東京大学史料編纂所蔵の「調所広郷履歴」を収めた。

一、「海老原清純履歴概略」と「海老原雍斎君御取調書類草稿」の編著者は海老原清熙（宗之丞・雍斎）、著作の時期は明治十七年頃である。また「調所広郷履歴」は稲富笑左衛門（調所広郷孫）による明治十五年十二月提出の報告書の体裁をとってはいるが、本文始めの一部箇所を除いた大半は海老原の作になるものである。海老原清熙は、薩摩藩天保改革の中心人物として薩摩藩政を指導した家老調所広郷に重用され、調所直下にあつて各種の改革事業に関与した人物である。

一、三史料はいずれも数次の書写を経た写本であるので、国立国会図書館所蔵の「石室秘稿」中「調所広郷履歴」ほか、他の写本類や「薩摩藩天保度以後財政改革顛末書」（『近世社会経済叢書 四』）等と対校し、明らかな誤脱には補正や校訂を加えた。

一、本文中の各項の番号や小見出しは、読者の利用の便益を考慮して編集者が付した。

一、漢字は、旧体正字・異体字・略字・俗字等の使用は原則として避け、常用漢字を使用した。

一、誤読と思われる箇所には、右傍らに（・・カ）（ママ）のように注記した。

一、他の写本類や既刊本と対校して脱字・脱文と思われる箇所については、本文中に「・・」のように挿入した。なお語句の表記が大きく異なる箇所については、右傍らに異本の表記をイ「・・」として示した。

一、朱書の箇所は「」で示した。

一、読点は本来はないが、読者の便益を考慮して編集者が付した。

一、なお、本文「調所広郷履歴」の末尾には、補足参考史料として前掲「薩摩藩天保度以後財政改革顛末書」所収の第七号の記事を「（参考）調所広郷履歴・事績概略」として収めた。

一、本史料集の原稿の作成・編集・校正は尾口義男委員が一括して担当した。

「薩摩藩天保改革関係史料 一」 目次

海老原清熙履歴概略

一 海老原家記及ヒ同清熙履歴・業績	5
二 肥後石工岩永三五郎ノ事	12
三 大工阿蘇鉄矢ノ事	13
四 支族門閥家ノ家政改革ノ事	13
五 甲突川架橋及ヒ改修等ノ事	14
六 祇園之洲海岸辺ノ埋立・台場築造等ノ事	15
七 城下河川洪水ト岩永三五郎ノ教訓等ノ事	15
八 新納忠元ト忠元靈社創建ノ由来ノ事	16
九 大砲・銃隊ヲ要トスル軍制改革推進ノ事	17
一〇 清熙、薬丸一流ノ齊興試見ニ左袒セシ事	18
一一 旧習一洗、多端ニ亘リタル軍制改正ノ事	19
一二 袁了凡ノ説ニ從イ善政ニ努メシ事	20
一三 果斷嚴君ノ国主島津斉興ノ事	21
一四 黒岩ガ一タノ話ヨリ大ニ国益開キシ事等	22
一五 農政改革及ヒ農村振興ニ尽力セシ事	23
一六 維新変革後ノ県内農村状況ヲ憂ウルノ事	25

一七 現今採用ノ石代納法、県内ニ大害ヲ醸スノ事	26
一八 薩人ノ札儀廉恥衰退ノ風ヲ憂ウルノ事	26
一九 薩摩藩軍備ニオケル洋銃採用顛末	27
二〇 県下特産商品ノ繁殖開発等ヲ論ジルノ事	28
二一 旧來ノ兵法一新シテ軍制改革シタルノ事	29
二二 山川ハ水車用良水ノ第一等地ナル事	29
二三 山川町救済ノ道ヲ論ジルノ事	29
二四 菜種子二十万石ノ繁殖ノ道ヲ論ジルノ事	30
二五 廉価ナ油粕ニテ煙草作等繁殖ヲ論ジルノ事	30
二六 上町ニ牛馬骨ヲ集荷シテ振興ヲ計リタキ事	30
二七 調所、砂糖接殖ノ物産開発ニ尽力ノ事	31
二八 調所ノ軍制改革ノ起原	31
二九 少年ヨリノ素志ヲ遂ゲタル改革事業ノ事	31

海老原雍齋君御取調書類草稿

(一)	
一 太守島津斉興ノ事	33

〔一〕

二 深キ思慮ニテ山林伐木・植木ノ法ヲ立テル事……………35

〔二〕

三 財政改革・農政改正・軍政更革等、調所事績ノ事……………36

四 城内宝蔵ニ納メタル百万両ノ事……………43

五 広郷ノ始良辺海岸ヘ植エシ杉ノ事……………43

六 深意アリテ下町ニ木綿織屋ヲ建ラレタル事……………43

七 人別サシ杉ノ法ヲ復シタル事……………43

八 朽木ノ栽植起原及び蕃植等ノ事……………43

九 広郷、一タノ宿ニテモ国産ニ心ヲ用イタル事……………44

一〇 広郷ノ広ク国産開発ニ着手セシ事……………44

一一 藩内諸所ヨリ遺漏ナク人材登用セシ事……………45

一二 改革以來領民ノ重課ヲ解キ免セラレシ事……………45

一三 火防ニ備エテ西田町ヲ整備セシ時ノ事……………45

一四 下町ノ救済ト繁栄ノ為ニ行イシ事……………45

一五 上町繁栄ノ為ニ新旧波戸ヲ修築・新築等セシ事……………45

一六 鯨骨・牛馬骨ノ輸入ヲ盛ニシテ農民培養ニ努メシ事……………45

〔四〕

一七 海老原ガ曾木川浚ノ大事業ニ着手セシ発端……………45

一八 海老原ガ大小軽重ノ事務万般ニ関与セシ事……………47

一九 人ノ忌諱ニ触レシコト少ナカラザリシ事……………47

二〇 海老原ノ初上坂ノ事……………47

〔五〕

二一 調所ガ農政改正ニ着手シタル経緯……………47

二二 調所ノ行イシ農政改正ノ諸施策……………48

二三 国家柱石ノ諸家ノ家政ヲ改革・再建セシ事……………50

調所広郷履歴

一 調所広郷事績概略ニ付稲富笑左衛門陳述書……………53

二 島津重豪宛……………54

三 島津重豪朱印書写……………55

四 調所広郷受証写……………55

五 島津齊興朱印書写……………56

六 島津齊興朱印書写……………56

七 調所広郷履歴・業績……………56

八 改革前後ノ大坂仕登砂糖ノ年次別斤当り値段並ニ利益額……………61

九 改革前後ノ大坂仕登米ノ年次別総額並ニ石当り値段……………63

一〇 改革前後ノ大坂仕登生ノ年次別総額並ニ斤当り値段……………63

リ値段	66
一 改革前後ノ大坂仕登業種子ノ年次別総額並二石 当リ値段	68
一二 改革前後ノ大坂仕登琉球鬱金ノ事	69
一三 琉球朱粉ノ事	70
一四 国産藥種ノ事	71
一五 胡麻・雑紙・櫓木等、外ノ大坂仕登産物ノ事	71
一六 三都並二南都・国元ノ借財整理ノ事	71
一七 大井川渡川仕法改革ノ事	72
一八 益筋一手商売差止ノ事	73
一九 上京出家・社人ノ入費節減ヲ計ル事	73
二〇 国元囲米ノ事	73
二一 国元借入銀整理ノ事	74
二二 人別出銀・出来等免除ノ事	74
二三 西目筋仮屋並二通路修補ノ事	74
二四 炭・椎皮・椎木・柞灰山等、他国商売山差止ノ事	75
二五 大富小富差止ノ事	75
二六 国元蔵々取納方仕向改革ノ事	75
二七 江戸統米囲余石並二大坂囲米ノ事	76
二八 三都及ビ長崎・国元ノ蔵々弊習取締向ノ事	76

二九 江戸統米仕向改正ノ事	76
三〇 国元買物方蔵仕向ノ事	77
三一 領内蔵々ノ斤量分銅統一ノ事	77
三二 三島経営ノ改革ニ関スル事	77
三三 受持郡奉行設置ノ事	78
三四 国元厩入用金ノ支払改正ニ関スル事	78
三五 内用掛山奉行設置及ビ諸木仕立等仕向改正ニ 関スル事	78
三六 国元諸仕向改正ニ関スル事	79
三七 日州表御用船造立ノ事	79
三八 富福丸等四艘ヲ大坂仕登積船トスル事	79
三九 三島方御用船ノ事	80
四〇 改革以後ノ江戸新造立外諸作事ノ事	80
四一 改革以後ノ京・大坂・伏見新造立外諸作事ノ事	82
四二 作事方材木外諸品買入仕向改正ノ事	84
四三 改革政治十年余ノ成果・課題ニ付、調所広郷報告	84
四四 五十万両全備報告ニ関スル調所広郷別紙手扣書	86
四五 調所、財政初メ藩政ノ諸改革ヲ進メシ事	86
(参考) 調所広郷履歴・事績概略	89

海老原清熙履歷概略

海老原清熙履歴概略

「〇一 海老原家記及ヒ同清熙履歴・業績」

海老原氏ハ佐々木ノ疏流^{イ「族流」}ニシテ、江州海老原ノ庄ヨリ出タルト旧記アレ共、正保中高見馬場居住ノ時、近隣八木新兵衛家ニ出火延焼シテ系図・記録・家財ノ類残ラズ消失シ、為メニ由緒ノ詳悉ヲ得ス、去レ共忠久公御人国ノ節御供人数牒ニ海老原ト氏計リアレハ果シテ夫ナラント思ヘリ、然レ共是亦他ニ其準拠スヘキ者ナケレハ確乎ト認メ難シ、而シテ又家ノ伝ヘニ京侍ナリシトアリ、佐々木ノ支族ナレハ源姓ナルヘキニ、古来藤原ニテ氏ノ神ニ春日ヲ祭ルハ、藤氏ニ仕ヘ忠久公御任国ニ隨ヒ奉リシ者ナルヘシ、偕先祖代母ト了ト二人貧窮ニテ浄光明寺門前地ニ寓居、門前地ハ困苦十族ノ寄住スル所、時ノ住持廓然老僧殊ニ懇シテ懇ニ濟ヒタルニ依リ、其恩ニ報ハン為メ三子ヲ廓然ノ元ニ列レ行キ師弟ノ約ヲ結ビタリ、而シテ其年廓然寂ス、約アルヲ以テ翌年剃髮サセ、廓心ト名ツケ、成人ノ上藤沢山ニ修學シ、戒行ヲ保チ品川善福寺ノ住持トナリ、馭中ノ寺ニテ持律ノ僧少カリシニ、廓心ハ律行堅固ナルコトヲ

吉貴公ノ聞ニ達シ、移シテ浄光明寺ノ住持ヲ命セラル、公ガ薨去

ノトキハ御引導ヲ勤メ奉リ、而シテ新証院天永寺ニ退院シタリ、抑モ島津家正統ノ御方々ハ御代々福昌寺ヘ入ラセラルコトナリシニ、

吉貴公御高祖ノ御寺遠疎ニナル迪浄光明寺ヘ御入寺ノ尊慮ニテ御再興ニモナリ、御高祖ノ尊像ヲ御彫刻アリ、

忠久公ノ御法名ハ得仏道阿弥陀仏ト称セラレ、其後五代亦同

吉貴公モ彼宗ヲ奉セラレタルカ、新ニ立ラレタル重富・今和泉ノ両家モ彼宗ナリシヲ以テ知ルヘシ、其後清熙カ祖父代、再ヒ生計ノ度ヲ失ヒ浄光明寺門前ニ寓居ス、清熙カ実父中村太兵衛兼高ト養父盛之丞清胤トハ莫逆ノ友ナリシガ、或時胎内ニ有ル日ヨリ、若シ男子ナラハ養フテ子トセンコトヲ請ヒ、互ニ之ヲ約ス、享和三年癸亥十月二十日初夜、母夢ニ朝日西ノ方谷山ノ地ナル紫原ヲ照スト見テ生ルト、童名岩次郎ト云、兄兼治ヨリ少キコト三歳、性従順ニシテ兒童ノ比ヨリ曾テ争フコトナシ、父母甚タ愛スルヲ以テ、海老原ノ家ヨリ受育ヲ促セ共育セス、文化五年ノ春清胤江戸ニ赴クニ及ンテ累リニ請ヒテ止マス、依テ二月彼家ニ適ク、初テ到ルヲ以テ兒童ノ玩物数種ヲ与フ、岩次郎捨テ顧ミス、是女兒ノ弄物ナリト、唯筆硯ト紙トヲ好ムヲ以テ人皆奇ナリト評セリ、七八歳ヨリ近隣町田助教ニ從ヒテ句読ヲ受ケ、九歳

齊興公ニ初謁ノ礼ヲ執リ、茲ニ宗之丞清熙ト云、十二ノ夏養父清

胤没ス、家素ヨリ置キニ父ノ給ヲ失フテ益々貧ニ苦シム、養母縫織ヲ善クスルヲ以テ家計ヲ輔ク、十三ノ十二月、負債ノ為メ家ニ伝フル甲冑ヲ抵当ニセサル能ハス、其重代ノ武器ヲ己ノ世ニ当テ失ヒタルハ甚タ堪ヘ難シト雖モ、如何共スルニ由ナク遂ニ之ヲ為スニ臨ミ、感慨シテ系図箱ノ裏ニ、此恥ハ年長セハ物奉行トナリテ雪ン、何ソ先祖ヲ辱シメンヤ、文化十三年乙亥十二月海老原宗之丞清熙十二歳書ス、ト記シタリ、是先祖ニ物奉行トナリタルコトアリシ故ナリ、後ニ天保十三年比物奉行ヲ命セラレタル時、広郷ニ向ヒ、二十七年ニシテ素志ヲ遂タリト、恩ヲ謝シ歎笑シタリ、十六七ノ頃、近隣崎元休兵衛ノ宅ニ清熙ヨリ年増リタル五六輩相会シ、就中樋口小右衛門ノ語ニ、慶長・元和以來平凡ノ士族ヨリ出テ家老トナリタル者一二名、亦元來所有ナクシテ高千石ヲ得タル者一二名、是レ同等ノ難事ナリト語ルヲ聞キ、清熙坐隅ニ黙シテ思ヘラク、男子ト生レテ二ツノ内何レカ得タキ志ヲ起シタレ共、家貧フシテ頓ニ難キコトナレハ、先今日ノ生計ヲ立サレハ能ハスト考ヘ、士族ハ商事ニ関シ得可カラサル故、只蔵役ト云一事有ル而已ヲ以テ、十七ヨリ其事務ニ着目シ、十八ノ夏蔵役ノ資金ヲ実父兼高ニ請ヒタレハ、兼高熟考シテ云ヘリ、汝ハ算術モ達シ其職ニ勝ヘシ、去共蔵方ハ出納ヲ万一二過ツトキハ嚴刑ニ処セラル、コトナレハ、即今十八ナレハ予ニ於テ其意ニ任セ難シ、年二十二

至ルヲ俟可シト懇ニ止メタルニ、十九ノ正月兼高没シ益々至困トナリ、蔵方ノ資金ヲ百方手ヲ尽セ共整フル能ハス、漸ク二十二ヨリ蔵役ニ従事ス、其後幾多ノ辛勞ヲ經、金五百両ヲ得タルヲ以テ、養母ノ前ニ置、君ノ多年織紵ノ勞ヲ以テ適此利ヲ得タリト小封ヲ開キタレハ、養母^(澤方)泣然トシテ、汝カ今日アラシコトヲ俟コト久シト歎フコト甚シ、偕此金ハ唯命是從ハン、衣服・家屋・器具等心ニ任セント云シニ、養母天性清潔、予ハ衣服・家屋更ニ望ムコトナシ、家ノ旧公債ト貧時ノ公納負債アツテ、督促ヲ聞ハ頭上ニ石ヲ戴クカ如シ、願クハ残ラス償ヘカシト、清熙謹テ諾シ、悉ク之等ヲ返シタレハ、五百金皆尽タリ、夫ヨリ清熙力財ニ廉ナリトノ名ヲ得テ、蔵方ノ資有余ノ人ハ請ザルニ金ヲ貸スコトニナリ、運転自在ナリシ故所有ノ高二百石余ニ及ヒタリ、清熙元ト内ノ丸ニ生レ、同郷ニ平田直次郎・弟八郎太・新納仁兵衛・弟市來宗之丞・中村新介等、清熙ヨリ年長スル十余、皆文学アリ、常ニ從遊シテ教ヲ受ケ、或ハ亦豪邁不羈ノ徒ト交リ、權貴ヲ避ス高尚ヲ論シ、十二三ノ時家ニ徂徠ノ問答ノ書・太宰ノ聖學問答アリシヲ見テ、聖人ノ道ハ天下國家ヲ治ルノ道ナルヲ信シ、物問ノ書、白石・仁斎・東涯ノ著書、熊沢・貝原・中井ノ書ヨリ倭書・雜史・漢書ニモ涉ルト雖モ、不學ニシテ其意ニ通曉スルコト能ハス、専ラ經濟ニ志シ、実務ヲ主トシテ空理ヲ尊ハス、諸局ニ有ルニモ心ヲ用ヒ、

殊二十年間能ク各郷ノ農事弊習ヲ知りタル故ニ、天保十三年比農政矯正ノトキ人欺クコト能ハス、事ヲ処スルニ遲疑ナク、為メニ小補アリシト云可シ、十七ノ春ヨリ當舖局ノ小書記トナリ、古來彼局ハ国用ノ半額ヲ費スト云云、城内ヨリ各局七百年來ノ社寺・伊集院ヨリ出水迄年々參勤交代ノ宿々・城下ヨリ各郷橋梁夥シキ費ナルニヨリ、四五年間其弊習得失ヲ見タル故ニ、後ニ旧習ヲ更正スルニ及ンテ大ニ心得有シコトナリ、亦高奉行ノ書記トナリ、門閥支族ヨリ初士族ノ所有高ニ弊ヲ生シ、所有ノ全ク有名無実トナリ兵賦ヲ立ルコト能ハス、米ノ出納ニモ障礙ノ害ヲ生スルコト有リシ故ニ、改正ノ事ヲ公ノ聞ニ達シ、其年ヨリ一洗シテ軍賦ヲ整ヘタリ、徭農間上見ノ弊ハ藩ノ財政困難ヨリ起リタル原因ニシテ、各郷々ニ習慣悪習アルコトヲ觀察シ、既ニ三十三歳ノ時ハ藩ノ財政改革ニ際シ藏方目付ニ奉ラレ、天保六年ノ冬十二月出坂ス、翌七年ノ夏、調所太夫江戸ヨリ出ラレタル時、大坂ニテ初テ謁ス、夫迄半年間大坂ノ利害得失ヨリ国産ノ可否ヲ熟視シ、広郷ノ忌諱ニ触ルト雖モ憚ラス之ヲ上申ス、夫レ今日足ラサルハ上ノ意ヲ窺ヒ邸中ノ好ミヲ全フスル如キ風アルヲ知り、初ヨリ断然トシテ特立シ、毀譽ヲ顧ミシテ説ヲ立テ、若シ容レラレスンハ即日冠ヲ掛テ郷里ニ歸シト思ヒシニ、広郷深ク其議ヲ採リ、三十日余リ大坂ニ在リ、発スルニ臨ンテ、鬱金ハ国産ノ奇品ニシテ、素ト価ヒ

貴カリシモ近年大ニ低下セリ、汝之ガ壹斤金壹歩トナルヘキ策ヲ立タレハ、報ユルニ汝カ望ム所皆免サント戯ムル、此品ハ特ニ京都ニテ染料ニ用ルコトナレハ、君駕ヲ京地ニ枉ケラル可シ、即チ相共ニ上京シ低価トナリタル原因ヲ探ラント、藩邸ヲ避ケ旅籠屋ニ在テ頻リニ探究セシニ、辛ニ茶碗屋甚兵衛ナル者鬱金ノ蘊奥ヲ知得シタル老商ニ逢テ知己トナリ、具ニ其低価トナリタル原因ヲ聞キ、漸ク発売ノ法ヲ設クルヲ得タレハ、頓ニ旧価ニ増シ、其年ヨリ利益壹万円ヲ得タリ、其冬ヨリ隨行ヲ命セラレ、清熙ハ駿府ニ留ルヘキ用アツテ、後レテ天保八年ノ正月江戸ニ着ス、広郷隨從ノ用人高崎金之進ノ書記兼金方添役徒日付ニテ、高崎ノ官舎ノ二階ニ在リシニ、一日附足輕ノ小田原善左衛門ヲ外ヨリ呼、唯今大坂東町奉行ノ跡部山城守ノ邸ニ有リシニ三日前大坂ヲ発シタル家來帰着シテ告クルニ、天満橋ノ上ヨリ願ミタレハ、大坂一円ノ大火ニシテ、其中ニ大砲ノ声ヲ聞タリト、是レ變事ナレハ告ルト云捨テ去レリ、其時小田原ヲ呼ンテ誰カト問シカハ、政田屋嘉兵衛ナリシト聞、折節高崎ハ外出ナリト、調所君ハイカ、ト問シカハ、高輪公ノ召ニテ出邸ナリト聞テ、其事ヲ告ケ遣シ、清熙熟ラ／＼考フルニ、大坂中ノ大火ノ中ニ砲声ヲ聞ト云フコトナレハ尋常ノ變ニアラス、己レ一年間在坂シテ粗ホ形勢ヲ知レトモ、更ニ其起原ヲ考ヘ得ス、事倉卒ニ起リタルハ疑ヒナシ、城内ヲ初各局

ノ邸ト雖モ都會ノ遊惰ニ流レテ早ク制スルノ機ヲ失ハシ、清熙其衝ニ當リ、西京伏見ノ士ト大坂邸中ノ人員ヲ併セ卒ヒテ以テ變ニ應スルニ若カサルヘシ、亦薩邸ニ貯蓄アリト人ノ知ル所ナレハ其備ヘナクシハアラス、幸ニ命ヲ受シニハ即チ駅馬ニ鞭チ走ラント、其用意ヲナシタルニ、広郷高輪ヨリ帰リ、依テ愚意ヲ叙ヘ之ヲ試ミタレハ尤ナリ、去共今同僚ノ人々、留守居ニモ会シテ決ス可シト會議ニナリシニ、大坂ヨリ極至急ノ報ナキコトハアラン、今夜ヲ俟テ決セントノ事ナリシニ、其夜在坂田中善左衛門ヨリ火毛鎮マリ暴動人ノ所在ハ未タ知レストノ報知アリ、依テ此役ニハ發セザリシナリ、天保六年冬ニ都其他五百万兩ノ大負債ヲ年々二万兩ヲ以テ償却ノ法ヲ施サレタルハ、御改革初ヨリ榮翁公ノ定メラレシ事ニテ實ニ止ヲ得ラレサル法ナリシニ、老公天保四年薨去故、天保六年ノ初冬大坂ニテ發示ニナリタルニ、二百五十年賦ト云遠期ノ償ナレハ、金主共愕然トシ不平ヲ鳴シタルモ多カリシナラン、其事ニ関シタル濱村孫兵衛天保七年二人牢トナリ、毎年參勤交代毎ニ公ニモ滞坂トナリタレ共、其年ヨリ伏見ヨリ西ノ宮通ニテ広郷モ御供ナリシニ、清熙ハ大坂ヨリ伏見ニ出タルニ、今日ハ淀川ヲ常ノ如ク天滿ノ大融寺ヘ至リ、大塩カ暴動ノ焼跡ヲ見ル可シ、宗之丞ハ川船ヲ陸路ヨリ見送り大融寺ヘ來ル可シト命セラレ、俄ニ宿駕籠ニ乘リテ陸路ヲ急キタレ共、疾ニ焼跡ヲ廻ラレタル跡ニ

テ大融寺ヘ帰ラレ、西ノ宮ヘ通行、宗之丞ハ行列外ニテ供スヘシト命セラレ、備前片上駅ヨリ大坂ヘ歸リタリ、天保九年十年ハ公モ広郷モ出坂セス、其間高崎ト清熙ヲ在坂サセラル、其比一二年間広郷上京スレハ、大坂ヨリ出テ江戸ヘ隨從シ、鹿兒島ヘハ下ラス、殊ニ清熙ヲシテ成サシメラレタル事業ノ中ニ就テ、江戸改革以前ヨリノ各邸ノ廢事ニ屬セシ分ハ皆修メ、堀端ノ邸ヲ立テ、予備ノ米ヲ貯ヘ、鎌倉ヘ相承院ヲ修膳シ、各邸皆旧觀ニ復シ、西京伏見ノ事務ヲ修整シ、大坂三邸亦同シ、其費夥シ、專大坂ノ產物ノ商路ヨリ出納ヲ止シ、從來命シ置レタル五十万兩ノ貯金ヲ鹿兒島ヘ下シ、宇治黃檗山ニ老公ノ牌ヲ納メ、祠堂金ヲ付シ、高野山前代ノ石塔ヲ修繕シ、兩度広郷ト共ニ登山シ法会ヲ行ヒ、天保十年頃ヨリ亦広郷出坂スルコトニナリ、清熙天保六年ニ上坂セシヨリ此年ニ至リ鹿兒島ヘ下リ、大坂登セ米積船ヲ肥後ニ擬ヒ造立アラシコトヲ申セシカハ採用トナリ、三隻ヲ重富ニテ造リタル、是藩内ノ事ニ手ヲ施シタルノ初ニテ、其後百事ニ及ホシタリ、爾來硫黃島ヲ起シ、湯ノ野ノ明礬山ヲ開キ、国分ノ新田ヲ築キ、出水ノ塩浜ヲ開、肥後石工岩永三五郎ヲ招キ、甲突川ヲ修メ石橋ヲ架シ、稻荷川亦同シ、其他ノ石橋ヲ架シタルモノ數十、初ヨリ清熙カ手ニ付シ、大工阿蘇鉄矢ヲ接伴セシメ、絹織屋ハ川畑清右衛門ニ司ラセ、京師ヨリ羽二重織師ヲ下シ、養蚕ヲ各所ニ開キ、藍玉

製ヲ盛ニシ、水引ニ支店ヲ立、木綿織屋ヲ設ケ清熙ニ司ラセ、重
久佐^(次)ニ右衛門ニ主宰サセ、神社仏宇ノ造営三原経福ニ主宰タラシ
ムト雖トモ、今日ノ事務至ツテ急激ナルヲ以テ、概ネ清熙ヲシテ
監督セシメ、旬日ト雖モ家ニ安スルコトナク東奔西走、其時恰モ
職納戸奉行ニシテ、書記ノ席上ニ居金銀ノ出納ヲ司リ、城内ヨリ
二ノ丸各局ノ修繕・寺社ノ造営・道路ノ修ヨリ國産ノ事務、三原
ノ司ル所ナレトモ、清熙関ツテ為スニ非レハ成ラサル場合アリ
タルヲ以テ、之ヲ負担シ、石工・大工・土 木ノ事皆自ラ之ヲ監
督ス、天保十二年ノ冬広郷上坂スル時、深ク旅中ノ事務ヲ汝ニ託
セント思ヘ共、一時ニ多事ヲ授ケ難シ、依テ旅中共ニ毎夜ノ泊々
ニテ委ス可シ、其心得ニテ随行スヘシト命ス、サラハ九州路中ニ
テハ事ヲ終シカト問ヒシカハ、何処迄トハ云難シ、終ル所マテ從
フ可シ、去レ共大坂迄ニハ及フマシト聞キ、常ノ隨行ノ旅装ニテ
発シ、水引泊ノ晩、菱刈受持ノ町田孫太夫係リノ郷役ヲ列テ出タ
リト申出タルニ、広郷旅宿ノ頭ノ間ニ清熙ヲ呼ビ、疾ヨリ公ノ命
ヲ達セント考ヘタレ共繁劇中ニテ果サス、菱刈七ヶ郷ノ為ニ曾木
滝下ヨリ宮ノ城迄山間ノ嶮ヲ疏シ船ヲ通セントノ尊意、往年ヨリ
アラレシカ共遂ケラレス、今度疎通ノ工事ヲ清熙ヘ命セラル、御
受仕ル可シト承リ愕然、謹テ清熙ハ工業ノ事ニ精シカラサルハ君
ノ知り玉フ所ナリ、此事ハ命ヲ奉シ難シ、何卒宜ク御断リ仰セ上

ラレ下サル可シト申シタレハ、広郷少シ顔色ヲ変シ、公ノ命ヲ御
断リト申スコトカ有モノカト承リ、左様ニ候、不肖ノ私尊命ナレ
ハ粉骨碎身シテモ奉スル志ナレ共、少年ヨリ未タ工事ニ慣レス、
殊ニ彼山間ハ比類ナキ嶮阻ト承レハ千二成工ヲ見サルベシト存
スルカ故ニ辞スト申セシカハ、公ノ御眼カネニテ命セラルヲ自ラ
ノ了簡ヲ以テ辞スルト云道アルカト承リ、去ラハ御眼カネニテ命
セラルコトナラハ御受仕ル外ナシト申セシカハ、其儀ナラハ別ニ
申シ聞ケヨト命セラルコトアリ、是程ノ大事業ナレハ用人ハ即今
ニテハ三原経福ニ命セラル可キコトナレ共、此事業ニ係ル日清熙
カ考ニテ左ニ行ント思フ共経福夫レハ右ニ行ニ如スト云時ハ、兼
テ懇意ノコトナレハ清熙背クコト能ハサルモノ、如シ、因テ此係
ハ梅田九左衛門エ命ス、サレハ清熙モ知ル如ク、九左衛門ハ異見
ヲ云コトナク何事モ清熙カ意ノ如クス可シ、此意モ善ク達ス可シ
ト命セラレタリト、偕広郷ノ言ニ、此挙ヲ殊ニ速ニス可シト命セ
ラルコトナレハ、清熙ハ出水迄隨行シ、其間三日間^(タカ)ニ夜白ノ止宿
ニテ凡跡ノ用ヲ委ネ、来ル何日ニ此川内ニ来ルコトヲ今夕梅田ヘ
達ス可シ、サラハ川登リシテ曾木ノ山間ヲ検査シテ、公ニハ梅田
ヨリ申シ、己ニハ清熙告ク可シトコトニテ、出水迄隨行シ、川
内ニテ梅田ヘ会シタルコトナリ、是清熙工事ニ慣レサルカ故ニ万
命ヲ奉セストノ事ニテ、初メ川内ニテ命ヲ達シ、辞スルコト能ハ

サルコトヲ謀レト命セラレタルコトト覺ユ、翌日ヨリ係リ地方検査ノ平田六郎ヲ初メ大口年寄有村隼治・井畔覺右衛門・無役堀之内良眼房・羽月永田儀兵衛・終田十郎兵衛・本村運八等ヲ初メ數十人ヲ列、山間ノ嶮阻綱梯子又ハ棧ヲ越、其日羽月宮人村ニ至リ、梅田ハ老人町田ハ病体ナルヲ以テ天堂カ尾ヲ越、同所ニ会シ、疎通ノ議ヲ定メ、清熙ハ鹿兒島ノ急用多ヲ以テ翌未明地方検査者宇都宮藤七ト同行シ、曾木ノ滝ヲ見テ本城・湯ノ尾ヲ通行スルニ、十一月ナリシニ刈田ハナク、稲ハ草ト等シク穂ハ折テ水ニ入りタルヲ見テ、此地ハ何故カクノ如クナルカト問シカハ、宇都宮答ヘニ、君ハ知ラスヤ、菱刈ノ七ヶ郷ハ農民少ク田地ニ応セサルヲ以テ、年々上見ヲ以テ地稅ヲ輕クスル為ニ力ヲ尽サス、刈田ノナキハ郡奉行カ試験ナキ故ナリト聞キ、初テ驚キ、過日稅所普門院カ云シコトヲ思ヒ出シタルハ、其前広郷ニ從ツテ西京ニ在リシ時、大坂ニ下リ川登リニ、普門院ト云山伏ハ學問モアリ詩歌モ詠ミ兼テ交リタル故、船中ノ話ニ、即今調所太夫財政ヲ整理セラレ寔ニ大功ト云可シ、然ルニ藩内ノ農政大ニ乱レタリト聞ク、己レ山伏ニテ疎ケレ共、弟源左衛門常ニ各郷ヲ巡回シテ太息スルコトナリ、此農政迄ハ調所君ノ改正アリタキコトト心有人ノ云コトナリ、君此事ヲ勸メンカト聞キ、問ヲ得テ広郷ヘ中シタレハ、答ヘニ、予ハ財政ノ大任ヲ命セラレ、東西ニ奔走シ未事業ヲ遂ケス、農事ノ

如キハ國ニアル同僚ノ任タル可シ、内外皆一人ニテ司ルコト能ハスト聞キ、詞ヲ次ニ由ナク、其後曾木川疏通ニ係リ、初テ大口ニ往キ、大田・里村ノ両村ニテ良田ノ中ニ茅藪アルヲ見、之ヲ怪ミ郷役ニ問ヒタレハ、大口ハ人少ニシテ作り応スルコト能ハス廢田トスルヲ休地ト云、未タ人員ニ適セス休地ヲ益サル能ハスト聞キ、恰モ嘗テ稅所普門院カ言シコト前年宇都宮ヨリ聞キタルコトト符号シ、サシ置クヘキコトニアラスト考ヘ、直チニ在府広郷ニ其顛末ヲ告ケ、大口ハ肥後境ナルニ公ノ御名ニモ関シ甚タ愧ル所ナリト申し越シタレハ、問モナク便信ニ休地ノ事ハ初テ聞テ愕キタリ、去ハ再ヒ其休地ヲ点檢シテ田地ノ畝反ヨリ戸口殘ラス申越セトノ事ナリシ間、両村ニ往キ細大殘ラス告越シタレハ、其報ニ休地ノコトヲ公ニ上申セシニ、此度広郷カ帰覽ニ家ニ歸ラス、川内ヨリ川登リシ、菱刈・真幸ノ勞郷ヲ改正シ、亦上見部下リヲ廢ス可シト命セラレタリ、猶詳ナルコトハ不日上京ノ時ニ達ス可シト、夫ヨリ間モナク江戸ニ出タルニ、其事ヲ広郷ヨリ達ス、清熙申スニハ、疲勞ノ郷々旧弊ヲ改メラルハ去コトナレ共、上見ノ弊ハ百年來ノ慣習ニテ、時既ニ夏ノ半トナリ、上見ノ心得ニテ作リタルコトナレハ、此時ニ及ンテ租稅ノ全納ト令セラレテハ、世ニ申ス不教民ヲ殺スト云ニ類センカト申セシカハ、広郷佛然トシテ、既ニ公ノ命セラレタルヲ汝ヲ初メ異論ヲ唱フ可ラス、亦深ク

慮ル可シ、藩ノ癖ニテ數百年ノ慣習ヲ正スニ來年ヲ期セハ果シテ行ハレ難シ、此上ハ唯命ヲ奉シテ行フ可シト命セラレシ以來、深ク其処方ヲ考ヘシコトナリ、其後西京ヲ經テ大坂ノ事ヲ終ヘ広郷カ發スルニ臨ミ、清熙ハ例ノ如ク跡ニ残り、湍坂中ノ事ヲ終テ、小倉船ヨリ夜白鹿兒島ニ歸リ三原藤五郎ト同行シテ川内ニ來ル可シト命セシ故ニ、小倉ヨリ夜白ニ急キ三原ノ宅ニ至リタレ、二豎ノ為メニ臥シ居レリ、上旨ヲ達シタレハ、応スルニ見ル如キ病ナレハ同行スル能ハス、去レ共勉テ川内ヘハ出可シトノ事ニテ、亦夜白ニ急キ出水ニ至レハ、昨夜広郷出水ヘ着タリト、翌日出水ヲ立チ、阿久根泊ニテ久見崎ヘ至リシ日、三原來リタレ共未タ病癒サルヲ以テ辭シ、代リニ森川利右衛門東郷ニ來ルノ前夜、東郷ノ宿ニテ広郷太息シテ、此度ノ改正ハ甚タ遂ケ難シ、予カ農政ノ事ヲ知ラス、清熙亦同シ、百年來ノ慣習ヲ改ムルハ三原各郷ノ事情ヲ知ルカ故ニ隨行シテ輔ケトナサント考ヘタルニ、病ニ罹リ行フコトヲ得スト茫然タリ、広郷カ此時ノ如ク苦心セシハ初テ見タルコトニシテ、清熙云ニハ、私ハ更ニ心ヲ苦ムルコトナシ、多年ノ弊習ヲ廢セラルト雖モ、假令法ヲ持シ異議ヲ唱フル族有共恐ル、ニ足ラス、皆其時ニ臨ミ良法ノ処スアル可シ、今ヨリ悉ク云コトヲ得スト申セシカハ、広郷イヤ／＼左ニアラス、郡方ハ旧規ヲ固執シ、諸家ハ面々ノ家法ヲ守リ、一同不服ヲ唱ルハ測リ難シ

ト聞キタル故ニ、此舉ハ勸農ノ本ニシテ國ノ為メニ命セラレタルニ、若シ遂クルコト能ハサランニハ職ヲ辭センノミ、清熙ハ幸ニ君ノ拔擢ニ依テ納戸奉行ヲ奉職スレ共、是ヲ棄ル如キ屑セスト云シカハ、広郷笑ツテ、左思フカ、其時ニ至レハ予モ同シト聞シ故、君ハ御改革ノ大功有セラルコトナレハ私ノ比ニアラスト、果ハ大笑イトナリタリ、是ニ於テ熟考セシニ、上見ノ弊ハ菱刈ノ七ヶ郷根本共云シカ、^(後)后ハ各郷ニ遍クナリタレ共、農民少クシテ田作ニ手ノ及ハサルヨリ起リタルコトニテ、次ニ真幸五ヶ郷・庄内等ニモ及ヒタルコトナルニ、曾木川疏通ハ菱刈ヲ救フノ為ニテ幸ニ通川トナリシ故、夫迄天堂ヶ尾ノ嶮ヲ越ヘ民力ヲ費シタルヲ、羽月ノ下ノ木場ニ藏ヲ立テ納ルコトニナリ、且藏ノ納ノ枿米壺石ヲ納ルニ凡ソ壺斗ヲ減スルノ法ヲ立、真幸モ加治木ノ藏ニ納メタルヲ栗野ニ藏ヲ立、大ニ便ヲ得タル故ニ農民ノ為トナリ、其外巡回中各郷ノ疾苦ヲ問ヒ、害ヲ除キ、便ヲ開キタル、クダ／＼シケレハ記サス、是清熙十年間藏役タル時、古來ノ枿ヨリ納ノ麥シタル原因並ニ各郷ノ習俗下情ニ兼テ心ヲ用ヒタル故ニ、其年ヨリ租税全納トナリタリ、去共窮民貯ヘナクシテ春後夏ニ及ヒ苦シムコト有シコトヲ慮リ、肥後ヨリ米八千石ヲ輸入シテ、山川町ノ藏ニ入レ不意ノ用ニ備ヘ置キタレ共、翌年ニ至リ其米ヨリ出スニ及ハサリシナリ、其以來凶歲モナク年々全納トナリ、亦米ノ出納ヲ嚴正ニ

シタル故、年々余石ヲ生シ、各郷數ヶ所ニ穀藏ヲ立テ貯へ、三五年中二十万石ニ及ホシ凶歲ト軍備ニ供ス可キ心得ナリシカ共、職ヲ辞シタル故ニ果サス、此上見ノコトハ廢スルノ令ハ八月ニテ、上見ノ郷々愕然トシテ、時既ニ八月中旬ナレハ、麥刈・真辛ニ限ラス各郷ニ皆整習アツテ恒例ノ風ナリシニ、實ハ財政ノ困難ヨリ納ノ枿モ年々増シ暴斂トナリ、夫カ為ニ生シタル整習ナリシカ共、一時ニ改正トナリ大ニ農民ノ為トナリシ故ナリ、此納ノ枿ヲ旧規ニ復スルニハ種々ノ苦情モ多ク甚タ難キ事ナリシカ共、齊興公毅然トシテ動キ玉ハサル故ニ行ハレタル所以ナリ、広郷君側ニノミ在テ各郷民間ノ情・藏々納等ノコトハ更ニ知ラサル所ナレ、詳ニ弁解スレハ忽チ会得シテ少モ過ツコトナシ、前ニ濱村カ言ノ如シ、亦旧藩ノ米穀出納ハ三原經福ニ司ラセタルニ、天保十四年ノ夏足輕ノ扶持米足ラスシテ暫渡スコトヲ停メタルコトアリ、広郷カ云ニハ、足輕ト云ハ輕キ活計ナルニ、夏ニ向ヒ此ノ如クナルハ予カ面目ニモ関ス、米ノ出納ヲ經福ニ問フ可シト命セラレ、經福ニ問ヒタレハ、米ノ出納ハ清熙モ知ル可カラス、本ハ十二万石ニテ出ルハ十五万石ニ及ヒ、不足ノ米ヲ己ノ胸臆ヲ以テ左右シテ今日ヲ送ルコトナリ、足輕ノ扶持モ不日渡ス可シ、此旨ヲ広郷ヘ申スベシト答ヘタル故、広郷ヘ向ヒ、經福ハ米ノ出納ハ知ラスト申シタレハ、經福カ不知ト云ハ如何ント聞キ、君能慮リ玉ヘ、年々二三

万石ノ不足アラハ五年ニシテ皆無トナラン、然ルニ其コトナキハ不足ナキハ明カナリト云シカハ、汝若シ米ヲ司ラハ足ル可キカト云シ故、私司ラハ足ラサルコト有ル可ラスト答ヘタリ、是米ノ出納ハ多年米穀ノ卑職ニ從事シ、慣習・弊害悉ク視察シタルカ故ナリ、然ルニ其年ノ十一月經福沒ス、三日過テ広郷云ク、汝日外米ノ出納ハ能ス可シト云シコトアリ、弥出納ヲ命セラレハ奉ス可キカト聞キ、私ニ委ネラレシカハ今ト法ヲ殊ニス可シ、米ノ出納ニ係ル吏ト議定シテ米ノ出納ヲ定メ、私ヨリ初メ其法ヲ換ヘ可カラス、願クハ君ヲ初メ同僚ノ方モ口ヲ容レ玉ハサル可シト云シカハ、己ノ口ヲ容レサルニ同僚何ソ口ヲ容レラル可キ、然ラハ命ヲ奉セント、各局ト議シテ、無用ヲ省キ嚴正ニセシカハ、其年ヨリ有餘ヲ生シ數万石ヲ貯ヘタリ、是上局ノ人ハ得失ヲ知ラス、下職ニハ種々ノ慣習アツテ出納ヲ乱ルコトヲ知ラサルノ致ス所ニシテ、情実ヲ暗ニスレハ別ニ奇法アルニ非ス、上ノ施ス所下是ヨリ甚シキモノ有ハ古今ノ通弊ナリ、後チ職ヲ辞スル時ハ三万余石ヲ各郷ニモ穀藏ヲ立、江戸・大坂ヘモ予備ノ米ヲ貯ヘ、今三五年ノ間二十万石トシ凶歲・軍備ニ供セント期シ、藏ハ肥後八代ノ藏・南部ノアセ藏・麻布ノ米沢邸ノ藏ニ擬ヒ立タリシコトナリ、

【〇二 肥後石工岩永三五郎ノ事】

一肥後石工岩永三五郎カ良工ナルコトヲ誰ヨリ広郷ヘ伝ヘシカ、天保十一年ノ比彼ヲ雇ヒ来リ、清熙ニ使用ノ責ヲ負ハシ、多少ノ試験ヲ遂ケテ後、初二永安橋ヲ架シ、稻荷川ノ石橋皆架シ、夫ヨリ甲突川橋々亦同シ、三五郎ハ筆算ニ拙キ者故、阿蘇ヲ副フテ常ニ之ヲ補シ、三五郎カ性質淡薄寡欲、石ニ良工ナリシハ人ノ能知ル所ニシテ、水利ヲ視、得失ヲ考ヘ、大数ヲ測ルニ敏ナル所ニシテ、初テ見ル地ト雖モ神ノ如シ、故ニ藩内出水新田、阿久根ノ古田修繕、川内仏生橋・水ノ手橋、高江新田修繕、市来水道、伊集院道路、山川ヨリ鹿兒島迄橋々、指宿新宮社鳥居、鹿兒島甲突川ノ如キ郡山境ヨリ川下迄手ヲ施サ、ルナク、国分小村新田開発、濱之市井樋居ヘカエ、加治木新田、其他拳テ数フルニ遍アラス、藩内石工慶長中上山ノ城建築、元禄・享保比迄ハ石工ノ良工ノ築キタルモノアレ共、イツ比ヨリカ国産ノ柔石ヲ以テ外見ヲヨクシ、甚タ拙キ風トナリタルヲ、堅牢ニ一変シタルハ岩永カ功大ナリト云可シ、清熙カ辭職シテ間モナク岩永モ帰国シタリ、初テ来リシヨリ嘉永二年迄八九年間、藩内残ル所ナク工事ヲ修メ、大ニ永遠ノ工基ヲ興シタリ、

【〇三 大工阿蘇鉄矢ノ事】

一大工阿蘇鉄矢ハ後ニ弥次右衛門ト云テ管轄方ニ登用シ、初ヨリ改

革方ノ新築修繕皆司ラセ、大社ハ水引新田宮・東霧島勅詔院・神徳院、社寺国分大汝守君神・太口西原八幡・忠元靈社、其外社寺大寺ハ南林寺・妙国寺・龍翔寺・般若院・指宿神宮社、両度ノ巡見止宿休ノ仮屋、亦岩永ニ副テ石橋架方・新田開発ノ類皆随入ス、神社ノ新造數十、寺院亦同新造堂數十ニ及ヒタルハ未古來聞サル所ナリ、平日精悍勉強、常ニ夜ヲ以テ日ニ繼、巡見中ノ如キ清熙ニ從テ終日勉メ、夜ハ翌日ノ道路・小休・止宿ヲ檢査シ、凡一七日間清熙ハ駕中ニ睡リタレ共、阿蘇ハ終夜歩行ス、今年八十三四、眼ヲ病テ能視ルコト能ハス、平佐ニ帰郷ス、今家余財ナク辛フシテ口ヲ糊スル由ナリ、其清廉ナリシコト明ラカナリ、

【〇四 支族門閥家ノ家政改革ノ事】

一一時広郷ノ一タノ話ニ広郷ノ云ニハ、今支族門閥皆財事ニ困迫スル由ナリ、国ノ干城タルベキ家々ニテ其任ニ堪ヘサルハ捨置カル可キコトニアラス、是ヲ改メ正サンニハ何レノ家ヨリ手ヲ施サンカト聞タリシ故、暫ク考ヘ、之ハ花岡ヨリ初メラレンカト云シカハ、広郷イヤ／＼予ハ新城然ル可ク思フト、三日過テ後広郷ノ云ニハ、先夜ノ言汝カ云如ク花岡然ル可シ、然ル時ハ汝ハ公事ニ忙フシテ誰ソ使役スルニアラサレハ為シ難カラン、新納休右衛門ハ能ク人ト為リヲ知ル、性誠実周密ニシテ其任ニ勝ン、汝朝夕指揮

セハ事成ント考フ、汝休右衛門ヲ知ルカト聞タリシ故、未一面セ
スト答ヘタレハ、翌朝弊宅ニ来リシ故、^{イ「種々」}試ニ応答セシニ、聞シ如
クナリシヲ以テ広郷ヘ申シタレハ、清熙ヲシテ之カ改正ヲ命セラ
レ、百事新納ト協議シテ手ヲ施シタルニ、家從ニ上野讓之助ナル
者正フシテ能守リ、新納深ク心ヲ用タル故、其年ヨリ余財ヲ生シ、
一邸旧觀ニ復スルニ至リ、其后島津安芸忠剛ハ齊興公ノ弟ニテ今
和泉ノ家ヲ繼ラル、登城ノ節清熙ヲ招キ、予カ家尋常困苦ト云類
ニアラス、自ラ費ヲ省キ用ヲ節スレ共如何ン共スル能ハス、願ク
ハ此旨ヲ調所広郷ヘ伝ヘ、君公ノ庇蔭ヲ蒙ラサレハ改ムルコト能
ハスト、清熙具ニ広郷ヘ伝ケル事ヲ請フト依頼セラレタリシ故、
広郷ヘ申シタレハ、公ノ聞ニ達シ、彼家ノ困苦ハ疾ヨリ聞所ナリ、
花岡ト同シク広郷司リテ、海老原ニ委任シ、新納ヲシテ改正ス可
キトノ命ヲ受、其年ヨリ所有地ノ産業種子蠟仙ヲ増シ、忠剛家政
ヲ勉ラレタリシ故、是又其年ヨリ余金ヲ生シ一邸整理シタリ、其
後重富・垂水・種子島ノ家皆連枝タリシ故、清熙ト新納ヲシテ改
正ヲ命セラル、其頃迄新納ハ草牟田ニ居住シ、早天ヨリ夜分迄清
熙方家ニ一日何度トナク往來シ、毎事ニ談シタル故ニ、近隣ニ移
シ五郎ノ家政ヲ指揮セシコトナリ、門閥支族ノ内凡二十家ハ国家
藩屏ニ立タル家々ナルニ、文政ノ比ニ至リ皆已レノ所有ノ出納ヲ
恣ニシ、五六家ノ外財政ニ困ム事通弊トナリ、軍賦ヲ立ルニ及ン

テ有名無実トナリ、殊ニ新城・花岡・垂水・加治木・重富・喜入
・今和泉・鹿籠・知覽・日置・吉利・永吉ハ沿海ノ地ナレハ、海
防ノ用意ナクンハアラス、平佐・宮之城・都之城ハ要樞ノ地、其
他ハ蕞爾タル小郷ナレ共、皆干城ノ根ヲ堅クシテ、己ノ分限ヲ顧
ミテ費ヲ省キ、用ヲ節シ、有事ノ口其任ニ堪ヘシメン為ニ、先ツ
三家ヲ初財政ヲ正シテ外ニ示シ、有名無実ノ弊ヲ矯正セラレタリ
シコトナリ、偕家格ノ面々其任ニ堪ヘサレハ家格を減ス可シト、
嚴令ヲ發セラレタリシ故、皆奮發シテ家政ヲ整フコトニ一變セリ、

「〇五 甲突川架橋及ヒ改修等ノ事」

一前ニモ申ス如ク、甲突川ノ洪水毎ニ溢レ人民ノ苦ミトナリタルヲ、
新上橋・西田橋・高麗町橋・武ノ橋、川上ノ方ハ玉江橋・入佐土
橋、皆岩永三五郎カ手ニテ右橋ヲ架スルニ及ヒ、新上橋ヨリ川下
ハ川幅太ニ広狭アツテ川内ノ堤ヲ崩ス故ニ、被害ヲ除クコトヲ広
郷ヨリ清熙ヘ委任シ、広郷ハ橋々ヨリハ見タレ共川筋残ラス見タ
ルコトハナカリシナリ、初メ新上橋ヨリ川巾ノ定尺ヲ以テ繩ヲ引
キ障リアレハ欠キタルニ、初メ繩ニ障ル土地ハ川ノ干寄地ヲ恣ニ
自地ト為シタルコトト思ヒシニ、其地ノ主ニ問ヘハ、古來ヨリノ
地ナリト、百年以上ノ樹木モアリ、堂社等近來ノ物共見ヘス、其
地ニ竿ヲ試ミテモ余地アルコトナシ、其地ニ從ツテ定尺ノ如ク川

ヲ通シ、間ニハ邸ノ半ヲ欠キタルモアツテ、苦情ヲ吐ク人モアリ
タレ共、適宜ニ処シタリシコトニテ心ニ安ンセス、近頃ニ至リ慶
長以前ノ景況ヲ聞テ疑ヒヲ解タリ、上山ノ城以前ハ甲突川、今ノ
新上橋ヨリ東ノ方平ヨリ城ノ下千石馬場・加治屋町ヨリ自在ニ流
レ、俊寛堀辺ヨリ下町ノ海ヘ流れ入タル由ニテ、萩原又ハ窪田瀬
ノ有ハ清滝川トモ云イ、諸所一面ノ真砂ニ松茂リテ、往古ハ奥ノ
松原トカ云名所ナリシ由シ、亦山ノ口地藏堂ノ辺ハ少シ高ク、南
林寺ハ歴代歌ノ通り海潮ノ中ナリシナラン、城ノ立タルヨリ支族
諸士皆諸所ヨリ集リ宅地ヲ広漠ノ地ニ立タリシナラン、伊勢家地
所ハ葭洲原ナリシト聞クコトナリ、今ノ川筋ハ浅キ瀬ニテ水ハ流
レタル由ナリ、世ノ變遷ト云ハ後年ニナレハ驚クコト多キモノナ
リ、上ノ多賀ノ山モ磯ノ邸ヲ開キ玉ヒタル時、今ノ新道モ開ケ、
多賀ノ山ヲ削リ道ヲ立ラレ、其根ハ其俣ナリシ故、稻荷川ハ古來
今ノ堀筋ヲ流レ、上ノ濱ヨリ海ニ入シナラン、鶴江崎重富・今和
泉ノ濱邸アリシモ干寄地ヲ邸トナシ玉ヒシナル可シ、甲斐殿道行
ト云座頭ノ歌ニ、戸柱ノ橋ノ上ヨリ見渡セハ出入船ノ織ル如クコ
カレテ物や思ラント有ニ思ヒ合スルコトナリ、

【〇六 祇園之洲海岸辺ノ埋立・台場築造等ノ事】

一トセ花倉ノ別荘ノ検査ニ広郷ニ從ツテ行キ歸リニ、広郷ハ駕籠、

清熙ハ歩行ニテ磯道ヲ同行シ、潮音院ノ岬ニ來リ、広郷大ニ驚キ、
予カ若年ノ比ヲ考エレハ、川筋二十砂ノ出タル夥シキコトナリト
云シ故、清熙考ルニ、祇園ノ橋涯ヨリ田ノ浦迄ノ間海岸ニ築添ヘ
台場ヲ築キ、其余上ハ余地ナク有事ノ日兵ノ屯所トシテ、其用ニ
備ヘラレンニハ川下ノ土砂ヲ用ヒテ埋地ニセハ如何ント申セシカ
ハ、夫ハ一挙兩得ナリ、則チ今日其地ヲ定メン、ト阿蘇鉄矢ヲ召
列タリシ間、折節干潮ニテ清熙ト鉄矢ト海中ニ入り、築地ノ縄ヲ
定メ、龜絵圖ニテ公ノ聞ニ広郷申タレハ、許可トナリ、郡奉行今
井確太郎ニ命シ、今ノ如ク築キタルコトナリ、祇園ノ杜モ山ノ下
ナリシカ共、公ノ命ニテ今ノ地ニ鎮座トナリタル、夫ヨリ川口下
リタル故ニ、稻荷川ノ流即今迄モ善クナリタリ、

【〇七 城下河川洪水ト岩永三五郎ノ教訓等ノ事】

岩永三五郎事業甚タ粗ナルカ如キコト有リシカトモ、永安橋ヲ架
シタル後初テ出水ノ時、清熙モ心遣シ、未明ニ橋涯ヘ臨ミタレハ、
水底ニ何カ有ルヲ見、之ヲ怪ム内三五郎水底ヨリ出タリ、何事ヲ
ナスヤト尋ネタレハ、橋ノ根石ヲ探リ見タリ、然レトモ少シモ心
遣ヒナシト云ヘリ、其心ヲ用ヒタル是ノ如シ、亦稻荷川ハ滝ノ上
ヨリ馬繫キ場迄ハ、洪水ニハ三四里ノ路程両側ノ山ヨリ出ル水ナ
レハ、稻荷社前小路ニ溢ルレハ障リナケレ共、馬繫場ヨリ戸柱橋

ノ間、側皆士族居地ニテ、本水量ヲ計ラスシテ通シタル川ト見得タリ、洪水ニハ馬繫場ヨリ福昌寺田地山下迄水セキ上ラサル能ハス、亦一ツ橋涯ノ溝モ其節ハ水溢レ出ルニ任ス可シ、戸柱橋ヨリ下ハ少モ水吐ニ害アルコトナシト云ヒ、亦甲突川橋ヲ架シ終リ、小野村・原良永吉村・伊敷村・犬迫村等ヨリ出ル小川ノ水流堤防皆修繕シ、新田溝ノ小川モ小太鼓橋ヲ架シ、西田村水吐等皆修繕シテ、右ノ村々山野ノ川ニ沿ヒタル所ハ開拓ヲ禁シ、竹木ヲ植ヘテ修繕ノ用ニ供ス可シト令シタルハ、沿川ノ開地ハ雨毎ニ土砂ヲ洗出シ、河床高クナリ水害トナルコトナレハ、後年ニ至リ是ヲ禁ス可ト岩水方云シコトニテ、其村々ハ堅ク禁シタルニ、御一新ノ際ヨリ山林開拓ト云コト流行シテ、山野皆開ノ法行ハレ、川下ノ浚ヘハ廢シ川底ノ高クナリタル故、新屋敷ヨリ沖ノ村辺ノ害ヲ生シタリ、夫ヨリ遡ラハ新上橋辺西田皆水害ヲ及シ、天神馬場・二本松馬場・山ノ口馬場・加治屋町・新屋敷、従前ノ溢レタル比ヨリモ一層水難ニ及ハンカト思フコトナリ、

「〇八 新納忠元ト忠元靈社創建ノ由来ノ事」

一大口ニ新納忠元カ靈ヲ忠元靈社ト祀ラレタルハ、曾木川疏通ノ時
清熙 大口・羽月・曾木ニ有リシニ、菱刈ノ人民肥後ニ清正ノ
靈ヲ祀ルニ擬ハンコトヲ人民ノ願フヲ聞、菱刈疲弊シテ人氣振ハ

ス、耕作ニ怠リ、隣ノ肥後ハ諸国ニ勝レタルニ、此挙アランニハ志氣ヲ奮発スルノ助トナラン、清熙モ亦兼テ忠元ヲ欽望スルカ故ニ、新納駿河・新納矢太右衛門ニ謀ツテ忠元ノ功績ヲ撰ヒタルヲ、東京ニ出テ広郷ヘ申シ、公ノ聞ニ達シタレハ則許可ニナリ、清熙カ下リノ時西京吉田家ヘ願ヒ、先此節ハ靈社ト崇ム可シト命ヲウケ、西京ニ出タレハ、本田三位滯京中ニテ速ニ許可ナリタルヲ、清熙持下リ、其後今ノ社地ニ鎮座トナル時モ清熙勤メタリ、忠元ノ功烈ハ皆人ノ知ル所ナレ共、略左ニ掲ク、

大口ノ城ハ、今見レハ半ナル小城ナルニ、能モ大敵ニ抗シタルコトナリ、豊公ノ征薩ノ日、忠元此城ニ籠リ、寄手ノ粮尽キタルヲ聞キ、一俵ヲ贈リ、是ヲ食フテ攻メ玉ヘト云送り、龍伯公泰平寺ニテ降服アリタレ共猶城ヲ下ラス、龍伯公ノ命セラレテ城ヲ下リ、天堂方尾ニテ豊公ニ謁シタル時、豊公忠元ハ己レニ向ヒ再ヒ弓ヲ曳心得有カト問玉ヒシカハ、主人龍伯サヘ御敵対仕レハ何ケ度ニテモ御敵対仕ル可シ、去レトモ龍伯ハ一度御旗下ニ帰シタル上ハ再ヒ背キ奉ル者ニアラスト答ヘタルニ、豊公着玉ヒタル胸服ヲ長刀ニカケ下サレタレハ、拝伏シナカラ拝戴シタルニ、上髭ヲチンチロリントヒネリアケト云掛玉ヒタルニ、取敢ス鼻ノ本ニテ鈴虫ソナクト中シタル由、夫ヨリ直チニ御供ニテ大口ヨリ肥後境迄ニテ御暇帰城ノ由、常ニ召使ヒタル大口ノ有村隼人ヘ、武士ハ和歌

モ讀ハナラス、和歌ヲ讀ニハ源氏ヲ見ル可シ連ニ卷ヲ写シ与ヘタル、彼家ニ今ニアリ、亦義弘公・久保公朝鮮渡海ノ折

あちきなやもろこしまてもおくれしとおもひし事もむかし

なりけり

右外多ケレ共略ス、武士ニハ風流モアリ、忠義ニ厚ク、然ルニ大口木ノ氏村ノ一小村ニ安シタルハ、漢ノ張子房カ留ニ安シタルニ同シキ事ト、清熙広郷ニ申シタルハ事ハ考フ心アツテ忠告ノ意ヲ含ミタリシ事ナリ、又靈社ヲ立ル時不思議ニ思ヒシ事多々アリタレ共略ス、関ヶ原ノ役後、黒田・加藤ノ両氏肥後八代へ出陣、隙ヲ窺ヒタルニ防戦ノ用意ヲ備へ、肥後ノ加藤ガクルナラハ塩硝着ニダコ会釈、夫テモ聞スニクルナラハ首ニ刀ノ引出物ト歌ハセタル、大口大田村開墾ノ時、地堅メニ謡セタル由ナルニ、大田村・里村ノ旧地ヲ清熙カ認テ申シタルヨリ農政ノ初トナリタリモ、忠元カ菱刈ノ疲弊セシニ因縁アリト云シカ、忠元カ歌教種ヲ掲ク、天正四丙子年近衛関白前久公、氷という題を賜りたる時

さへわたるよはの風やかけつらむ氷のはしとなれる朝河

少将忠恒公ト申セシ時、御衣カツケラレシ時

おふけなき君かみけしのかにふれてしはし我かと身をたとり

イ「たとり世」

けり

山月

出るよりあらしを空にともなひて雲にはなる、山の端の月

九月尽

草の葉のはかなき露をかたみとも思ひおきてや秋はいぬらん

題しらす

さまぐにかけとたのめハふして思ひおきても君をまついのる
かな

「都にのほりける時海路」野しまにて

夏なから舟の綱手のななきよも夢ハみしかきうき年なりけり

立春

音羽山こえくる春のしるしにて氷うち出る滝つしら波

柳

花の色ハさもあらはあれ浅みとり柳か枝の露のあけほの

「〇九 大砲・銃隊ヲ要トスル軍制改革推進ノ事」

一軍政更革ハ、清熙十二三ノ頃ヨリ家ニ甲州古流ノ伝書アツテ、常ニ見テ、武田信玄ハ名将ナルニ此書ハ真ノ伝ニアラシト疑ヒ、平田宗可ニ質問セシニ、其論ハ徳田氏カ卓見アリトテ民信録ヲ見シヨリ、甲州流ノ時世ニ適セスシテ拙ナルヲ知り、猶徳田氏カ著書ヲ探リ、軍備ノ闕典ナルヲ歎クコト年久シク、平田宗可ハ西洋ノ情実ヲ知ツテ海防ノ備ハラサルヲ憂ヘ、世ニ狂人ト称セシモ心ト

セス、兵備係リノ家老ノ担任スル所ニテ軍師ヲ司ル職ナレハ、草野ノ人ノ論スル能ハサル所ナリシニ、清熙財政改正ノ調所広郷ニ随從シ、後ニ藩政ノ闕弊ヲ矯正スルニ臨ミ、甲州流ノ時世ニ適セスシテ軍備ニ迂拙ナルヲ広郷へ具上セシカハ、広郷モ亦合伝流ノ説ヲ聞キタリシカ、清熙ノ説ヲ容レ、公モ西洋ノ銃陣ニ帰嚮アリシカ、其時長崎高島カ銃隊ノ伝ヲ成田正右衛門カ伝ヘ歸リタルニ遇ヒ、公清熙カ意ヲ容レ玉ヒ、軍議ノ一局ヲ設ケ講究セシメラル、一日奥ノ書院ニテ、主席ハ旧軍局ヲ司ル家老島津石見、次ニ軍師園田与藤次カ後見大野清右衛門、次ニ園田、其ヨリ軍局改役書記数名列席ス、客位ハ調所広郷、次ニ側役二階堂石八郎・海老原宗之丞・得能彦左衛門、次軍賦役書記ナリ、広郷席ヲ進テ、今日軍務ノ旧式ト新ニ論スル所ト其利害得失ヲ議定ス可シト命セラル、宗之丞軍師へ質問セヨト命ス、宗之丞席ヲ進メテ、園田ニ向ヒ十余条ヲ問ヒ、今日専ラ銃戰トナリ五段備ノ如キ軍備ニ適セサルヲ問、園田己ノ家ハ古来立ラレタル規則ヲ守ツテ、今ノ世ニ適スル不適ハ更ニ論セサル所ナリト答ヘニテ、公ノ御聞ニ達シ、旧局ヲ廢セラレ、新ニ立テラレタルハ島津家ノ兵法ヲ本トシ、専ラ銃隊ヲ組織シ、大砲・小銃ヲ要トシ、亦甲越諸家・支那ノ良法モ取捨折衷シテ時体ニ応スルノ法ヲ設ケラレタリ、然レ共大砲・小銃ノ鑄製、車台・彈藥・銃藥ノ製、高島カ伝ヲ本ニシ、西洋ノ原書

ニ依テ製シ、大砲・小銃皆試ミタルニ良工モ意外ニ生シ、数千挺ヲ鑄、大砲モ亦同シ、江戸下曾根氏モ其他モ未開ケサルニ先立、西洋ヨリ渡サンニハ容易キコトナリシカ共、旧幕ノ嫌忌ヲ懼リ、皆原書ヨリ訳シ、高島ノ伝ヲ參考シタルニハ成田正右衛門・田原直助等思慮ヲ尽シ、幸ニ良工モ有テ大砲モ五十ポンド迄ハ度々試ミ、實用ニ心遣ヒナキ様ニ備ヘタル故ニ、戊辰ノ役鳥羽・伏見・淀ヨリ東京ノ上野其他ノ争戰ニモ兼テ銃隊ニ心有テ大ニ効驗アリタルナラン、戊辰ノ役伏見・鳥羽・淀八幡ノ間ノ事ヲ後ニ篠原国幹二問ヒタルニ、夫ヨリモ上野程前後左右苦ミタルハ無リシト聞キ、実地ヲ試験シタルニ篠原ノ言ヲ信シタリ、其時從前ノ大砲アラハ破ルニ難キコトアラシト考ヘタリシ、

「一〇一〇 清熙、藥丸一流ノ音興試見ニ左袒セシ事」

一銃隊ヲ立タルヨリ弓槍等軍備ニ無用ノ如クナリシカ共、大小刀ハ常ニ帶シ小銃ヲ持シ故、擊劍ハ接戰ノ要タルニヨリ、從前俗ニ云形稽古ノ流多ク、稀ニ蔭野流アリ、藥丸ノ一流ハ私ニ立タル流ニテ師家ト称シ難キ程ナリシカ共、彼門ノ高足ナル永田新八郎ヨリ詳ニ聞キ、実場ニ功アラシコトヲ信シ、公ノ御聞ニ達シ、初テ磯邱ニテ東郷ノ流ト等シク試見トナリタリ、清熙大ニ左袒セシコトナリ、

「〇一 旧習一洗、多端二巨リタル軍制改正ノ事」

一軍政更革ハ天保十四年比ヨリ初メタルカ、年々調所広郷ハ冬初鹿
 児島ヲ立テ、九州・中国ヲ経テ三十日ニシテ大坂ニ着ス、清熙ハ
 鹿児島ノ用ヲ終ヘ後レテ立コトモアリ、亦小倉舟ニテ大坂ヘ先ニ
 着コトモアリ、大坂ノ用ヲ終ヘ、西京ヘ出、年末江戸ニ出ルヲ恒
 例トス、清熙隨行ス、春末江戸ヲ發シ、西京・大坂ノ用ヲ終ヘ歸
 麿ス、鹿児島ニ在ル概ネ三四五月、天保十四年迄ハ鹿児島ノ事務
 三原経福ニ委ネタレ共、経福同年十一月没シタル後ハ、金穀其他
 皆清熙ヘ継シム、従前ヨリ繁劇ノ上^{イ「百事繁事」}百事ヲ掌リ、夜ヲ以テ日ニ繼、
 旬日モ家ニ安居スルコトナク、其中ニ兩度ノ巡見アツテ各郷ニ巡
 回シ、兵事ニ專ナルコト能ハス、去レ共大砲・小銃ノ鑄製等ハ田
 原・成田カ尽力ヲ以テ功ヲ奏ス、田原カ宅内ノ丸ナレ共、一日ノ
 中ニ何ケ度モ諮詢アルヲ以テ、近隣ニ居宅ヲ移サシメラレタリ、
 各郷巡回スルニハ、一隊ノ兵士ヲ率ヒテ其郷ヲ導キ、海岸ハ台場
 ニテ訓練ス、其比未タ蒸氣船ナカリシ故、風波ヲ凌クハ鯉船ノ外
 良船ナキ故、串木野羽島ニテ鯉船ニテ大砲ヲ試ミ、諸所ノ訓練、
 銃藥・彈藥ノ製造、貯蓄ノ蔵ヲ立、百二十余郷ニ訓導ヲ施シ、車
 台ノ製造・道路ノ修繕・海岸ノ台場等、至テ多端ニ巨リタル事ナ
 リキ、纔三四年ノ間ニ軍務ノ大業ヲ起シ、百年余崇奉シタル法ヲ

変シ、弓・槍・小筒ノ旧習ヲ一洗シ、人ノ眼ヲ開キタル故、自毀
 譽誹謗ノ帰スル所トナリ、其衝ニ當リタレ共、公ノ断然トシテ動
 キ玉ハサルヲ以テ能行ハレタルニ、嘉永元年調所広郷没シ、翌年
 清熙職ヲ辞シ、其事終ヘス、三年ヲ期セハ百事整理ス可シト思ヒ
 シカ共、財政國產ノ事業ハ緒ニツキ、農政モ租税全納、流民帰郷、
 未タ闕漏ナキニモアラス、城下ノ士族五千戸ノ内貧困ノ士三四百
 戸有テ、其処方ニ苦ミタル故、千戸ヲ台場兵士ト定メ、録ヲ与ヘ、
 鹿児島灣内沿海ノ地ニ新田ヲ築キ、各郷ハ其郷々山野、其他荒蕪
 ノ地ヲ開墾シテ兵士ノ録ニ与ヘ、農兵法ニ擬ヒ郷々ノ便宜ニ從ヒ
 方ヲ処シ、長島ノ三小島ヨリ甌島・硫黄・黒島・竹島・口ノ永良
 部島・七島・屋久島、鯉其他ノ漁土地ノ宜ニ從ヒ出產ノ道ヲ開キ、
 種子島等ハ即今未開ノ地モ有由ナレハ残ラス手ヲ施シ、自ラ三島
 ・沖ノ永良部島・与論ヨリ琉球ニ波及シ、先島ト称スル宮山・八
 重山ノ諸島迄モ開カンコトヲ考ヘ、然ル時ハ肥後ハ隣国ナルヲ以
 テ殊ニ親睦ヲ固クシ、筑前ハ近親其外ノ侯伯皆連和シテ、沿海變
 ヲ生セン日ハ各国ニ先ツテ開キタル銃隊ニテ援兵ヲ出シ、五島ノ
 如キ此藩ノ漁民ノ便トスル所ナレハ兼テ和好ヲ結ビ、日州飢肥・
 高鍋・延岡、皆最爾タル諸伯ナルヲ以テ急ヲ救ヒ応援ノ約ヲ定メ、
 米良・球磨等境ヲ接スル地ナレハ、足ラサルヲ補ヒ余リアルヲ易
 ルノ道ヲ立、道路ヲ開キ交通シ、漸次ニ手ヲ施スノ含ニテ小林川

モ浚へ、球磨ノ道モ平ニシタルコトナリ、亦御作事方ヨリ人馬繼所・築地茶屋・細工所・垂水下邸出物藏ノ地、海岸ニ堅牢ナル台場ヲ築キ、其根ニ兵士ノ屯所ヲ置、亦堤ヲ築キ、其内ニ出物藏・米藏ヲ立、海面ヨリノ砲射ヲ防キ、左右前後ニ海水ヲ廻シ運輸ニ便シ、其内ニ兵学校ヲ設ケ、兵事ニ長シタル人ニ司ラセ、城下諸士ヨリ各郷ノ兵士ニ教へ、大砲・小銃ヲ備へ、東ハ磯道ヲ経テ日州ニ達ス可ク、南ハ谷山ヨリ指宿・山川沿海ノ地ニ達シ、西ハ水上^{〔海〕}街道ヨリ出水ニ達スルノ道ヲ開キ、隣国ニ応援スルノ用ニ供セ^{〔海〕}ンコトヲ謀リタルコトナリ、不意ノ用ハ各郷ノ便宜ニ從ヒ糧米ヲ貯ヘ軍備ト凶荒ニ供セント思ヒシコトナリ、唯船ノ運搬ナキニ苦心セシニ、今ノ世ナレハ蒸氣船ノ三隻モ備ヘアランニハ心ノ保ナル可シ、是等ノ大業成功ニ至ラシメンコトハ、本齊興公皇恩ニ奉答セラルノ志ニテ、調所広郷ヲ拳ラレ財政ヲ整へ、初重豪公・齊興公ノ志ナリト雖モ、事ヲ処スルニ才ニ任シ能ヲ使ヒ、江戸・西京・伏見・大坂・藩内、多年国用ノ不足シテ百事廢類セシヲ、皆旧觀ニ光リヲ増シ、天保十年以來ハ藩内ノ弊ヲ矯メ、害ヲ除キ、農政ヲ修メ、軍備ヲ革メ、二十余年ノ間勉メタルハ、慶長・元和以前ハ措テ論セス、治世トナル後、二三良臣ノ功アリタルハ聞ト雖トモ、広郷カ功績ノ如キ著シキ効ヲ顯ハシタルハ其比ヲ知ラス、清熙其尾ニ付テ初ヨリ忌諱ヲ避ケス顔セラ犯シタレ共、却テ狂愚

ヲ容レ、公モ亦眷顧ヲ垂玉ヒ、少年ヨリ島津家ニ忠ヲ効サンコトヲ深ク志シ、兵政ノ如キハ時ノ機ニ会シテ用ヒラレ、清熙不才ニシテ学識ナク、幸ニ島津家ノ故実・攻城・野戰承、忠良ノ嘉言善行伊地知小十郎ニ問ヒ、学識アツテ兵事ニ心ヲ用ヒ、其比既ニ西洋ノ情態モ開ケ、国ノ欠典ナルヲ慨クハ平田宗可、甲越楠家ノ伝ヨリ種子島ヨリ伝ヘタル銃ノ原因ヨリ、擊劍ノ諸流、槍・長刀・柔術ノ伝、荻野其他ノ砲術ハ云ニ及ハス、知ラサルコトナキハ法元六左衛門、徳田カ著書・遺伝ハ川崎四郎左衛門等ニテ、昼ハ事務ニ執掌スルヲ以テ、夜々会シテ其說ヲ聞キ講究シ、旧ヲ廢シ新ヲ立ルノ術ニ当ルコトナレハ、和漢ノ兵書ヲシテ威南塘カ練兵日記ノ類ニ至ル迄、夜曉迄歴覽シタリシ事ナリ、然レ共公ノ威重ニ服シテ意見ヲ唱フル人モナカリシナリ、是ヲ以テ幼年ヨリノ素志ヲ遂ケタルコトナリ、

「〇一二 袁了凡ノ説ニ從イ善政ニ努メシ事」

天保六年ノ四月、山川ヨリ砂糖ヲ大坂ヘ運搬ノコトニ出張ノ時、藤井猪之助ト会シ、話次明ノ袁了凡カ陰騰録ノ事ニ及ヒ、猪之助カ書ヲ初テ見テ其説ニ服シ、善事ヲ行ハント深ク志シ、爾來事々物々積善ヲ心トシ、農政ニ関スルニ至ツテ税ヲ減シ、民費ヲ省キタル、牧孥ス可ラス、亦上町ノ弊ヲ除キ營生ノ方ヲ立タル類、各

郷亦同シ、皆袁氏ノ説ニ從ヒタルニ、心ニ秘シテ口ニ出サザルヲ以テ知ル人ナシ、

【〇一三 果斷嚴君ノ国主島津齊興ノ事】

一從前薩藩ノ卑職ニ居ル君臣ノ間、君公ノ容貌ヲタモ窺フ能ハス、殊ニ齊興公ハ左右ト雖モ御胸中ヲ窺フ能ハス、イニ君側左右側ノ小姓等年ヲ經テモ言ヲ掛ラレサルモアリ、清熙カ事ハ広郷ヨリ申サレタル而已ナラス、他ヨリ申シタルモアリシカ、宗之丞ハ己レカ使ハント思ヘ共笑左衛門カ手ヲ離サスト、曾木ノ疏通ヲ命セラレタル杯ハ思ヒモ寄ラサリシ事ナリ、其他公ハ淫靡ノ風ヲ惡ミ玉ヒ、県下ニ酌取女アツテ風ヲ乱リシヲ誰ヨリ聞玉ヒシカ、残ラス流刑ニ行フ可シト、支部ノ市來清十郎ト清熙ニ命セラレタリ、市來ハ其職ナレ共清熙ハ納戸奉行ニテ君側ノ職ナリシニ、亦重豪公ノ太坂ヨリ芸妓ヲ下サレタルハ文政ノ末ナリ、齊興公大ニ風俗ニ害アルコトヲ多年見玉ヒシナラン、残ラス掃サレタリ、老公ノ立玉ヒタル事業ハ廢シ玉フ事ナカリシカ共、此事ノミハ廢セラレタリ、当職ノ地頭ハ一郷ニ限リタルニ、清熙ハ山川地頭タリシニ、亦内之浦地頭ヲ命セラレ、彼郷弊習ヲ矯正ス可キノ命ヲ受タリ、巡見ノ時清熙ハ前日之内之浦ノ嶮ヲ越ヘ待タレ共、甚雨ニテ高山泊トナリシ故馳歸リテ随ヒタリ、別ニ申シタルカ如ク、公ハ一タヒ見モ聞モ

有リタル往古ノ記録・御系譜ヲ忘レ玉フ事ナク、初メ花尾ノ御高祖ノ廟ニ詣テ玉ヒ、入來山ノ嶮ヲ越ラレ、宮ノ城ニテ曾木川疏通ノ船ヲ見玉ヒ、曾木ノ滝ヨリ下ノ木場菱刈七ヶ郷救ノ為立ラレタル藏ヲ見玉ヒ、米納ノ形容ヲ見タマハント清熙ニ枅ヲ取ラセ、江田平藏ヲシテ使夫トナシ、一席大笑ス、歳久公ノ豊公ニ接セラレタル地形、天堂ケ尾ヲ經テ、羽月・大口ニ至セラレ、貴久公・義久公・義弘公ノ御功勞ヨリ忠元カ関ケ原ノ役後マテ大口ニアツテ功ヲ立タル等熟考アリシナラン、夫ヨリ栗野ヲ經テ彼城ヲ見玉ヒ、真幸ヨリ紙屋口ヲ御出、去川ノ関ニ掛リ玉ヒ、庄内ノ地ヲ見玉ヒ、再度ノ巡見ハ吉田・蒲生ハ御中興ノ業ヲ興サレタル地、其蒲生ノ城ハ要害ノ他ノ異ナルヲ以テ、関ケ原ノ役後義弘公松岡勝兵衛ヲシテ繩張ヲ定メラレタル地故、後來ノ尊慮モアリシナラン、国分ノ新城亦同シ、福山原ニテ兵隊ノ訓練ヲ御試ミアツテ、志布志ノ境迄見玉ヒ、海岸ノ備ヘヲ佐多迄巡覽、垂水ヨリ桜島藤野村迄歴觀アリシハ、富国強兵ノ本ヲ立ラレ、西南ノ大藩琉球ヲ兼領セラレタルヲ以テ、上ハ皇恩ニ奉答シ、身漣濯ノ衣ヲ服シ、嗜欲ヲ省キ、用ヲ節シ、四十余年国政ヲ握リ、思慮ヲ懲シテ利害得失ヲ考ヘ、斷然事ヲ処セラル、ニ及ヘハ迅雷ノ如ク、民ヲ濟ヒ兵備ヲ整フニ至ツテ万金ヲ屑トセス、清熙其下ニ有テ眷顧ノ恩ヲ蒙リ命ヲ奉シタルハ、幼年ヨリ庶幾スルノ志ヲ遂タルニ近シ、

附、

江戸西向ノ蔵ニ予備ノ金ヲ供シ、堀端ノ蔵ニ米千石ヲ貯へ、鎌倉相承院ニ高祖ノ神牌ヲ土蔵ノ内ニ立ラレ、大田寺ノ方法ヲ定メラル等清熙ニ命セラル、西京ニテハ大乘院住持養満ヲ直任僧正ニ補シ、東福寺内即宗院ノ改正、東海道島田・金谷ノ駅ニ金ヲ貸シ、大井川ノ渡川ヲ便シ、大坂ニテハ堂島ノ米商ノ方ヲ改メ、爾來米ノ価ヒヲ増シタリ、出崎ノ時ハ多年ノ旧債ヲ正、藩内弊ヲ矯メ、害ヲ除キ、産ヲ起シタルハ枚挙ニ遑アラス、

「一〇一四 黒岩ガ一タノ話ヨリ大ニ国益開キシ事等」

前ニ申シ残シタルヲ附録ス、

一時公用アツテ指宿迄往タレ共其用果サス、田良ノ黒岩藤右衛門ガ家ニ遊ヒタルニ、主ノ云ニハ、君今農政ニ力ヲ尽サルト聞ク、農政ノ要ハ此国培養ニ乏シキニ、幸ニ鯨骨・牛馬骨地質ニ適スルカ故ニ、僕此業ニ従事スル、幼年ヨリ自船ニ航シテ所トシテ至ラサルナク、運搬ノ利ヲ以テ營業ヲ立ツ、君此業ヲ知ラスンハ人民ヲシテ生産ヲ盛ンニスルコトヲ得シト聞キ、其家ニ宿シテ終夜聞キ、翌日鹿兒島ヘ歸リ調所広郷ヘ申シテ、骨粕方ト云一局ヲ下町ヘ建テ、黒岩ヲシテ司ラセ、関東ヨリ東海道・志州・紀州・五畿内・四国・中国・三丹・因伯・北海・壹岐・対馬・九州五島迄モ、

皆残ラス黒岩ガ一手ヲ以テ輸入ノ道ヲ開キ盛ンニシテ、藩内各所ニ支店ヲ設ケ、培養ヲ恣ニ用ヒタルヨリ菜種子ノ一種ニテモ出產式拾万石ニ及ビ、其他ノ産モ夫ニ類シ、大ニ農民ノ利トナリシコトナリ、大坂ニテモ菜種子ノ品位各国ニ冠タリシ故ニ、薩産ノ菜種子ニ限り大坂・堺・兵庫ニ限り商フ事ニ旧幕ノ令ニテ命セラレ、其他ノ所ニテ商フヲ拔荷ト名ツケ没収スルノ法ナリシハ、其前菜種子俵ノ内ヘ琉球渡ノ長崎商法無許可ノ品ヲ入レタル取締ノ為ニ、大坂・堺・兵庫ノ三港ニ限ルトノ事ニテアリシカトモ、実ハ薩摩菜種子ヲ大坂ヘ集ル大阪酒屋中ノ意ヨリ出タル圧制ナリト聞タルコトナリ、是ニテ菜種子ノ各県ノ産ニ冠タルコト明ラカ、是專ラ地質ニ適シテ、牛馬・鯨骨ノ培養ニ応シタル所以ナリ、藩内モ国分并彼近郷、入來・出水・指宿・山川・両根占等盛ニ煙草ヲ作り、培養ハ油粕ニ限り、其外麻苧、何ニヨラス培養ノ利養ト心得タルコトニテ、菜種子ノ繁殖ハ藩内ノ為大ニ効シアルヲ、初メ黒岩ガ一タノ話ヨリ大ニ国益ヲ開キタリ、

右ノ外、天保七年ヨリ嘉永二年ノ春迄十五年間、清熙ガ関カリシ事業記録ナケレハ具ニ覚ヘス、暗ニ考ヘタルヲ記ス、右改革矯止・発起ノ農政・軍備ノ更制・士族ノ風教育・所有地ノ復故等、本卑職ヨリ登用セラレ才乏シク識劣ナル身ノ堪ヘサルハ論ナク、旧藩ノ風三家ヲ初メ夫々数級ノ等差有テ、古來ノ旧格ヲ

守り動かサルコトナリシニ、実ハ断然齊興ノ嚴正威重ヲ以テ調所広郷へ委任セラレ、広郷深ク其意ヲ奉シテ施シタルカ故ニ、百事成功ヲ遂ケタリ、右ニ申ス如ク、広郷ハ四十余年君側ニ侍シテ世務ニ疎シト雖トモ、文化十五年ヨリ文政八年迄転職シテ使番ヨリ町奉行トナリ、外ニアツテ財政其他ノ流弊・国風ヲモ親シク視察シタル故ニ、国政ヲ負担スルノ日大ニ心得トナリ、実ハ国ノ為ニ天ノ啓キタル幸ト云テ可ナランカ、広郷性周密詳悉、能ク人ヲ容レ小過ヲトカメス、廉潔ニシテ忠実、改革ノ大任ニ堪ヘンコトヲ、老公英明ノ眼ヲ以テ齊興公ト協議アツテ命セラレ、親愛他ニ殊ナリシヲ以テ、君側ノ事ヨリ各家ノ近親婦女ノ処方ニ至リ命セラレタリシナル可シ、広郷ハ人ヲ見ルノ明ヲ備ヘ、才ニ任シ能ヲ使ヒ、人ノ上ニ立テ百事ヲ司リ、勉学シテ怠ラス、忠愛ニ深クシテ、七十三迄能其業ヲ終ヘタリ、清熙十五年ノ間隨ヒ、愚昧ニシテ初ヨリ忌諱ニ触レ、言ヲ尽セハ探ル可キハ採リ用ヒ、後ニハ公ノ聞ニ達シタルカ、眷顧ヲ蒙リシコトモアツテ委任ノ命ヲ受ケタリ、多年ノ間大小ノ事務遺漏猶多カル可シト思ヘ共、記録ナケレハ概略申シ上ルナリ、謹テ言、

海老原雍斎

【〇一五 農政改革及ヒ農村振興ニ尽力セシ事】

天保ノ末僕カ此県ノ農政ニ関セシ始末ヲ以テ笑草ノ為ニ申ス、其頃広郷ニ從ヒ京都ニアリシ時、主用ニテ大坂ヘ下リ上京ノ時、税所普門院ト云山伏モ京ヨリ大坂ヘ下リ居、川登リ同船ニテ此山伏歌ヲ誦、詩ヲ作り、
仙學・文學モアリシ人ナリ 談話ノ序、普門ノ云ニハ、今調所氏藩ノ大困難ナリシ財政モ大ニ効ヲ奏シ、古來珍シキ大功ナレ共、世上ノ識者ノ評スルハ、藩内ノ農政ヲ改正アリ度ナリト聞シ故、百姓ノ治メハ未タ行届カスヤト問タレハ、各郷大ニ衰弊、就中菱刈七ヶ郷・真幸五ヶ郷、其他モ百姓離散ニ及フ所モアルコトハ、巡回ノ人ヨリケ様々ニ聞ヨシ詳カニ語り、調所太夫ヘ僕ヨリ申シ度事ト聞シ故、閑話之時広郷ヘ申シタレハ、答ヘニ、己ハ困難ノ所帶直シヲ命セラレ、年々此老年ニ及フ迄三都ヲカケ奔走シ、ヤウク今緒ニツク事ニナリタリ、藩内ノ事ハ同席ノ衆ノ骨モ折ラル可シ、サウク内モ外モスル事ハ出来スト聞テ笑ヒ流シニセシ事ナリ、偕其後曾木ノ滝下ヨリ宮ノ城迄山間ノ荒瀬ヲ碎キ通船スレハ菱刈ノ便利是ニ過クル事ナシト云議ハ、古來度々起リタレ共、甚タ難キコトニテ終ニ行ハレス、然ニ天保十二年カ^{記録不詳}齊興ヨリ調所ヲ以テ僕ヘ命シテ、川ヲ浚ヘ通船スル事ニナリタリ、僕幼年ヨリ土方工業ニハ更ニ心得ナキ事故、再三辞スレ共免サレス、実ニ生涯ノ苦心、尽力シテ全ク下役・石工ノ力ヲ以テ速ニ成功ニ至リタルハ大幸ト云可シ、其頃初メテ曾木・羽月・大口ニ至リ、大口大

田・里村ノ田地ノ中ニ茅野アリシ故、田地ノ中ニ茅野ハ珍ラシキモノト申シタレハ、アレハ休地ナリト云、休地トハ此村疲勞シテ人少トナリ、而々請取ノ地多ク作方イタシカタナク休地トナリタル由、今ノ人員ニテハ未タ届キ難キ故、此上ニモ休地ヲ増サネハ作リカタシト聞、大ニ愕キ、初テ山伏ノ話ニ合タル間、其趣ヲ調所ハ東京ニ居タル二具ニ申遣シ、大口ハ肥後境ノコトナリ、藩主ノ面皮ニモ拘ル可キコトト申セシカハ、其返書ニ、其田地ノ畦反・人員・村居ノ次第・戸数人員等殘ル所ナク調ヘ詳細申越ス可クトノコト故、再ヒ両村ヘ差入り精微ニ調ヘ、毎戸ニ立入り貯ヘノ米穀迄モ検査シタルニ、春ノ比ナリシカ一二ヶ月ノ食料モナク、衣服モ着タル俣ニテ老ボレタル男女計ニテ、実ニ見ルニ忍ビサル体ヲ東京ニ中遣セシカバ、其返書ニ紙面ノ趣実以驚愕ノ至、左程ノ事ハ有マシク考ヘタリ、則チ齊興ヘ申セシニ、夫ハ甚タ濟ヌ事ナリ、当年笑左衛門帰藩ノ節川内ヨリ直ニ巡回シテ、菱刈ヨリ真幸・小林マテ巡回シテ弊害ヲ除キ、百姓立行ノ法ヲ立ツ可ク、其内僕ニハ上京シテ猶細大申出可キトノ事ニテ、上京ヲ遂ケ、見聞ノ件々殘ラス申出タリ、其夏大坂ヨリ僕ハ小倉船ニテ急キ下リ、笑左衛門ニハ毎ノ通り中国路通行、出水着ノ節、僕ハ鹿児島ノ主用速ニ相濟シテ出水迄立歸リ、笑左衛門ヘ隨從、川内ヨリ東郷・山崎・宮之城・鶴田神子村川渡通船ヲ見、羽月下ノ木場藏等検査、大口

休地其他諸所一見、本城・湯之尾通行、栗野・吉松・吉田・馬関田・加久藤・飯野・小林通、夫ヨリ栗野・横川・溝辺・加治木迄巡回シタルコトナリ、偕亦其以前數十年上見ト云フアリ、風雨旱ノ災ニテ不熟ノ年ハ郡奉行檢見シテ納メヲ減スル法ナリシニ、疲弊ノ郷々ハ毎年上見スル惡弊ヲ生シ、領内其風行ハレ、亦部下リト云フ救済ノ法モアツテ救ノ法モ立シコトナレ共、是モ弊害生シテ良法共云難キ折ニテ、夫等ノ惡習ハ調所外々ヨリ詳細聞タルヤ、其年ヨリ上見モ部下リモ差止メ定代上納ト申渡シタリシ事ニテ、郡奉行其他モ驚愕シタルコトニテ、僕モ此二件ハ来年ヨリ改正ニナリ度事ト頼リニ申シタレ共聞入レス、尤旧弊惡習ヲ改正スルニハ八月ニテ尤ノ事ナレハ、上見・部下リヲ禁セシハ其年ノ八月ニテ、既ニ田ノ毛上モ見ヘ、中年ニ不及年ナル故、何卒来年秋ヨリト申シタレ共、ケ様ノ事ヲ来年ニ延レバ終ニ不被行ハ此藩ノ國習ナリ、疾ニ決議セシコトナレハ更ニ変スルコト能ハスト断然申ス事ニテ、其意ニ從ツテ施行ノ法ニハ実ハ大ニ心ヲ尽セシコトニテ、笑左衛門モ此舉ヲ遂ゲズンバ此限りニ身ヲ退クト決心シテ、多年隨身シタレ共、其節程ニ申セシ事ハナカリシナリ、夫レニハ今申セハ誤ナキコトナレ共、種々妨碍ノコト少カラス、其年ノ租稅皆濟ニ至ル迄ハ甚タ手数二重リタルガ故ニ、幸ヒ少シノ障モナク、翌正月迄皆納トナリ、皆安心セシコトナリ、夫ヨリ以來僕退職迄

年々不足ナク、離散ノ百姓モ立帰り、多年荒蕪ノ地開ケ、各郷通路修繕モ整ヒタル上三齊興巡見トナリ、初ハ郡山ヨリ入来・山崎・宮之城・鶴田川^{鶴田・宮城トドロ云フ難場}・道船ヲ一覽、曾木滝下藏地・羽月・大口諸所、前分休地開拓ノ田地、本城・湯ノ尾・馬越・栗野・真幸五ヶ郷、小林・野尻・紙屋^口ヨリ高岡四ヶ郷、高城去川^口ヨリ都ノ城・末吉・福山・敷根・国分・加治木迄ニテ帰城、再度巡見吉田・浦生・重富・帖佐・加治木・国分・敷根・福山・末吉・岩川・志布志・大崎・串良・高山・始良・両根占・佐多立帰り、花岡・新城・垂水ヨリ桜島迄帰城アリシハ、各郷ノ田畠村々ノ榮勞・風俗・諸所道路・川々ノ堤・所々ノ出產等検査ノ為ナリシコトナリ、

「〇一六 維新変革後ノ県内農村状況ヲ憂ウルノ事」

一県内各郷ノ景況、柿本等回村シテ見聞ノ形成ハ自ラ詳カニ御聞可相成、是迄申上候儀ト格別相違モ無之哉ニ承候事ニ御座候、別紙ニモ申上候石代上納ト土地所有トノ二件ヨリ折角ノ御仁惠布テ大害ノ基ニ成タルカ、農家奢侈甚シク、都テト申スニテハナケレ共、帽子・クツ・蘭笠・白足袋・服モ夫ニ準シ、部屋舟ニ料理屋・鰻屋・呉服店・小間物類、其外一切県下ニ擬シ、又ハ売女迄モ設ケ、元来為限身上ニテ田地代価或ハ租税輕ク相成、余沢ハ都テ驕ノ資本ニ相成、自ラ遊惰ノ風日ヲ追テ流弊ト成、農業ハ疎ンシ商業ニ

就モノ多ク、此程ヨリ申シタル如ク肥後・肥前ヨリノ買米県下廿万石余、出水・川内・加世田・坊泊・久志・秋目・南方・顕姓・志布志等ニテハ何程共測リ難ク、其代金数百万円ニ及ブベク、士族等ハ公債・農民ハ田地租税輕ク、皆夫等ヨリ出タル成可シ、限り有金ニテ来年ニモナリ来々年ニモナラハ、自然ニ買入モ調ハヌ事ニ至ルハ眼前ナリ、若シ凶歳ニモ遭ハ、如何シテ凌ク可キカ、ナレハ仁惠ハ布テ飢餓ノ種トナリ、甚タ恐レナカラ失徳ノ基カト大ニ心ヲ痛マシムルコトナリ、去迎カラ御変革ニナリタル一般ノ制度ナレハ、俄ニ亦替ラルコト是又容易ナラザルコトニテ、何トカ良策アラセラレスンバ叶ハサルコトナルベシ、当県ノ百姓ハ大滋養藥ヲ吞ンテ虚勞ノ病ヲ煩フト云可シ、速ニ良法ヲ処セラスンハ不治ノ症ト成可シ、ウス／＼各県ノ噂ヲ聞ハ、近年ノ徳沢ニ皆金ヲ貯ヘ、是ヨリ奢侈ニ流レ、本業ヲ忘レ家ヲ耗センコトヲ先見ノ勞農ハ憂フト聞ク、当県ハヤ、往年ノ憂ヒ所ニテハナク、即今困窮ノ者ノミニテ、村々ノ金融ハ大ニ困リタル由ハ、柿本等ノ見聞ノ景御聞有度コトナリ、三十年前ヨリ農政ニ従事シテ民間ノ情態モ少シハ心得タル故、疾ヨリ今日ニ立至ランコトヲ患ヒタルコトナリ、農事ノ一ヲ申セハ、田地刈上ゲノ後寒中ニ一番打起シト云コトヲ地方検査者嚴督責シ、正二月再ヒ起シ、五月前ニ又コメシタルコトナリ、草取モ七度ト定メ、夫丈ケハ実熟モヨカリシカト

思フ、今ハイフ方モヤ、左様ノコトトハ見得不申候由、右通寒暑ニ苦勞スル農事ナレバ、奢侈遊惰ノ百姓ニテ堪フ可キニアラス、是迄申タルコトハ成丈ケ忌諱ヲ恐レタルコトナレ共、兎角憂國ノ私情抑ヘカネ、且大兄ノ尊慮イカン共測リガタク、去ナカラ志ヲカクシテ言ヲ飾ルハ君トノ交義ニ於テ恥ヘキコトヲ考ヘ、此節ハ甚タ恐怖ナカラ愚志ヲ残サス吐露仕ル、仰キ願クハ、海涵

「〇一七 現今採用ノ石代納法、県内ニ大害ヲ醸スノ事

一石代納ノ事、寛簡ノ良法、国所ニ依テハ実ニ良法ト云可シ、去レトモ時節ト国所ニ依テハ是ニ過ル大害ハアル可ラス、先ケ様ノ寛簡ノ仁術ヲ施サルモ、即今財政困難ノ節ニハ租税ヲ減スル時ニアラス、一方ニハ仁術ヲ施サレ一方ニハ税ヲ重クシテハ更ニ心得難カル可シ、他県ハ知ラス、当県ノ税ハ凡半ハ減シタルカ、又当県内ノ百姓ハ他県ト替リ寔ノ愚昧ニテ眼前ノコトヨリ外知ラス、先農業モ勉強スレハ丈夫ケノ利ヲウルコトナレ共、督促ノ人ナケレハ情ルハ小兒ノ心ニ同シ、然ルニ石代納トナリタル以来、作リノ米ヲ家ニ貯ヘ、代価ハ外ニテ借り、此迄麦・芋・蕎麦ヲ常食トシタルモノ皆米ヲ食フコトニナリタリ、又田地ヲ百姓ノ所有トナリタルヨリ、天ヨリ降りタルカ地ヨリ湧タル幸ニ思ヒ、皆抵当ニ又売リタルモ余多アル由、其者外ニ田地アルニ有ラス、一時金ノ為ニ

本ヲ捨ルニテアスノ事ヲ考ヘナキハ皆其類ナリ、右代ノ為ニモ田地ヲ売リタルモ余多アル可シ、此県ノ田畠ノ高ト称スルモノハ従前ヨリ殿様ノモノトシタルコトニテ、百姓ノ所有ニアラス、其証ハ売地・質地共ニ禁シテ、若心得違ノ者ハ償ハスシテ上ニ取揚クル法ナリシ、又川々洪水大破損アレハ都テ上ヨリ修繕シ、又隣郷加勢夫ト名付、破損ノ村ニテ修理シカタケレハ数拾ヶ郷ヨリ夫役ニ出ルコトニテ、皆所有ニアラサルハ明カナリ、今ノ如ク恣ニ売ルコトニナレハ、自身ノ作地ニ愛恋ノ情ナク、忽チ地位ノ劣ルコトニ至ル可シ、カク申セハ、殿様ノ物ニテ自地ニ非サレハ猶田地ヲ籠略ニス可シト云人モ有ケレ共、左ニ非ス、一門毎ニ乙名ト云フモノ有テ、其門ヲ預リ、年貢其他皆支配シ、其下ハ名子又下作ト唱ヘ、代々受持ノ地有テ農業セシ故、其田地ハ所有地ノ如ク大切ニセシコトナリ、旧来ノ制ヲ変革スルハ実ニ難キコトニテ、世ニ申ス一得ニ失所ニテナク大害ヲ醸スモ有リ、右ハ目前ノ事ノミヲ申ス、其他内裏ノ害ハ尤多カル可シ、

「〇一八 薩人ノ礼儀廉恥衰退ノ風ヲ憂ウルノ事」

古来薩人ノ文学アル人絶ヘテナク、財政ニ名アルハ根占丹波トカ島津図書トカニテ、其時々ニ有タル筈ナカラ高名ナルハ聞カス、即今ノ如ク在朝ノ高官ニ薩人ノ多ク、又重野氏カ如キ文学アル人

ハナキコトナリ、去レ共今其他ニ撰ハンニハ又難カル可シ、兎角
西国ニ僻陋ナル訳カ、然シ天文・元龜・天正頃ヨリ以來兵ハ名物
ト云フ可シ、戊辰ヨリ近年暴動マテモ他ヨリ一步進ミタルヨウナ
レトモ、此末ノ事ハ知ラス、諸國家無事ノ日ニハ武人ハ無用ノモ
ノニテ、却テ害ヲ生スルノ氣遣ヒモアルコトナレ共、獵犬ト同シ
ク有事ノ日ニ俄ニホシクテモ出来ス、亦其土地ニ替リハナキ筈ナ
レ共、常惻惻ニテ器用ナル人ハ砲丸雨集ニ向フハ不得手ナルモ有
ヘシ、土地ノ變リハ市成・末吉・恒吉ニ限リ良馬ヲ生シ、亦東京
ノ女他所ニ異ナルコト、蒲原カ妻ノ所行等男子ト雖トモ難カル可
シ、ヤ、上方ノ女ニテハ出来ガタカル可シ、是ヲ以テ見レバ性ニ
長短得失アル可シ、剛勇ノ土地ニ礼義廉恥ヲ教ヘ、其長スル所ヲ
養フトキハ、有事ノ日ハ無ニ兵タルコト疑ヒナシ、今日日ニ衰
困ニ陥リ、義モナク恥モ知ラス、飢餓ニ迫ルトキハ放徒暴横廢止
スル所ナキニ至ンモ測リカタシ、

【〇一九 薩摩藩軍備ニオケル洋銃採用顛末】

僕十二三歳ノ頃ヨリ軍書ヲ好ミ、書ニ乏シキ国ナレ共有限リ借
リ、甲州流ノ兵學ノ書モ見、近隣ニ平田直次郎ナル者僕ヨリ十余
歳年マシニテ、此人博覽ニテ、其比、文化ノ末・文政ノ初、今ヲ
去ル六十六七年、未タ洋學開ケサルニ洋學ニ心ヲ寄せ、兵學ニモ

心アツテ、甲州流ノ治世ニナリテ出来タルヲ示サレ、徳田氏カ大
ニ見識アルコトヲ聞、夫ヨリ徳田カ著述ノ書モ見、当県ノ軍備拙
キコトヲ明ラメタレ共、藩ノ兵備ハ園田氏軍師ト云職ニテ、門閥
家老・用人ヲ初其門二人ツテ尊信スルコトナレハ、異論ヲ唱フル
コト能ハス、窃カニ心ヲ向ケ中越諸家ノ説取ニタラスト考ヘタル
コトナリ、年三十ヲ越テ調所ノ為使ハル、ニ当リ、此人ヲ以テ軍
政ヲ改メ度心起リタルニ、計ラスモ調所モ少シ徳田ノ説ヲ聞居テ、
時折甲州流ノ空論ナルヲ窺ヒタレ共、今ノ世ト成リテハ弓槍ハ用
ニ立ス、何レ銃ナラデハ戰ハ出来ヌ事ト思フト雖トモ、僕銃ニ疎
タ、其頃初テ劍銃ト云モノ渡リタルヲ聞ク、アル日成田正右衛門
ナル者ノ所ニ行タルニ、床上ニ立テタル銃ヲ見テ、アレハ劍銃ナ
ルヤト問シカハ、君ハ初テ見タルナル可シ、此扱ヒ方ヲ一通リ見
ル可シトテ、燧石カケ方ヨリ射法ヲ教ヘタリ、是ナレハ大雨ニテ
モ火ノ消ルト云コトハナシト云フ、夫ヨリ初テ疑ヒヲ解キ、軍陣
ニハ是器ニ限ルト云コトヲ究メ、夫迄軍備ヲ立ルニ弓槍銃ノ間備
ハリカネタルヲ、其以來洋銃ノ心得アル人ヲ集テ講究セシコトナ
リ、成田正右衛門ハ兄鳥居平八ナル者長崎ニテ高島ヨリ伝ヘ、平
八ハ早ク死シ正右衛門ニ伝ハルコトニナリタリ、夫ヨリ調所ヘ勸
メテ頻リニ此法ヲ擴張スルコトヨリ、今竹下清右衛門ハ調所ノ縁
者ニテ、西洋ノ銃ニモ早く人ツテ心得アリシ故、清右衛門ト談シ

テ内ヨリ慾望サセ、僕外ヨリ勸メ成田ヲ調所ノ宅ヘ呼コトナリ、洋銃ヲ信スルコトナリ、其頃大藩ニテ大砲小銃ヲ西洋ニ調文スルコト、幕府ノ嫌疑アツテ買入ル、事能ハス、依テ藩内ニテ小銃ヲ拵ヘ大砲ヲ鑄ルコトヲ屢々請フト雖モ果サス、其年東京ヘ出シ折、琉球ヘ仏人渡リ滞留セシコト告来リ、其屈書ヨリ処置ノ事ニ僕初ヨリ関シテ、鹿兒島ヨリ物頭共一隊ヲ渡スコトヲ僕ニ委任シ、藩ニ下ルコトニナリタリ、是好機會ト思ヒ、ケ様ノ時節ニモ至ンカト考ヘ兼テ軍備ノ事モ申セシナリ、西洋人ニ抗敵スルニハ大砲小銃ナクテハ済ス、依テ藩ニテ鑄造所ヲ建築シタキ旨ヲ申シタレバ、速ニ許可ヲ受ケ、何事モ僕カ存慮ヲ以テ家老共ヘ申出計フベキ旨ヲ命セラレ、鑄造銃藥製所・兵隊訓練所等造営シタリ、

「〇二〇 県下特産商品ノ繁殖開発等ヲ論ジルノ事」

日外蒸氣船会社之舉ハ、実ニ諸君ノ御考ノ通り国益ノ基本ニテ、可成微力ヲ尽シ説論スト雖トモ、資本備リ兼実ニ残念之至無致方、時節ヲ待ノ外無之ト人々共申合事ニ候、然ハ其節承リ候通、最早此間ヨリ三菱盛大ニ相開キ、不日ニ県ノ船ニハ積荷モ何モ無之益衰微ニ至ルハ眼前ナリ、偕県下商人貯ヘ有ルモノナク、尤県ノ為トカ衰耗ヲ救フトカ申ス義務心ハ絶テナク、唯面々ノ利益ヲ而已競フ風ナルカ故ニ、連モ国産ヲ繁殖スル杯ト云コトニハ至リカネ、

甚タ歎ケカシキ事ニテ如何トモ着手ノ道ナク、偕近來菜種子直成進ミタル由ニテ、皆菜種子ヲ大坂ヘ積登ル由、実ニ好キ機會ト成立タル事ト存候、即今牛馬骨・鯨骨ヲ盛ンニ積廻スコトニナレバ、今ヨリ十分ニハ出来マシケレ共、米夏ハ夫丈ケノ国益ト成可シ、此上製油ノ良器械モ有テ油師ヲ用ヒ又事ニ成テ垂油モヨクナレハ、油ノ価廉ニナリ、随テ粕ノ価ヒモ賤ク煙草作盛ンニ成、価ヒ下値ニナルヘシ、兩三年煙草ノ価ヒ下値ナリト雖トモ、作人培養ニ比シテ売出シカネテ不通融ノ景況ナルハ全油粕ノ直成貴キ害アリ、毎モ申ス如ク菜種子ト煙草作盛ニナリ相当ノ価ニスラ／＼滞リナク売出スコトニナレハ、大ニ農民ノ幸ナリ、其他ノ産物盛大ニ開クニハ資本ナケレハ出来難ク、前ニモ申ス如ク世上ノ為開物ノ為トカ云様成ル心得ノ商人ハ地ヲ払ツテナク、皆一己ノ利ノミニ着眼スル風ナリ、三四十年前ニ遡ツテ熟々ヲ考フレハ、其頃モ余リ替リタルコトモナク、必竟金ニ乏シキ困柄ニテ止ヲ得サルヨリノ事ナリ、其頃骨粕方ヲ建タルモ、資金ハ皆藩ヨリ備ヘ利益ハ更ニ見ス、唯夫ニ付タル失費ヲ出納ノ方ヨリ備ヘシコトナリ、又硫黄島ヲ開ク時モ初ハ皆藩費ニテ、霧島明礬山湯之野^{イ・湯之尾}ノ方ハ同断、四ヶ郷檜木山モ同シ山ノ仕向キ定リタル上ニ支配ノ者ニ渡シタルコトナリ、其他民費ヲ藩ヨリ着手セシハ、菱刈七ヶ郷救ヒノ為羽月羽月下ノ木場ヘ蔵ヲ建テ、真幸五ヶ郷救ノ為栗野ヘ蔵ヲ建テ、出

水塩二乏シク皆肥後ヨリ買入ル、故、出水庄濁ヘ塩浜ヲ築、又ハ其郷々ノ民費ナリシ限之城仏生橋・水ノ手橋、藩ヨリ、然レハ(ママ、説文アルカ)全体鹿兒島ハ僻陋ノ地ニテ商人ノ利モナク、大商ト云可モノナク、尤從前ハ猶不開化ニテ人民ノ為ニ力ヲ尽スモノ少ク、經濟ニ疎ク、諸近年年増ニ開化ノ時節ナル可ケレ共、国家ノ為ニ思慮ヲ尽ス人ハ稀ナランカ、尤老僕不学文盲ニテ弁ヘストハ雖トモ、(ママ)

「〇二一 旧来ノ兵法一新シテ軍制改革シタルノ事」

一軍政改正ニハ齊興・調所ノ意ヨリ起リタルト云モノ、実ハ僕カ上申ヨリ出タルト云コトハ要路ノ人ハ皆知リシコトニテ、第一ハ異國方ト云一局ヲ廢シ、軍師ト云職ヲ廢シ、兵学ノ師家・大砲ノ師家三家、其上廢スルニ同ク、且槍ノ師家二家自然ニ不用ニナリ、門閥家ノ門皆尊信シタルコトニテ弓三家モ同シク勢ヒ蓄ク成、県下中右数家ノ門人ナラサルハナク、実ハ武門ノ大變革ト云フ可シ、初異國方ト云一局ヲ廢スル日、奥書院ニテ其掛リ家老・用人・軍師列席ニテ、旧軍政ト今日立ル所ノ方法ト、軍師ト僕ヨリ其利害ヲ論定シテ申ス可キ旨ヲ命セラレ、此問答ハ実ニ難儀ノ極ト云可シ、僕不学文盲ニシテ多年其方法拙キコトハ明ラカナリト雖モ、今日議定ノ主任トナリテハ甚苦心シテ、昼ハ其煩繁劇ニテ隙ヲ得ス、徹夜ニ和漢古今ノ事歴ヲ考ヘ、或ハ有識ノ人二問ヒ、其他理

事ノ処置ニ妨害ヲ生セサルヤウ予メ定リタル老功博覽ノ人ニモ質問シテ、先々議定ノ席モ済タルコトナリ、

「〇二二 山川ハ水車用良水ノ第一等地ナル事」

水車ニ用ユル良水ノ海運ノ便ヲ兼タル所ハ至テ少キモノニテ、先山川ヲ第一トス可シ、且ツ製油スルニ指宿・山川・今和泉、又阿根占・佐多・田代ノ菜種子ヲ運送スルニ纔カ三里余ヲ隔テ、陸運ハ大山村・児ケ水村ヨリ今和泉永村・頽娃仙田村・十町村・川尻村・頽娃麓ニ至リ、知覽・南方・鹿籠等ヘ培養ノ運便宜シク、皆菜種子ノ地ナレハ、製油ヲ盛ンニスルニハ数万石ノ菜種子モ容易ク集ルヘシ、良器械ヲ以テ充分ニ油トナシ、蒸氣船ニ積入ルニモ港内ニテ自在ナレハ良水ノ一等成ル可シ、

「〇二三 山川町救済ノ道ヲ論ジルノ事」

山川町至テ疲勞シテ、今日過半ハ日々網ノ魚在々ヘ荷ヒ売リニテ飢餓ヲ凌クコトナレハ、日ヲ追フテ道路ニ倒ル、ニ至ルハ必然、山川土地狭ク、農民モ余地ナク、又サシタル工業モナク、只飢餓ヲマツノ外ナシ、因テ素麵ヲ製スルコトヲ頻リニ勸諭スト雖トモ、士族町共ニ尽力スルモノナシ、去レハ水車ノ製油盛ンニナリ、菜種子繁殖シテ培養廻転スルトキハ、海運ノ便ハ備リタル所ナル故、

余多ノ大小船入港シテ賑フコトニナル可シ、陸ノ方モ人馬ノ輻輳
自ラ港内ノ潤ヒニ成可シ、山川町救済ノ術外ニナシト思フ、

山川水車ハ無類ノ良水ナレハ、今払下ケト云フ日ニハ懇願ノ人モ
アル可ケレ共、県下ノ出產盛業ニ着目シテ、彼所ヲ盛ン成一村ニ
シテ、傍ラ山川町ノ疲勞ヲ救ヒ、海外輸出ノ商法ヲ開キ、自己ノ
利ニ拘ラスシテ農民迄モ潤沢スル程ノ志アルモノハ絶テアル可レ
共存セズ、亦水車ノ良器械ヲ設ケテ一切ノ便ヲ開クニハ中々容易
キコトニ非ス、然レハ能々夫等ノ御注意アラセラレ、其人ヲ選ミ
玉ヒ御松下ニモ成タキコトナリ、此山川ノ水車、菜種子繁殖ノ手
初ニテ、人氣ノ盛衰ニモ關スル訳ニテ重大ノ事件ナラン乎、

「〇二四 菜種子二十万石ノ繁殖ノ道ヲ論ジル事」

菜種子ノ繁殖ヲ謀レハ、旧八月九月ニ蒔クモノナレハ、六七月ヨ
リ培養廻輪ノ道ヲ立サレハ節ヲ失ヒ亦一年ヲ空フスルコトニ至ル
可シ、培養入費ノ道立ニオイテハ、各郷競フテ殖ルコトニ成ハ必
定ナリ、従前県内十五万石ノモノハ今ハ開キ地夥シキコトナレハ
二十万石ニハ至ル可シ、

「〇二五 廉価ナ油粕ニテ煙草作等繁殖ヲ論ジルノ事」

油粕ノ価廉ニナレハ煙草速ニ売レテ、農民大ニ喜ブコトニナル

可シ、亦粟・麻麻ノ類ハ云ニ及ハス、諸作大ニ繁殖ス可シ、
島々海岸漁獵ヲ盛ンニセハ油粕益廉ニナルヘシ、サスレハ煙草ハ
勿論諸作豐熟疑ヒナシ、

煙草盛ニナリ、外国ノ好ニ合ヒ輸出スルトキハ、何卒卷煙草ニシ
テ出シタキコトナリ、数百万斤ニ及ヘハ士族ノ授産ニモ成ベキコ
トナリ、

「〇二六 上町ニ牛馬骨ヲ集荷シテ振興ヲ計リタキ事」

各県・朝鮮其外ノ牛馬骨入港ノ節ハ、下町ニテハ品物ノコトナ
レハ健康ノ障ニモ成可キカ、即今上町衰微ノ砌ナレハ、上ノ浜ニ
屯所ヲ建タラ、向潟内場各郷等ヨリモ入船多ク、陸ハ近郷近在ノ
馬集リ、大ニ市中ノ助ケニ成ル可キカ、琉球ニモ牛馬骨捨テ有由
成ナレ共、何トカ障リアリトテ積出スコトヲ禁スル由ナリ、説論
ノ方モアル可シ、支那ハイカ、若捨骨モアラハ廻シ度コトナリ、
船会社立ツトキハ、北海其他佐渡・壹岐・對馬・東國ヘモ手ヲ付
盛ニ廻送ス可シ、北海ニハ干魚又ハ培養ノ品モアル可ナレハ自ラ
運輸ス可シ、開地迄モ菜種子植付ル日ニナレハ培養ナケレハ熟ス
ルコト能ハス、後々ハ農民モ運送船モ利ヲ覺ヘ出ル所々ヨリ積入
ルコトニナレ共、初ハ道ヲ開カサレハ廻リ兼ヌル可シ、

「〇二七 調書、砂糖接殖ノ物産開發ニ尽力ノ事」

一調所ノ内ニ残リタル上書ノ中ニ有之、砂糖ノ価各県ノ砂糖繁殖ニテ下落スルヲ憂ヒシ頃ハ、砂糖一種ヲ目途トシテ近年中大困難ニ至ル可シ、何カ砂糖ノ接殖ノ産ヲ起ス可シト、微草微物ニ至リ着手セシニ、沖ノ永良部モ其比ハ今程ハナク、凡百万程モ出產スト雖トモ、他ニ夫程ノ産ハナキコトナレハ、三島ト同シク方ヲ立度ト僕モ申シタレ共、広郷ノ申スニハ、先ツ彼島ハ従前通りニ置ク可シト、又山川水車ノ利モ改革ノ方ヨリ着手スレハ相応ノ利益モ有ハ眼前ナレトモ、是モ度外視シ、且硫黄島明礬・椎茸・櫛木・牛馬及海人草ノ類、多年商人ノ産業トセシヲ引揚テハ市中立行難シト云ヒ、屋久島ハ矢張大目附ニ委ネ置ク可シト云類、大ニ寛裕ノ量ナクテハ処シ難キコトナレ共、是等ノ所ニ深ク注意スル人ナキ故、尊君ノ外申サス、其他故旧ニ篤ク^{是等一策ノ}コトモアリ、亦君側ノ事ニ心ヲ用ヒタルハ、僕等ヘモ更ニ口ニ出サス、父子兄弟ノ間和順ヲ謀リタルカト安スト雖トモ、世上人口ノサガナキコト是非ニ及ハス、事機密ニ関スル事件モアリ、他日ヲ期シテ申ス可シ、

「〇二八 調所ノ軍制改革ノ起原」

一軍制ノ改正ハ広郷功業ノ大事件ト云可シ、此根本ヲ申セハ僕カ上中ヨリ出タルハ、昨日モ申ス如ク竹下清右衛門深ク知ル所ナリ、

是亦外ノ事業ト同シク広郷ノ採ルニ非レハ万々成ラサルコトナリ、諸僕カ幼少ノ時ヨリ軍事ノ眼ヲ開キタルハ平田直次郎宗可ニテ、文政ノ初ヨリ西洋各国ノ風ヲ窺ヒ、甚タ国事ヲ憂ヘ、今ノ如キ備ヘナキトキハ日本ハ保ツコト能ハスト慨嘆セシ故、人ノ物笑トナリタリ、鳥居平八高島ノ伝ヲ受ルノ初ヨリ宗可与リテ力アリ、因テ大砲・小銃ノ鑄製所ヲ建、訓練所ヲ設ケ、銃藥所ヲ建ルニモ成田正右衛門ト相議セシナリ、

「〇二九 少年ヨリノ素志ヲ遂ゲタル改革事業ノ事」

僕天保六年十二月初テ上坂シ、改革ノ方法凡緒ニ付タルヲ見テ、予苟モ五年前ニ出タラハ微力ヲ施ス可キニ遺憾ノコトナリシト考ヘタリ、然レトモ其年多年ノ大借五百万円ノ結局ノ方ヲ立タルコトナレハ、負債ノ為ニ余事ニ及ホスコト能ハス、其后ニ至リ農政・兵制余多ノ事業ヲ起サレタルニハ、僕カ少年ヨリノ素志ヲ遂ゲタルコトナリ、

「此書、服部内務部長貸与之写、本所々誤写有之、令謄寫了、大正二年十一月十六日、浮岳逸人識」

海老原雍斎君御取調書類草稿

海老原雍齋君御取調書類草稿

(一)

〔〇一〕 太守島津齊興ノ事

故薩隅日三州兼琉球國ノ太守宰相齊興公ハ文化六年ノ享封ニシテ、當時十九、若年ナルヲ以テ御祖父重豪公國政ニ管摂セラル、当主幼ニシテ沈黙敢テ聰敏ナラサルカ如シト雖モ、祖父公殊ニ重寵セラレ世嗣ニ立玉ヒタリト云、是神祖ノ猷廟ニ遇セラレタルニ類ス、当主成長セラル、ニ從ヒ深謀遠慮、實ニ古人ノ、大器ハ晩ク成、大声ハ声希ナリ、ト云レシ如ク、彼ノ先年箱根ノ戰ニテ火災ヲ未前ニ避ケ玉ヒシ杯、外ニモ不思議ノ事多カリシハ之ヲ神識ト称ス可キナリ、文政ノ末ニ至リ財政至困トナリシモ、当主多年ノ間潛カニ藩内ノ情態・政治ノ得失ニ意ヲ刻マレ、治教ヲ鍛鍊シ、其國ヲ治ルハ身ヲ修ルニアリ、財政ヲ恢復スルハ用ヲ節シ費ヲ省クニアリト、身澣濯ノ綿服ヲ衣、左右ノ器具ハ極メテ質素ニ、食膳ハ淡薄ニ、園簿ヲ省キ、嗜好ヲ退ソケ、淫声ヲ遠サケ、唯能樂ヲノミ之レ好ミ、寡言方正、恒ニ侍候スル者ト雖モ御胸中ヲ窺ヒ知ルコト能ハサリシト云、財政改革ヲ斷行セラル、ニ當ツテハ悉ク祖父公ト協議セラレ、御家臣調所広郷ヲ擧テ之カ責ニ任セラレ、日々細大ノ事務白ラ聴テ処斷セラ

レ、偶々晷ヲ移シ食ヲ忘レラル、コトアリシモ毫モ倦レス、其広郷ハ幼年ヨリ侍仕シテ、親愛佗ニ殊ニシテ、内外ノ事務皆委任セラル、所ニ在リ、広郷性忠実ニシテ、事ヲ執レハ周密詳悉、嘗テ輕躁ノ舉動ナク、事々物々本末ヲ研究シ恒ニ上申スルコトト雖モ、遺漏アルトキハ指摘シテ毫モ仮サ、ルコトナキハ、其当主ノ明敏ナルヲ以テ故ニ、広郷カ当主ニ對スルニ恐ルコト鬼神ノ如ク、恒ニ人ニ語ルニ、己レ御代々ノ數君ニ事ヘタレ共、此君ノ如キハアラス、一度聞玉ヒシコトハ年ヲ經ルモ忘レ玉ハサルコト實ニ驚愕セリト、天保六年ノ冬、大負債償却ノ法ヲ發令セラレタル以來、当主ノ御施政ノ概端ヲ挙クレハ、同九年頃迄江戸・京・大坂・藩内ノ廢事皆修メラレタル、其費巨額ナリシヲ以テ余事ニ及フニ遑アラサリシカトモ、同十年ニ至テ米積船三隻ヲ製造セラレ、益々國產ヲ改良シ、亦新ニ開ケタルモアリ、同十二年菱刈七ヶ郷ヲ濟フ為ニ曾木川ヲ疎通シ、同上三年ヨリ農政改正、弘化元年ニ至リ良々緒ニツキ、亦軍政ノ更革モセラレタリ、而テ門閥支族ノ家皆財政置之セシニ依リ、広郷ヲシテ之ヲ司ラセ、清熙ト新納休右衛門ニ命シテ改正セシムルニ、初花岡ヨリ次ニ今和泉・重富・垂水・種子島ニ及ヒ、其他之等ニ見倣ヒ補綴數家ニ波及シタル、其余沢ハ今日ニモ至リシト云可シ、又門閥ヨリ士族ノ所用ノ高ニ弊ヲ生シ棄レタルヲ矯テ、享保ノ旧規ニ復シ兵賦ヲ立ルコト、ナリ、鹿児島沿海・花岡・新城・垂水・加治木・重富・

喜入・今和泉・南ノ方・日置・吉利・永吉・知覧・鹿籠・種子島、川内ニ平佐・宮之城・佐志・黒木・蘭牟田、東北ニ都城、何レモ極要ノ地ナル故ニ干城ノ根ヲ堅フセラレタルハ、大ニ其依ル所以アリ、銃隊ヲ編制スルニハ銅・鉄・木材・職工等ノ費夥シト雖モ、当主白奉甚タ質朴、概説スルニ煙草盆等虚飾ナク、煙管ハ真鍮、刀ノ柄ハ皮卷等、之ニ反シ国家ノ用ニ供スルニ至ツテハ万金ヲ屑トモセラレス、又平常寡言沈黙ノ御質モ、言ヲ發セラルトキハ突然暴烈ナルカ如ク、畢竟従前ヨリ熟察玩味セラレタル結果ニシテ、断然決セラレタル上ハ寸分モ動カレス、彼ノ禁宗ニ彈刻ナル吏ヲ他職ニ転シテ為ニ民情ヲ安シシ、衆議ノ死ニ決シタル者ヲ赦シテ徒刑ニ処セラレシ等、人ノ意表ニ出タルコト多シ、弘化二年各郷ノ巡見ハ、農政ノ改革緒ニツキ、曾木川ノ疎通ヲ浚へ、租税金納・流民帰郷シタルヲ以テ、猶自ラ民間ノ疾苦・土地ノ肥饒・山川ノ形勢・祖先ノ功業・忠臣ノ偉蹟等ヲ歴覽セラル、ノ御志ナリシカ、初メ花尾山一ノ宮ニテハ高祖ノ廟ニ詣セラレ、入来山ヲ越へ、樋脇・山崎・佐志・宮ノ城・鶴田ヲ歴観、曾木川ノ末トゞロヲ通舟ヲ見、彼地ハ祖先歳久公ノ居城ニテ其由緒多ク、天堂ケ尾ハ新納忠元カ大口ノ城ヲトラスシテ支ヘタルニ、義久公ノ命ヲ受ケ豊公ニ謁シタル所ナリ、羽月下ノ木場ノ藏ヨリ曾木滝下ノ通船ヲ試ミ、大口ノ城ニ忠元在城シテ、関ヶ原ノ役後九州ノ侯伯肥後八代ニ会シテ薩摩ヲ攻メントシタルヲ鎮庄シ

タル所ニテ、大口・山野ハ肥後球磨ニ隣リ、川ヲドレハ川内ニテ、陸ハ栗野ヨリ真幸ニテ般若寺・霧島嶽ニ接シ、雛森・白鳥・狭野・加久藤・飯野ハ故城ノ跡ニテ、木崎原ノ古戦場日州口ノ要路也、又紙屋ヨリ高岡ニ出、倉岡・穆佐・綾・法華嶽寺ニ登リ、去川ヨリ高城ヲ経テ、都城ハ反臣伊集院忠実カ籠リタル地ニシテ、夫ヨリ福山ニ出テ埴城トナリ、再度ノ巡見ハ吉野村ヨリ吉田・蒲生ニ至リ故城ヲ見ラレタルハ、本藩元亨・建武ノ頃、世ノ變遷ニ列テ各所ニ乱ヲ生シ、大永中ニハ藩内四分五裂トナリタルニ、忠良公・貴久公伊作・加世田ヲ平ケ玉ヒタル以来、吉田ヨリ蒲生ノ堅城ヲ落シ玉ヒ、旧封ヲ全フシ、関ヶ原ノ役後、義弘公自ラ蒲生ノ城ノ縄張ヲ定メラレ修築ノ地ナレハ、若不意ノ變ヲ生セシ日ニハ、上山ノ城ハ海岸ニ近フシテ保チ難キノ慮アツテ熟覽シ玉ヒシナランカ、其時ハ矢筈・建昌寺等枝城トス可キ地ハ、帖佐・加治木ヨリ国分ニ至リ要害ノ地ナルカ故、地頭飯屋ヲ広メ、上井其佗ノ砦ノ事モ考ヘラレ、福山原ニテ銃隊ノ訓練アツテ、一銃隊ヲ率ヒテ志布志・福島境ヨリ具ニ大崎飯隈山ニ登リ、串良・高山・始良・大根占・小根占ハ地頭飯屋ヲ兵隊出張ノ陣營ニ備へ、佐多ヨリ新城・花岡・垂水迄海岸台場ニテ銃隊ヲ訓練シ、桜島ヘ渡リ藤野村迄巡見シテ帰城アリ、当主一タヒ耳目ニ触ラレシ事ハ終ニ忘レ玉ハス、抑島津家ノ高祖忠久公王系ヨリ出、建久中三国ニ赴任セラレシ以来六百五十余年ノ間、危急艱難多シト

雖モ、祖先ノ功勞・良臣ノ偉績ニ依テ國ヲ全フシ、皇恩ニ奉答セン
ト刻苦勉勵シテ富國強兵ノ基ヲ立、專ラ調所広郷へ委任セラレテ百
事ヲ司ラシム、広郷命ヲ受タル以來二十余年死ニ就マテ一日ノ如ク
勤メタルハ、当主ノ駕御嚴正ナルヲ以テ能其功ヲ成タル所以ナリ、
風教・土木・軍事・農政・商弊・勸業、其宜ニ從テ更改矯正ニ係ル
者枚挙ニ遑アラズ、國平ニ民安ク、財充チ穀饒ニ、獄舍空虚刑措ク
ニ至リ、天保七年ノ大飢饉ニモ藩内一人ノ飢民ナク、亦風旱ノ災ナ
ク、琉球諸島運輸ノ船々多數ナルモ難破ナク、当主ノ恒ニ鬼神ヲ敬
シ玉ヒ、大社・仏宇普ク尊崇有ラセラレタル故ニ天幸ヲ得ラレタル
可シ、調所広郷カ改革ノ命ヲ受ケタルヨリ二十年、鹿兒島ヨリ九州
路・中国路ヲ經、大坂へ出、伏見・京都ノ事ヲ終へ、年末江戸ニ出
ルヲ恒例トシ、各所ノ事務ヲ見テ、才ニ任シ能ク使ヒ、皆職ニ称ヒ
タルカ故ニ功ヲ奏シタル所以ニシテ、改革中人ヲ挙クルモ一人ノ退
ケタルコトナク、又辭シタル者ナク、土木ノ事ニ至リ其功ヲ竣ヘサ
ルナク、江戸各邸・寺院、京・伏見・長崎・大坂・鹿兒島、城内ヨ
リ各局・大社・大寺ノ造営修繕、新田ノ開發、道路ノ修覆、國産ノ
改良、其余沢琉球諸島ニ波及シ、凡百ノ事業・兵備ノ如キハ日本ノ
嚆矢ト称ス可シ、然ルニ事半ニシテ廢シタルコトナリ、皆其功業ヲ
遂タルハ広郷カ人ヲ見ルノ明ト当主ノ威重ニ依ル所ナリ、広郷嘉永
元年ノ冬七十三ニシテ江戸ニ没ス、清熙其翌年職ヲ辭シタル故ニ、

其後ノ事ハ知ラス、

(二)

「〇二 深キ思慮ニテ山林伐木・植木ノ法ヲ立テル事」

藩内東南ハ、佐多・田代・小根占・大根占・新城・花岡・始良・大
始良・内ノ浦・高山・串良・大崎・垂水・牛根・高隈嶽・庄内・野
尻・小林・真幸五ヶ郷・菱刈七ヶ郷・霧島山・出水ノ山林、手広ニ
テ、従前山林伐木・殖材ノ法周密ナリシモ、時代ノ變遷ニ從ツテ弛
ミ種々ノ惡弊ヲ生シ、改革ノ初メハ北ハ小林川・去川口・内ノ浦海
岸・川内川ヨリ密売ノ伐木多カリシヲ、木材ノ老商酒匂五郎兵衛ヨ
リ密ニ広郷へ申シタルヲ詳ニ聞キ、去川口ノ船ヲ立テ日州産ノ便ヲ
開キ、且山林ノ密売ヲ禁スルコトヲ平田郷左衛門カ説ヲ聞、猿渡彦
左衛門ヲシテ高岡町松浦長助・水間次左衛門・清水八左衛門三名ニ
諭シテ、五枚帆船三隻ヲ造ラセ、赤江ニ開場ヲ設立シ、見聞役一名
ヲ定居トシ、川口ノ出入ヲ改テヨリ大ニ彼地ノ便ヲ開キ、山林ノ密
売頓ニ止タリ、亦内ノ浦其他嚴密ニ出入ヲ改メ、川内川口同シク嚴
密ノ法ヲ示シ、山奉行従前ヨリノ事ヲ答メス、一局ニ別ニ席ヲ立テ
清廉ノ人ヲ選ビ任シ、伐木・殖木ノ規則ヲ建テ、有川藤左衛門ヲ司
ラセタルヨリ夫迄ノ惡習一洗シタリ、然ル二十年ヲ過タレハ自ラ弊
ヲ生シタルヲ聞キ、兎角山奉行ハ木ヲ伐ルコトヲ好ミ植ルコトヲ勉

メス、広郷白ヲ指揮シテ^{チホシ}戸ヲ示ス可トテ、市来清十郎ニ命シテ始良
辺出シ場所ヘ杉材数百万本ヲ植タルハ広郷晚年ノコトニテ、未半
ニモ至ラサルニ広郷嘉永元年十一月江戸ニテ歿シ、其事終ヘス、二
十余年ヲ過テ山野開拓ト云コト盛ニ行ハレ、皆伐木トナリタルト聞
ク、初ヨリ適宜ノ良地ヲ撰ヒ下払ヒモ届キタル故大ニ成長シタル由
ナリシガ、惜キコトナリ、此法ヲ数十年モ行ハンニハ、県下ノ用ニ
乏シカラスシテ人民ノ為ニナル可キコトナリシガ、一大藩ニテ不意
ノ火災等モアラシニハ、兼テ其備ヘナクンハ有ル可ラス、鹿兒島湾
内ニ便利ノ土地ナラネハ急ノ用ニ備ヘ難キヲ以テ、特別ノ方ヲ設ケ
タル深キ思慮ニテ植ヘタルコトナリシモ、一時ノ流弊ニテ難タルハ
返ス／＼モ惜キコトナリシ、

〔三〕

〔一〇三〕 財政改革・農政改正・軍政更革等、調所事績ノ事

本藩自佗国戦争ノ末、天正中ニ至リ豊太閤ノ征討、朝鮮七ヶ年ノ在
陣、関ヶ原ノ役、元和建寧ノ後モ將軍家松田邸入御、上野造營、美
濃川手伝、竹姫君入興、皇子ヶ原犬追物、初ハ火災等、其他屢費財
多ク負債積リタル上ニ、重豪就封以來世ノ變遷ニ從ツテ男女共ニ列
侯ト養子婚嫁シ、殊ニ將軍家ヘノ入興、亦近衛家ニ嫁シ、文恭公ノ
代ニハ一体奢侈ノ極トナリ、其折シモ子孫繁殖、養子婚嫁概ネ虚歳

ナク、高輪邸ニ重豪、白金邸ニ齊宣、芝ニ齊興・齊彬、内外ノ費夥
シク、且芝高輪邸ノ延焼、加ルニ吉凶ノ大札漸次ニ累リ、新古ノ負
債五百万兩ノ巨額トナリ、度々大坂ノ方法ヲ換ルト雖モ、限り有ル
國產ヲ以テ弁スルコト能ハス、皆約ニ背キ信ヲ失ヒ、銀主中出金セ
ス、江戸邸中月給十三ヶ月滞リ、諸買入物ノ代価・夫賃亦同シ、使
ヒ出ルニ駕籠ノ夫ヲ給スルコト能ハス、歳末ニ贈ル目録モ金ヲ渡ス
コトヲ得ス、邸中草長シ馬草トスルニ至リ、参勤交代ノ旅費備ハラ
スシテ滞府トモナリ、國元ヨリ西ノ宮ノ泊マテ東海道ノ旅費備ハラ
サリシコトモアリ、至困ノ極トナリ、京・坂・國元共ニ押シテ知ル
可シ、是ニ至ツテ重豪・齊興寢食ヲ安ンセス、百万手ヲ尽セ共、今
日ノ用途ヨリ弁セサルニ立至リ、既ニ国家荒廢ノ秋ニ臨ミ、止ヲ得
ス負債ヲ閣キ國產ヲ以テ支弁スルノ法ヲ立、調所笑左衛門広郷ヘ改
革ノ主任ヲ命ス、広郷少年ヨリ君側ニ有テ更ニ財政ヲ知ラサルカ故
ニ、堅ク辭スレ共免サス、命ヲ奉シテ大坂ヘ出テ銀主中ヘ懇々出金
ヲ依頼スト雖モ、夫迄何ケ度モ期限ヲ違ヘ約ニ背キタル末ナレハ一
人モ肯フモノナク、剩ヘ漫言ヲ吐キ恥辱ヲウケ、其俣江戸ヘ帰り復
命スルコト能ハス、死ヲ窮メタルニ及ンテ、濱村孫兵衛等其情実ヲ
察シ平野屋五兵衛外四名ヲ語ラヒ新銀主ヲ設ケ、当座ノ用金ヲ携ヘ
高輪公ヘ拜謁ノ上ニ其金ヲ納ム可シト、広郷平野屋五兵衛・濱村孫
兵衛ト同行シテ江戸ニ出、重豪ヘ復命シ兩名ガ拜謁ヲ願ヒタレハ、

翌日出可シトテ、翌日高輪ノ書院ニテ初謁ノ礼終リ、庭中ノ小亭ニテ重豪面謁アリ、遠路甚タ太儀ニ存トノ挨拶アツテ、従前ヨリ財政困迫ノ事由ヲ悉ク演説、今日ニ至ツテハ諺ニ路頭ニ立ト云コトアレ共、予カ今日ノ景況ハ立所デハナイ、路頭ニ寝テ居ルノジヤカラ各深ク察シテ宜ク頼ムト、立板ニ水ヲ流スカ如ク申サレタルニ、彦兵衛少シ頭ヲモタゲテ、恐レ入タル尊命畏リ奉ル、夫ニ付一言申シ上度ハ、是迄御用金ノ節御家老様ヤ御用人様カ御出坂堅ク御約定ノ上ニ御用達仕候ヘハ、亦外様御出坂トナリ御用金承知仕、其儀ハ先ニ御約定仕候ト申上レハ、夫ハ何某ノ致シタル事ニテ此節ハ亦別途ノ事ト承知仕リ、左様ニ区々ノ御事ニテハ私共ニハドナタ様ヲ御相手ニ可仕様モナク困リ人事ニ候間、此節ハ笑左衛門様ト堅ク御約定仕リタルコトナレハ、此度ノ儀ハ御成就相成迄ハ笑左衛門様ハ御變リナキ様奉願ト申タレハ、重豪答ヘニ、其儀ハ罷成ス、笑左衛門モ予カ意ニ適ハヌ取扱スレハ直ニカヘネハ成ヌ、去ナカラ是迄ハ其方杯ニ引合ナシニカヘタレ共、以後ハ引合ノ上ニカヘルカラ左様ニ心得ヨト申サレシカハ、兩人拝伏シタリ、偕今日緩々致ス可シ、後モ亦出可シト内ニ入ラレタルニ、兩人ハ高欄ニ倚リ暫時忙然トシテ居タルカ、平野屋濱村ニ向ヒ、孫サン、是迄ノ事カ出来ナンダ筈ヂヤトイエハ、濱村、ナゼニト云、平野屋、今日拝謁シテ見レハ殿様カ御家老様、御家老様カ殿様ヂヤカラ何テ出来ル筈ガナイト、大ニ感服

シ、金ヲ納テ江戸ノ用ヲ終ヘ、兩名ト共ニ広郷ハ大坂ニ出テ改革ノ事業ニ係リ、鹿兒島ヘ下リ国産改良ノ事務ニ従事シタリ、

因ニ云、広郷ハ財政金穀ノ道ヲシラスト雖モ、従前ヨリ出タル家老・用人トカワリ忠愛ノ情厚キト、亦重豪ノ威名ニ服シ平野屋五兵衛ヲ初メ新組ヲ設立シタル由、大坂中ノ富商皆人氣ノ離レタルニ出金スルハ時ノ勢大ニ難キコトナリシ由、広郷二十三年ヨリ重豪ノ側茶道トナリ、意ニ称ヒ、拔擢シテ四十三迄左右ニアリ、五十三ノ時改革ノ主任ヲ命ス、広郷ハ安永五年ノ生ニテ文政十一年ハ五十三、重豪ハ延享二年ノ生ニテ八十四、衰頹ノ財政ヲ挽回スルニ銳意ナル、亦文化ノ初、魯シヤエソ地ヲ掠メ英人長崎ヲ擾リタル時、官ニ請テ自ラ是ニ当ント左右ヲ相手ニ擊劍ヲ試ミラレシカ、其時年六十余、実ニ嬰鑠タル翁ト云可シ、広郷性質敏ニシテ人ヲ見ルコト明ラカニ、若キ時角力ヲ好ミ酒モ好メ共、事ヲ執レハ詳悉ニシテ勉メ人ノ信ヲ得、事ヲ任スレハ不疑、故ニ財政ニ疎シト雖モ改革ノ主任ニ堪ン事ヲ慮リ、重豪齊興ト協議シテ命セラレタルカ、国産改良ハ多年ノ間財政困難ヨリ弊ヲ生シ、何品ニヨラス品位ヲ減シタルヲ一時ニ改ルハ至テ難キ事ニテ、第一ハ大島・徳ノ島・喜界ノ三島ハ皆官ニ統一シテ従前ノ風ヲ一変スルハ、今ニシテ考ヘテモ速ニ功ヲ遂ケ難キ事件ナルニ、宮之原源之丞主任シテ渡島シ、次ニハ肥後ハ左衛門慎密懇側方ヲ処スルコト善シ

テ、其年ヨリ島民モ安シ砂糖モ品位ヲ増シタル以來、年ヲ追フテ整理シタルハ善ク民情ヲ察シ立タル所以ナリ、其佗藩内ノ事務、広郷ハ鹿兒島ニ有事二三ヶ月ニ過ス、九州・中国ヲ經テ大坂ニ出、伏見・京都ノ事ヲ終ヘテ年末必ス江戸ニ出ルヲ恒例トス、是改革ノ初重豪・斉興ノ命セラレタルカ故ニ、藩内ノ事務勝手係リ家老ノ司ル所ナレ共、趣法方三原藤五郎經福ニ主宰セシメ百事ヲ總フ、凡十五六年死ニ就ク迄人ニ功勞アリ、米ノ一種ニテモ云ハ、刈上ヨリ米ノ精疎、唐箕ヲ用ヒ、縄・俵ノ製造肥後米ニ擬ヒ胴ヲシメ内実ヲ等フシ、其佗ノ産皆同シク精ヲ究メ微ニ入リタルカ故ニ、仙ヒ大坂ニテ他國ノ産ニ冠スルハ仙表ニモ明ラカナリ、広郷在番中百事執掌細大指揮ス、三原其下ニ在テ金穀ノ出納・産物皆監督検査、其人ヲ撰テ使令ス、鹿兒島中ノ庫藏數十、各郷五六十有テ、改革以前法律ヲ犯シ罪ニ陥ル者多クシテ年々絶ヘス、改革以來ハ監督検査嚴正ナルヲ以テ犯スコト能ハス、亦唐物方ハ坂本権之丞、厩ハ江田正藏ニ司ラセ、金穀ノ藏々出納ハ趣法方ニテ検印シ、秋毫モ欠漏ナク、旧藩ノ法、勝手ノ事務勝手係家老ノ專權ニテ、趣法方ト云一局ハ側用人・側役ニ司ラセ、其下ニ数名ノ副役・書記アリシ故ニ、財政ニ練熟スルヲ以テ三原藤五郎ヲ初其局ヨリ登庸ス、山林ノ事ハ有川藤左衛門ニ命シテ旧弊ヲ改メ、日州赤江二三隻船ヲ設ケタルハ金方猿渡彦左衛門、江戸財政ハ早川環・新納四

郎右衛門・平出直之進、金方ハ重田郷左衛門、後ニ中村源助、此数名ハ多年趣法方ニ有テ各局ノ情実ヲ詳ニスルヲ以テ、広郷改革ノ初ヨリ信任シタルハ善ク処スルノ明ト云可シ、大坂ハ留守居ハ小森新藏、後田中善左衛門、金方有川勘助・宮里八兵衛、後ニ蒲生郷左衛門、見聞役ニ菱刈七左衛門・丸田泰藏、後田畑仲左衛門等ナリ、産物ノ良否ヨリ出納・運漕ノ如キ、土地ノ習慣可否ニ通セサレハ施スコト能ハス、皆濱村孫兵衛力意ヨリ出タルコト多カリシカ、砂糖ノ処方ハ近年迄モ其方ヲ遵守シタルヲ以テ見レハ、善ク規律ヲ立タリト云可シ、広郷家老ニ任セラレタル以來ハ、隨從ノ用人ニ高崎金之進ヲ趣法方書記ヨリ擧テ常ニ左右ニ置キ、高崎力書記ハ宇都長兵衛ニテ諮詢ニ備ヘタルナル可シ、清熙天保六年ノ十二月初テ大坂ニ出、同七年ノ冬ヨリ広郷ヘ隨從ヲ命セラレタル故、從前ノ事ハ聞及ヒタルト広郷ノ話ヲ聞タルヲ記ス、改革組織ハ三島ノ砂糖ヲ大本トシ、米・菜種子其他ノ國産ヲ以テ支弁スルノ法ニテ、改革運動ノ初ハ天保元年ナリシカ、國産日ヲ累ネ月ヲ積テ良品トナリ、多年ノ弊ヲ矯メ、費ヲ省キ、良緒ニツキタルハ同四年頃ナル可シ、其時重豪薨セラレ、斉興益々嚴令シテ、白ラ節儉ヲ守ルコト堅ク、精ヲ勵テ統御シ、五百万兩ノ大負債償却ハ改革ノ要件ナルヲ以テ、天保六年ノ冬大坂ニテ年々二百万兩ヲ以テ返償スルコトヲ示ス、是重豪ノ素志ナリシ由ナリ、斉興天性

寡欲、嗜好ナク起居方正、躬澣濯ノ衣ヲ服シ、左右ノ黒赤カネ金物、刀劍ノ柄皮、鹵簿ヲ省キ、食膳淡薄、琴・三弦ヲ不好、唯能ヲ好ム、左右其胸臆ヲ窺フ能ハス、亦書画ヲ善クス、小楷ノ如キハ古ノ名流ニ等シト云、事ヲ決スレハ毅然トシテ不動、江戸ヲ発スル前夜、延焼既ニ邸中ニ及ハントスルニ、タトエ焼ル共立可シ、衣装ヲ蔵ニ入ル可ラスト命シ、幸ニ焼サレ共烟ノ中駈通り川崎ニ宿ス、高輪邸ニ移リタル後、月毎ノ能ノ日アメリカ船入港、江戸ニ入ルノ勢ナリトテ郊外ノ洵々タル、タトフルニ物ナシ、近親皆使ヲ以テ起居ヲ問フニ、洋人ノ江戸ニ入ルト云ハ万ナキコトナリ、尤モ軍杯ト云モノ倉卒ニ起ルモノニ非ス、必ス御心遣イアルナト答ヘ、邸中依然トシテ鼓笛ノ声ノミナリシ由、国库匱乏ノ日、士族ノ所有ニ重課シタル税、亦人民ニ課シタル類残ラス解キ免シ、従前大坂ヨリ下リタル芸妓皆還シ、其他淫靡ヲ未然ニ禁ス、白奉閣中ハ殊ニ嚴ナリトス、齊興ハ寛政三年ノ生ニテ広郷ヨリ劣ルコト十五、広郷カ重豪ノ傍ニ出タルトキハ八九歳ヨリ文政元年迄二十年ノ間高輪ニ馴レラレタル故、外々ヨリモ親シク愛顧衆ニ異ナリト雖モ、広郷日々百事ヲ上申スルニ至ツテ詳細周密ナレ共、退テ頭ヲ換テ、ケフモ亦叩カレタリト云シ事度々アリ、欠漏アレハ皆指摘シテ不貸、一タヒ聞ケハ年ヲ経テモ忘レス、己レ数君ニ仕ヘタレ共未タ此君ノ如キハアラスト、常ニ恐ルコト雷霆ノ如シ、

広郷傍ヲ離ルレハ飛脚毎ニ徹夜シテ上書ス、瑣末ノ事モ中スト聞タルカ、今調所ノ家ニ胎ル書ヲ見レハ其言ノ如シ、齊興朝廷ヲ重セラレルコト至ツテ厚シ、弘化元年、仏人琉球ニ来リシ年、古来ノ軍備海防ニ適セサルヲ以テ、清熙ニ命シテ大砲・小銃ヲ鑄造セシメ、沿海ノ大藩且琉球ヲ兼領スルヲ以テ、

皇国ノタメニ力ヲ尽サント銃隊ヲ整理シ、且兼テ鬼神ヲ崇敬セラレタルヲ以テ、藩内ノ新田宮・指宿新宮・東霧島社・国分大汝社・造宮、其他修繕等数フルニ遍アラス、皆国家鎮護ノ祈願シ、且仏力ヲ祈ラルニハ正官ノ僧ニアラサレハ大法秘法ヲ修スルコト能ハサルヲ以テ、大乗院大僧都堯満年序ヲ経レハ即今修法スルコト能ハサルカ故ニ、直任僧正ノ願ヲ清熙ヲシテ嵯峨御所ヘ上申シ、瑜珈定老公ヘ拜謁シテ具上シ、鷹司関白公ヘハ高橋兵庫頭ヲ以テ懇願シ、勅許ヲ蒙リ大法秘法ヲ修セシメラレタリ、是等齊興国ニ報スルノ志厚キ所以ナリ、事歴前後ニ亘レ共、菱刈七ヶ郷大ニ疲弊スルヲ救フニハ、曾木ヨリ山間ノ嶮岨ヲ疏シ舟ノ便ヲ開クアリト云フ多年ノ志ナレ共、丹波川ヲ大井川ニ疏シ甲府ヨリ富士川ニ疏ス類ナレハ果サレサリシヲ、天保十二年ノ冬突然清熙ニ主任ヲ命ス、清熙工事ヲ知ラル故ニ再三堅ク辞スレ共免サレス、衆ノ協力ヲ得テ幸ニ其功ヲ終ヘ、自在ニ舟ヲ通ス、其時初テ大口ヲ経回スルニ、良田ノ中ニ茅藪ヲ認メ郷役ヘ問タレハ、大口ハ田地ニ応

セス人少ナレハ止ヲ得ス地ヲ休ムルヲ休地ト唱フ、未タ休地ヲ増サ、レハ作り応セスト聞キ、初テ其事由ヲ広郷ノ江戸有ルニ告ク、大口肥後境ナルニ君公ノ名ニモ関シ甚タ恥ル所ナリト申越タレハ、其答書ニ休地ノ事ハ初テ聞テ驚クコトナリ、猶其村ノ人口、地ハ反歩詳ニ申シ越ト命セシ故、大田・里村ノ両村休地ヲ検査シ人口・畝歩ヲ申シ越シタレハ、其答書ニ、此度広郷カドリニ家ニ帰ラス川内ヨリ菱刈其他ノ疲勞ノ郷々ヲ巡回シ、併セテ上見部下リヲ廢シ改正スヘキ命ヲ受タリ、猶詳カナルコトハ不日ニ出府ノ上ニ達ス可シト申シ来リタリ、其後江戸ニ出タレハ、右ノ如ク承リタルハ其年ノ六月ナリシ、清熙旧弊ヲ改メラルハサルコトナカラ、上見ノ弊ハ百年以來ノ事ニテ今日ニ至リ俄ニ改メラレンニハ、世ニ云不教ノ民ヲ殺スト云ニ類セン、当年ヨク示サレ来年ヨリ改正ニナリタシト申セシカハ、広郷佛然トシテ既ニ君公ノ定メラレタルヲ汝否ヤ云フ勿レ、亦深ク考フ可シ、此国ノ癖ニテ、ケ様ノ旧弊ヲ改ンニ来年ヲ期セハ果シテ行レ難シ、唯嚴命ヲ奉シテ施ニアリト承リ心ヲ決シタリシ、此上見ト云ハ、水旱蝗虫ノ年ハ必スアル可キ法ナレ共、其法ニ慣テ姦曲ノ弊ヲ生シ、巧ニ農民ノ利ヲ謀ルコトニナリ、部下リモ窮民ヲ救フノ良法ナレ共弊ヲ生シタルニテ、其事由ヲ云ンニハ、両ツナカラ種々ノ原因アツテタタシケレハ略ス、齊興詳ニ其事由ヲ聞テ断然廢スルヲ命セラレシナル可シ、

広郷江戸・京・坂ヲ經テ、川内ヨリ川登リシ、東郷、宮之城ニテトッロノ荒瀬ノ通舟ヲ見、天堂ヶ尾ヲ越ヘ、羽月ノ新ニ立ル藏ヲ見、大口ニ至リシハ七月盆ニテ、時既ニ秋収ニ近ク、頓ニ田租ノ全納ヲ令シテハ実ニ行ハレ難キコトニテ、広郷モ大ニ心ヲ苦メタリシコトナリ、清熙若年ヨリ卑職ニテ納メノコトヨリ農家ノ事ヲ暗シシ、旧藩壹斗以上ノ枴ヲ斗枴ト唱ヘ、米・俵ヲ二斗ニ升トシ、一升ニ一合ヲ加ヘ落散ニ備ヘ、一俵ハ三斗五升式合ヲ法トシタルカ古來ノ規則ナルカ故ニ、斗枴ハ壹斗壹升七合三勺三才入ルノ枴ニテ三枴ニテ三斗五升式合ト定リタルカ、イツノ比ヨリカ二合ヲ加ルコトニナリ一俵三斗八升四合納ルコトニナリ、門閭ヨリ士族ノ所用モ同シ、然ルニ亦漸次ニ弊ヲ生シ一枴二三合加ルニ至リ一俵四斗一升六合迄ニナリ、農民ノ堪可キコトナラサルヲ以テ上見ノ弊ノ生シタル自然ノ勢ナレ共、時ノ人ハ百年前ヨリ何トナク流れ来リタル悪習ニテシラス、農民モ暴斂ニハ苦ムト雖モ、其原因ハ父祖ノ前ヨリ出タルコトニテ知ラサリシコトナリ、広郷大口ヨリ栗野ヲ經テ真幸・小林迄ニテ引返シ、再ヒ栗野ヨリ加治木ニ出タルハ、二十日間ノ巡回中毎夜夫等ノ事ヨリ民間ノ疾苦ヲ村々ニテ聞ヒ、加治木洲ノ崎藏ニテ前年ノ納ノ如ク試ミタルニ四斗一升三合余ナリ、広郷初テ見テ清熙カ云シコトヲ信シ、鹿兒島ヘ歸リタルハ八月十日比ナリ、則チ上見部下リ廢スルコトヲ令ス、夫ヨ

リ農政改正藏々納ノ枘田規ニ復ス可ヲ令ス、其外農民ノ疾苦ヲ除キタルハクダクシケレハ略ス、其年ヨリ租税全納トナリ、百姓安堵シ流民帰郷シ、年ヲ追フテ農政緒ニツク、溝洫・道路・橋梁ヲ修繕シ、神社・仏宇亦修ム、堤防ヲ修築シ、水害ヲ除キ、小林川・踊川ヲ浚へ、亦肥後岩永三五郎ヲ雇ヒ、初上稲荷川ニ永安橋ヲ架、同川筋二三、甲突川二六、其佗諸所ニ架スルハ木材ト民力ヲ費サス為ニシ、従前甲突川年毎ニ溢レ、柿本寺馬場ヨリ加治屋町・新屋敷皆水害ヲ受ケタルヲ、其以來今ニ至リ一度モ溢レタルコトナシ、川下ニテ不斷土砂ヲ揚ケ、天保山ヲ築キテ兵隊ノ訓練場トシ、伊敷村・小野村・永吉村等ノ溝筋ヲ通シ堤防ヲ築キタル類數フニ遍アラス、曾木川疎通、菱刈七ヶ郷大二便ヲ開キ、宮ノ城ノ蔵ヲ栗野ニ立テ、農民安息スルニ及ンテ猶自ラ巡見アラント、郡山ヨリ入来・山崎・宮ノ城・鶴田・羽月ノ蔵ヨリ大口休地ノ開拓ヲ見ラレ、本城・湯ノ尾・栗野・吉田・古松・馬関田・加久藤・飯野・小林・野尻ヨリ高岡・倉岡・穆佐・綾ニ至リ、去川・高城・末吉・福山・敷根・国分・加治木ヲ巡見シ、再度ハ蒲生・重富・帖佐・加治木・国分・敷根・福山原ニテ銃隊ノ訓練ヲ見、末吉・松山・志布志・大崎・串良・高山・始良・大始良・大根占・小根占・田代・佐多ヨリ引返シ、新城・花岡・垂水・桜島迄巡見シ、銃兵一隊ヲ率ヒテ海岸台場ニテ訓練セシム、兩度ノ路程百五

十里余、嶮ヲ平カニシ岨ヲ開キ車馬ノ往来ニ便シ、止宿ハ各郷地頭飯屋ヲ修理シ、有事ノ日陣營ニ備ル為ニシタリ、亦山川ハ海口ノ要地タルヲ以テ、其時清熙地頭職タルヲ以テ地頭飯屋ハ正隆寺ヲ造営アツテ出張ノ用ニ備ヘラレン事ヲ申シテ建ラレ、番所岬ヨリ指宿大山崎ニ台場ヲ築キ港内ノ防禦ニシ、喜入黒地蔵坂ヲ海岸ニ通シ、今和泉瀬崎ヨリ城山ノ下宮ヶ濱ニ道ヲ開キ、道路ヲ平坦ニシテ車運搬ニ便ス、軍政更革ノ起源ハ、清熙十三四ノ比ヨリ軍書ヲ讀コトヲ好ミ、且家ニ甲州流ノ兵書ヲ伝ヘタルヲ見テ、信玄ハ古今ノ英將ナルニ、此伝ハ真ノ物ニ非スト思ヒ、此藩ノ兵事ハ徳田氏カ卓見ナルト聞、初テ民心録ヲ平田氏ヨリ借テ一覽シ、大ニ目ヲ開キ、平田直次郎宗可ハ隣家ニテ清熙ヨリ年マス十四、第八太郎宗敬ハ年マス八、宗可博學多識、兵ヲ好ミ武ヲ嗜ミ、性剛直ニシテ不阿不滔、国士ノ風アリ、清熙少年ヨリ從遊シテ教ヲ受クルコト多シ、民心録ヲ見ルニ及ンテ宗可ニ問ヘハ、兵備ニ卓見ナルハ徳田氏ニ如クハナシト聞、猶遺書數篇ヲ川崎四郎左衛門ヨリ借テ見テ、弥甲州流ノ時世ニ適セス迂拙ナルヲ知り、国ノ欠典ナルヲ慨クト雖モ、草野ノ人ノ与ル能ハス、心ニ藏ムルコト多年、広郷君ニ從フニ至リテ其説ヲ進メタレハ心ニ称ヒ、公ニ上申セラレ、幸ニ成田カ西洋ノ砲術ヲ伝ヘタルニ遭テ兵政更革ノ議ヲ定メ、旧弊ヲ廢セラレ銃陣

ノ法ヲ組織セラレタリ、成田ノ砲術ハ、天保八年アメリカ船山川港外ニ來ル、居ルコト幾クナクシテ去ル、時新納主税ヲシテ長崎ニ告、此時高島新二蘭人ヨリ西洋兵書・砲術ヲ伝フ、高島新納ニ謂テ曰ク、貴藩ハ海國ナリ、外寇ノ備ヘナクンハアラス、君婦ヲハ申ス可シト、劍銃一把ヲ与ヘ新鑄ノ様式ニ供セシム、其前鳥居平八高崎カ門ニ入テ荻野流ノ伝ヲ受、其繼奥ヲ極ハム、新納主税高島ノ託シタルヲ鳥津但馬ニ伝ヘ、公ノ聞ニ達シ、鳥居長崎ニ往テ高島ノ説ヲ聞テ従前ノ拙ナルコトヲ知ル、鳥居長崎ニ行ヤ、平田宗可頼リニ懇懇シ、益満新十郎ヲ以テ鳥津但馬ニ申ス、但馬公ニ申シテ其門ニ遊ハシム、鳥居再遊シテ死ス、直七死シテ弟平七ヲシテ伝ヲ繼シム、皆但馬ノ指令ナリ、鳥居業成テ婦ル、其門ニ入ル者多シ、天保十二年公鳥津但馬ヲシテ其技ヲ谷山中塩屋ニ試シム、御流儀砲術ノ名ヲ立、鳥居ヲシテ其教ヲ掌ラシム、軍政更革ニ及ンテ甲州流五段備ヘナルヲ廢シテ惣銃陣トシ、鳥居故アツテ姓ヲ成田ニ改ム、成田正右衛門ヲシテ是ヲ掌ラシム、爾來操鍊ノ法・防禦ノ術日習月ニ講シ、煩鑄・銃造年々增多シ、亦銃藥ヲ滝ノ上ニテ製造シ、貯藏ヲ建テ蓄積シ、海岸台場ヲ築キ、運搬ノ車ヲ製シ、清熙巡回ニハ銃隊ヲ率テ各郷ニ調練ヲ示シ、吉野原ニテ大調練スルニハ前日ヨリ野營ヲ立テ、森喜右衛門食事ヲ掌ル、士族ノ指揮ハ番頭川上式部・川上龍衛・頼廷織部・鳥津隼人・鎌

田刑部・喜入壬生ナリ、大砲・小銃ノ鑄造筋ヲ立ラレタキコトヲ兼テ頻ニ請フト雖モ、其比甚タ多事ニシテ遲延シタルニ、天保十五年江戸在リシ日、琉球ニ仏ランス人來リ人ヲ留メタルノ報達シ、二階堂右八郎・近藤彦左衛門・坂本休左衛門ニ兵隊ヲ附遣ス事ヲ清熙ニ被命、併テ鑄製所・銃藥製造所ヲ設ルノ命ヲウケ、介天波戸ニ立、鑄物師・鉄砲鍛冶・刀鍛冶等ヲ集メ、西洋ノ原書ヨリ繹^(訳)シ、係ノ内主宰ノ成田ハ無論、田原直助専ラ力ヲ尽シ、職工ニモ意外ノ良工数名アツテ、小銃数千挺日アラスシテ功ヲ奏シ、大砲モ初メ六ホント・十二ホント・三十六ホント・八十ホント迄鑄テ、皆度々試ミタレ共損シタルコトナク、小銃ハ竿折カネ折タレ共、鍛ヒヲ心得タル後ハ損セス、銃藥ハ滝ノ上ニテ製シ、後ニハ數十百万斤トナリ貯蓄ノ藏ニ滿タリ、初ノ間成田・田原ノ心ヲ尽タル職工亦同シ、伝授ナクシテ原書ニ因テ思慮ヲ尽シタルコトナリ、一士族所有ノ高ニハ享保中嚴密ノ規則有リシニ、百年余ニ及ヒ自ラ弊ヲ生シ有名無実ナルノミナラス、今日行ハレサルコト多ク、軍政ヲ立ルニ兵賦ヲ定ムルコト能ハス、百年來ノ流弊ヲ一時ニ更ムルハ至難ノ事ナルモ、速ニ改正シタルハ威重ニ服シタルナリ、一改革以來、金ノ私ハ藏々滯リナカリシカ、米ハ折々滯リタリ、改革以前、文化・文政中ハ夏ニナレハ年毎ニ足ラス、士族扶持方ヨリ夫賃皆同シ、弘化元年後ハ出納ヲ修整シ、費ヲ省キ、用ヲ節シ、

年々余石ヲ生シ、江戸ニ予備ノ米ヲ千石堀端ノ蔵ニ貯ヘ、大坂亦同シ、鹿兒島ニハ嘉永元年ニ至ツテハ三万石余、各郷凶荒ニ備ヘ穀蔵ヲ立テ蓄ヘ、蔵ノ造リモ肥後八代ノ穀蔵・麻布米沢ノ蔵・南都ノアセ蔵等ニ擬シテ立タリ、漸次ニ増シテ、五年ノ後ハ凶荒・兵備二十万石ニ及ホサントセシナリ、

「〇四 城内宝蔵ニ納メタル百万両ノ事」

一 小判金五十万両

右ハ、改革ノ初ヨリ広郷ヘ命セラレタル三ヶ条ノ大事件ナリシヲ以テ、城内宝蔵ヘ齊興ノ朱印ノ切封ニテ納メ、追テ百万両ニ及ヒタル日、此金ハ国家ノ大事ニ非レハ用ヒサル至重ノ書ヲ添ヘ置ク事ヲ命セラレタリ、是西海ノ大藩琉球ヲ兼領シ、外寇防禦ノ備ヘニ供セラレントノ意ナリ、

「〇五 広郷ノ始良辺海岸ヘ植エシ杉ノ事」

一 領内山林ノ弊ヲ革ムル事ヲ初メ、有川藤左衛門ヘ命シテ伐木ノ法ヲ緊要ニセシモ、十余年ヲ経テ山奉行カ伐木ヲ好ンテ植木ヲ勤メス迎、広郷自ラ市來清十郎ヘ特命シテ、始良辺海岸ニ便ナル領地ニ数百万本ノ杉ヲ植不意ノ用ニ備ヘ、三十年ニナシトシテ成長シタルヲ開拓流行ノ際ニ皆伐リタルハ惜シキ事ナリシ、

「〇六 深意アリテ下町ニ木綿織屋ヲ建ラレタル事」

一下町ニ木綿織屋ヲ立ル事ヲ清熙ト重久佐次右衛門ニ命セラル、従前ハ士族中皆手織ヲ用ヒタルニ、遊惰ニ趣クコトヲ慮リ立テラレタルコトナリ、躬澣濯ノ綿服ヲ用ラレタルヲ以テ考ユレハ、深キ心アリシ事ナラン、

「〇七 人別サシ杉ノ法ヲ復シタル事」

一本藩吉貴代、元文二年頃人別サシ杉ト云一戸少クノ程出錢ニテ植木ノ法アリシカ、後ニハ実地に行ハレサルト聞キ、嚴密ノ旧法ニシタル故、今モ残リタルハ有可シ、是等ハ後年ノ良法ト云可シ、

「〇八 朽木ノ栽植起原及び蕃植等ノ事」

一 朽木ハ沿海ノ地質ニ適シタル良木ナルカ、起リハ国分ノ有馬丹後ト云者、大島ヨリ苗木ヲ得テ婦リタルヲ、指宿・山川ニ植ルコトヲ家久ノ命セラレタルトカ、其後島津圖書・寝占丹波等ノ良太夫盛ンニ植ヘテ、郡奉行ニ別ニ朽木郡奉行ヲ命シテ、各郷ニ朽木方檢者ヲ遣ハシ、蕃植ノ法ヲ嚴ニシタル故ニ、適宜ノ地ハ殊ニ盛ンニナリ、文政中成実盛ナル比ハ、清熙能覺ヘタルカ、各郷新ニ朽木實ノ蔵ヲ立、朽木一俵ニ代米四升ヲ与ルニ苦シミ、亦蠟ノ価賤クシテ四升ノ代価ヲ償フ能ハスト云ノ勢ニテ、内々ハ朽木ヲ貴クセ

ス、良地ノ柵木ハ七八尺廻リ以上ニナリ庇蔭數畝ヲ覆フ故ニ、地主皆伐ルコトヲ好ムコトニナリ、自然ノ勢ヒ力ニ及ハス、今ニシテ見レハ、大ニ利益トナツテ農家ノ為トナル可ニ惜キコトナリ、

「〇九 広郷、一タノ宿ニテモ国産ニ心ヲ用イタル事」

一、楮モ柵方郡奉行ノ司ル所ニシテ、柵方検者ニ委ネ、各郷役ニ係郷士年寄ノ下ニ柵楮係リト云有テ生育ヲ專ニセシモ、良地ノ中ニ植タル楮ハ根蔓リテ害ニナル故、地主ノ惡ムヨリ年々ニ減ス、広郷長崎ヲ立テ肥前大村ニ止宿ノ夜、清熙ヲ呼タルニ、何ノ用カト思ヒ往タレハ、亭主ノ山口熊五郎力咄ニ荒蕪ノ地ニ適スル楮ノ苗ヲ多ク生育シタル由ナレハ、此苗木ヲ出水ノ地ヘ植ヘテヨカル可シト思フ、出水ノ伊藤伝五左衛門ヘ其由ヲ伝ヘ、船ヨリコ、ニ来リテ請取ルコトヲ計フ可シト命シタリ、広郷一タノ宿ニテモ国産ノ事ニ心ヲ用ヒタル如此、藩内ノ蠟ノ品位劣リタル故、中国路ニテ召列レタル桐野孫太郎ヘ製蠟ノ伝ヲ受サセ、後芸州ヨリ蠟師ヲ雇ヒ下シ、大ニ蠟ノ品位ヨクナリ、各所ノ蠟製皆變シタリ、広郷姫路領ヲ通ルニ道路ノ能ク修リタルヲ見、其后通ルニ従前ノ如クナラス、怪ンテ問シカハ、家老ノ河井準之助死シタルト聞キ、其夜清熙広郷カ宿ヘ往タルニ、今日路ニテ何ソ心付タルコトハ無リシカト聞キ、夫ハ道路ノコトカト申セシカハ、其コトナリ、是ハ

他ノ事ニ非ス、イツ方モ同シコトヨト申シタルカ、後ニ思ヒ合スルコト多々アリシ、

「〇一〇 広郷ノ広ク国産開発ニ着手セシ事」

一 国産藍・綿・硫黄・明礬・牛馬皮・海人草・櫛木・椎実・椎茸・養蚕・山野ノ採草、手ヲ下サ、ルハ無シ、亦石炭ヲ搜索シテ、筑後三池ヨリ礦夫ヲ雇ヒ諸所見セタル共得ス、其頃末タ石炭ノ用ナキ頃ニテ、此国ハ蔭ニ乏シカラサルヲ以テ無用ノ事ト考ヘタルニ、今ニシテ考フレハ先見アリタルト云可シ、慶長七年頃蜜柑・九年母ヲ東洋ヨリ取寄セラレ、佐多・根占ヘ植ヘラレタルハ義弘ノ命ナリシ由、今盛ンニ桜島ノ産トナリタルモ其種ナル可シ、朝鮮ノ役韓人ヲ連帰ラレ、今ニ陶器ノ製ヲ伝ヘ歎称スベキコトナリ、

「〇一一 藩内諸所ヨリ遺漏ナク人材登用セシ事」

一 吉貴ハ上木ノ事業モ多カリシ由ナルカ、左右侍女少シク美麗ヲ飾レハ氣色悪シク、質朴ナレハ喜ハレタル由、其時定メ置レタルヲ享保ノ規模ト称シテ遵守シタリ、改革ノ際モ皆此法ニ拠リテ立タルコトナリ、各郷ヨリ浦々各島ニ至リ遺漏ナク能人ヲ用ヒラレタルコト明カナリシ、天保中矢野喜三次・税所源右衛門ニ命セラレ、民戸・人口・出島・産物・租税、浦々各島迄モ残ラス沿革ノコト

モ記録サセタルカ、今ニナリテモ擬トナル可キ記録ナリシニ焼捨タルハ惜キコトナリ、

「〇一二 改革以來領民ノ重課ヲ解キ免セラレシ事」

一門閥ヨリ社寺・士族・各郷士族ノ所有凡四十万石ナルニ、上見部下リノ弊ヲ廢セラレタルニハ大ニ幸ヲ得シコトナリ、且改革以來ハ重課ヲ解キ免サレ、人別一匁銀一人三厘重銀殘ラス免サレ、亦各局ニ奉職シタル給養年々十万石ニ及ビタルニ、枘ノ改革アリタルヨリ一俵二三升増シタルニテ、凡一万石ノ増給トナリタル如クナリシコトナリ、

「〇一三 火防ニ備エテ西田町ヲ整備セシ時ノ事」

一西田町ハ西目ノ要口ナルニ、道路狭ク且茅屋多キカ故ニ、道ヲ広メ、水ヲ通シ、火防ニ備ヘ家屋ヲ移スノ費ヲ助クルニ無利ノ金ヲ貸シタリ、

「〇一四 下町ノ救済ト繁栄ノ為ニ行イシ事」

一下町ノ為ニ三千兩ノ金ヲ貸シ、疾苦ヲ救ヒ課出ヲ免シ、海岸船ノ便ヲ開ク為ニ堀ヲ浚ヘタリ、

「〇一五 上町繁栄ノ為ニ新旧波戸ヲ修築・新築等セシ事」

一上町ハ其頃ヨリ疲弊ノ色ヲ顯ハシタル故ニ方ヲ施スコト多シ、猶委シキコトハ申シ出タル書ニ詳カナリ、下町海岸ヨリ上町浜マテ波戸ヲ修繕造築、東風除ノ波戸ヲ新築等、別紙ニ詳ナリ、

「〇一六 鯨骨・牛馬骨ノ輸入ヲ盛ニシテ農民培養ニ努メシ事」

一藩内農民培養乏シテ收穫ヲ失フニヨリ、鯨骨・牛馬骨ハ地質ニ適シテ大ニ利アルヲ以テ、清熙ニ命シテ骨粕方ノ一局ヲ設立シ、資金ヲ供シ、黒岩藤兵衛ハ骨粕販売ヲ幼年ヨリ業トシ、自船ニ航シ(公説)テ関東・東海道・伊勢・志州・伊賀・紀・泉・河・摂・江州・中国・四国・三丹・雲・伯・北海・九州ハ云ニ及ハス、鯨漁ノ多少ヨリ出産ノ所知レサルナク、各浦ノ情実ニ通シタル故、骨粕方ヲ主任シ、輸入ノ約ヲ定メ、藩内諸所ニ支社ヲ立テ培養ヲ饒ニシタルヨリ、菜種子ノ一種ニテモ二十万石ヲ生シ、其他ノ穀物ヲシテ知ルヘシ、骨粕方一局ノ入費ノ外ニ更ニ其利ヲ収ス賑恤ヲ施シタリ、

「四」

「〇一七 海老原ガ曾木川浚ノ大事業ニ着手セシ発端」

天保十二年丑ノ冬、例ノ如ク広郷ニ從ツテ發足ノ五七日前ニ、今度

ハ余多ノ事業ニ係リ半途ニ至ラスシテ出ル事ナレハ、宗之丞ハ跡ニ残リテ道ヲ付上京スヘシ、去レ共事々ニ詳ニ其方法ノ次第ヲ示談ス可レ共、ケ程ニ繁劇ニテハ能ハス、因テ自ラ其命アル可シト承リタル故、凡何処迄随従ス可シヤト問タレハ、何レ迄トハ云難シ、肥後迄カ馬関カ中国ニモ至シカ、大坂ニハ及マシト、其後広郷ヘ随従シ、用済ノ所迄参ル可シト承リ、毎ノ旅装ニテ出立タリ、其日伊集院泊リ、翌日水引泊ナリ、日クレニ宿ニ着タルニ、町田孫太夫郷役々召連参リタル届ヲ申タルニ、其方ハ此方ヘト席ノ頭ニ参リタレハ、御意ノ旨ナリト承リ平伏シタレハ、其方ハ曾木川浚ヘト云コトアリ、存知カト承リ、世上ノ噂ハ承リ及ヘ共委タハ存知不知ト答ヘシカハ、此事先年ヨリ度々評議アレ共遂ラレス、然ルニ此節御決定ニテ浚ヘラル筈ナリ、右浚ヘ方ヲ宗之丞ヘ被仰付ハ発足前可達ノ処、繁劇ニテ今日ニナリタリ、御ウケ申スニテ有ベシト承リシ故、実ニ難有仕合ナカラ此儀ハ恐ナカラ御断申上ル条宜仰上ラレ可被下、其訳ハ私事少年ヨリ地方ノ心得ナキハ尊君ノ被知召通り也、サレハ私ニテ御受難仕儀幾重ニモ宜様奉願ト申シタレハ、少々気色ヲ損シ、御上ノ思召有テ可仰付ヲ御断ト云事ガ叶フ事カト承リタル間、左様ニ候、私ニテ出来ルコトナレハ粉骨碎身シテモ御受ス可シ、此事ハ私ノ出来サルコトナレハ何卒御免可被下候様奉願ト押返シ中タレハ、白身ノ出来ルト出来スヲ自身ニテ知ルカ、御目カネヲ以テ被仰付儀ヲ左

様ニ申ス道ガアルカト承リ、サレハ不肖ノ私ヘ御目カネニテ被仰付事ニ候哉ト申シタレハ、其通りノ事ナリト承リ、謹テ御受仕ルト申シタレハ、左様ニコソ申ス筈ナリ、其段中シ上可シ、儲是ニハ厚キ思召アリ、是程ノ大業ナレハ何レ御用人ニ係リナクテハナラス、即今三原藤五郎ヘ被仰付カ当然ナレ共、此度ハ梅田九左衛門ヘ可被仰付、九左衛門御上下定御供ナリシカ共、老年ニナリ余人ニ被仰付シ故氣落チニ可心得、此事ヲ被仰付バ歎ブ可シ、又三原ヘ被仰付時ハ、川浚ノ施行ニタトエハ宗之丞右ノ方ト云ンニ藤五郎夫ハ左カヨイトイエバ、宗之丞其意ニ背ク事能ハス、此事業ハ宗之丞ノ意ニ任セテ成功ヲ遂ケサセン為ナリ、九左衛門ハ宗之丞ノ意ノ通りナルハ宗之丞モ知ル所ナリトノ御意ナリ、トノ儀ヲ承リ拝伏シタルコトナリ、楮川浚ノ事殊ノ外御急ギナレハ、幸町田等モ来リタレハ、宗之丞モ中国迄モト思シコトナレ共、出水迄ノ間ニ用ヲ済シテ立歸リ、梅田ト会シテ、宮ノ城・鶴田ヨリ川ヲ検査シテ成否ヲ申ス可シ、梅田ハ老年ナレハ嶮岨ノ検査ハ叶フマシ、夫等九左衛門ヘ談シ宜ク計フ可シトノコトニテ、翌日阿久根泊、翌日出水、翌日立ノ節堺ヶ谷迄送り、僕ハ引返し、川内ニテ梅田ヘ会シ、川上ノ宮ノ城・鶴田ニテ九左衛門ハ街道ヨリ羽月、僕ハ山道川ヲ検査シタリ、

「〇一八 海老原が大小軽重ノ事務万般ニ関与セシ事」

一面度ノ巡見ノ比迄ハ、遠郷ノ田舎ナリシコトハ寒ニ抱腹ノ至リナリシ故、巡見ノ初メ、宗之丞ハ供方ヨリ郷々ニテハ其郷々ノ役々トナリ勤ム可シト命シ、大小軽重皆関セシコトナリ、京坂ニテハ留守居ノ事ニモ代リ、鹿兒島ニテモ類スルコト多々アリ、

「〇一九 人ノ忌諱ニ触レシコト少ナカラザリシ事」

一 広郷ヘハ多年随從シタル故、好尚嫌忌ノ心得モアリシ故、職外ノコトモ委ネシコト多ク、人ノ忌諱ニモ触レシコト少カラス、

「〇二〇 海老原ノ初上坂ノ事」

一 僕ハ天保六年末十二月初テ上坂シ、翌申ノ夏広郷ヘ面謁ス、申ノ冬ヨリ随從シテ、酉ノ春大坂ヘ歸リ、初上坂セシヨリ天保十年ニ鹿兒島ヘ下リタリ、

〔五〕

「〇二一 調所が農政改正ニ着手シタル経緯」

広郷ニ從ツテ京都ニ在リシ時、用アツテ大坂ヘ下リ上京スルニ、税所普門院ト同船シテ船中ノ話ニ、普門院ノ云ニハ、今調所君財政ノ改革アツテ三都ヲ初メ残ラス緒ニツキ、希代ノ偉功ト云可シ、然ル

ニ藩内ノ農政甚タ修ラスト聞、是亦君ノ修メラレ度事業ト心有人ノ云コトナリト聞キ、農政ノ修サルコトハ清熙モ此三五年ハ藩内ニ有ラサル故聞スト云シカハ、己ハ山伏ノコトナカラ世上ノ噂モ聞、亦弟ノ税所源左衛門大形田舎回勤ナレハ、所々ノ景況ヲ語ルヲ聞ハ世上ノ噂ノ如シ、君此コトヲ太夫ヘ申ス可シト慫慂セラレタリ、故ニ諾ス、

但普門院ハ仏儒學モアリ、詩文亦和歌ノオモアリシ山伏ナリ、其後話ノ次ヲ以テ広郷ヘ申シタレハ、答ニ、清熙カ知ル如ク己レハ改革ノ大任ヲ受ケタル以來三都ノ財政ニ奔走シテ未タ功ヲ終ス、農政ノ如キハ国ニアル同僚ノ任タル可シ、内外共ニ一手ノ及フ所ニアラスト聞テ黙シタリ、俗皆木川ヲ疎通スル日、初テ大口ノ地ヲ巡回ス、大口・里村ヲ過ルトキ田地ノ中ニ茅藪アルヲ怪シミ、所役ニ問ヒシカハ、君知ラスヤ、アレハ休地ナリ、此村ハ人少ニテ作り応セスト聞キ初テ驚キ、税所ノ申シタルハ此類ナラント考ヘ、其後ノ便リニ、大口ハ肥後境ナルニ良田ノ藪トナルハ、隣国ヘ対セラレテモ君公ノ御面目ニモカ、リ恐レ入事ナリト広郷ヘ申シ越タルニ、日アラスシテ広郷ヨリ大口ノ休地ノコト初テ聞タリ、夫程ノ不行届キハ有マシク思ヒタルニ甚タ驚クコトナリ、猶頭末ヲ詳ニ申シ越トノ通知アリシ故、大口ヘ至リ休地ノ町反・戸數・人員具ニシラベ、東京ヘ上申セシカハ、其報ニ君公ヘ中シ上タレハ、此度ノ笑左衛門カ帰県ノ時、

川内ヨリ家ニ帰ラスシテ川登リ、疲勞ノ郷々菱刈ヨリ真幸・小林辺迄検査シ、当年ヨリ上見部下ノ習弊ヲ廢シテ改正ス可シト命ヲ蒙リタリ、不日清熙上京セハ其上ニテ示ス可シトノコトナリキ、此上見部下ヲ廢セラルハ清熙カ申シタルコトニ有ス、誰ノ口ヨリ出タルカ考ヘテモ其人ヲ得ス、日アラスシテ上京シタレハ、此節ハ上見部下リヲ廢シ勞ノ郷々ヲ見テ改正ス可シト命セラレタリト聞タル故、各郷ノ習慣ハ改メラレスンハ有可ス、上見ハ多年ノ弊ニテ今年ノ納メ其心得ニテ作りタルコトナレハ、來秋ヨリ施サレタシ、既ニ田ノ毛上モ見ヘタル今日廢セラレテハ、謬ニ申ス不教民ヲ殺スト云ニ類センカト申シタレハ、広郷佛然トシテ、既ニ君公ノ定メラレタルヲ其報ヲ初メ難事ヲ云フ莫レ、亦深ク慮ル可シ、此旧弊ヲ矯正スルニ來年ヲ期セハ必ス行レ難シ、此上ハ命ヲ奉シテ事ヲ遂ルノ方ヲ勉ス可シト聞テ志ヲ決シ、広郷ニ從ツテ西京ヲ經、大坂ノ事務ヲ終テ發途ノ時、広郷ハ中国路、清熙ハ小倉船ニテ下レハ、下ノ関ニ着カハ夜口ニ急ギ鹿兒島ヘ下リ、三原經福ヲ同行シテ出水ニ來ル可シト命セラレ、兼道倍行シテ經福カ宅ヘ臨ミタレハ、經福病ヲ病シテ床ニツキ命ニ応スルコト能ハス、去其勉テ川内迄ハ出可シト答、清熙其日ヨリ出水ヘ立歸リタレハ、広郷ハ前夜出水ヘ着タリト、翌日從ツテ阿久根・高城ヲ通り久見崎ヘ着、三原モ此所ニ至ルト雖モ、病未タ不癒ヲ以テ巡回ヲ辭シ歸ル、其翌東郷ニ宿ス、翌朝三原ノ換リニ森

(日説カ)

川利右衛門來ツテ從行ス、宮ノ城・鶴田・曾木・羽月下ノ木場御藏地ヲ見、大口ニ兩日滞在、本城ヨリ栗野・吉松・吉田・馬蘭田・加久藤・飯野・小林迄立返リ、栗野・横川ヨリ山ヶ野金山ヘ立寄、加治木ヘ出タリ、其間凡二十余日、止宿毎ニ農政ノ改正第二ハ上見ヲ廢スルニハ農民ノ納ル枡ヲ減セサレハ全納ニ至ラサルコトヲ具論スル、左ノ如シ、

「〇二二 調所ノ行イシ農政改正ノ諸施策」

一 菱刈七ヶ郷ノ米ハ、宮ノ城ヘ天堂ヶ尾ノ嶮路ヲ越納ル故、大ニ苦ミタルヲ以テ、曾木ヨリ宮ノ城ヘ川ヲ疏、船ニテ下スノ便開カレタリ、

一 真幸五ヶ郷ノ米ハ、加治木迄馬負ニテ相納、遠路ニ苦シミタルヲ以テ栗野ヘ御藏ヲ建納ムルコトヲ申シタリ、

一 鹿兒島ヘ直納ノ節、上下浜上荷并浜馬カ賃錢ヲ食サル様、又ハ間屋中共ニモ過当宿料ヲ不食コトヲ論ス、

一 近在ヨリ各郷道路ヲ修繕シテ人馬ヲ便ニス、

一 役々巡回等ノ節、馬一疋ト定リタル外助馬ヲ禁ス、

一 役々止宿巡回ニ其村ヨリ酒・飯ヲ出スヲ禁ス、

一 農家ヨリ課出ヲシラベ猥リニ錢ヲ出スヲ堅ク禁ス、

一 本藩官庫ニ納ル枡ハ老年以上ハ斗枡ト唱フル官枡ニテ一斗一升七

合三勺三才入ルノ枘ナリ、三升ニテ三斗五升二合ヲ一俵トス、此
三斗五升二合ハ壹俵ヲ三斗二升ト立ル法ニテ、夫ニ一ノリト唱ヘ
三斗五升二合トナルハ落散ニ供シタルカ、然ルニイツノ比ヨリノ
事カ三斗八升四合トナリ、俗ニ云二ノリト云コトニナリ、給地モ
二斗入ニテ二斗二升納ルコトナリシカニ斗四升ニナリタリ、然ル
ニ文政ノ初ヨリ士族疲勞ニ趣ニ從ヒ、イツトナク納ノ枘強クナリ、
文政ノ末ヨリ御藏ノ納ハ一俵四斗トナリ、天保ノ初ニハ四斗壹升
余トナリ、農政改正ノ時ニ至ツテハ四斗二升トナリ、尤御藏ニ依
リ異同アリタル可シ、

右枘ノ事ハ従前ヨリ心得アリタレ共、猶此巡回中各郷ニテ即今ノ
事ヲ探索シ、且加治木洲ノ崎御藏ニテ加治木横目ト共ニ検査、広
郷モ傍ニテ枘取ヘ計ラセタレハ四斗一升三合アリシ故、広郷モ初
テ得心シ、帰郷ノ上三斗二升ニ二ノリシテ三斗八升四合ナレハ、
給地ニ斗ハ二斗四升ニ当ルヲ以テ定メタリ、以前納ニ比スレハ米
一石納ルニハ凡一斗ヲ減スル故ニ、上見ノ補ヒトナル可シト考ヘ
タルコトナリ、大坂登ノ一俵試ノ枘、斗枘三斗二升四合ノ法ナリ
シ間、凡三斗八升ナリ、亦郡方ニテ田地ノ納モ二ノリノ賦リナリ
シ故、折衷シテ揺込カキキリト云法ニテ三斗八升トナリタルコト
ナリ、此揺込カキ切リト云コトハ寛政ノ比ヨリ定リタル法ニテ、
新ニ設ケタルニ非ス、旧法ニ復シタルナリ、是等ノ処法実ハ巡回

中ニ定メ、鹿兒島ヘ歸リタルハ八月十日比ニテ、收穫ノ節ニ近ク、
上見部下リ廢スルノ令ヲ示サ、レハ能ハス、各郷受持郡奉行ヲ初
地方検査者・郷士年寄・与頭・横目・郡見廻・村々庄屋・名主・下
役迄、其旨ヲ示シ、郡奉行ハ云ニ不及不図ノ發令ニテ一同驚愕、
其年ノ景況、中以下ノ作毛ニテ上見ヲ日的ニシテ耕セシ郷々多ケ
レハ、各郷ノ情態ヲ知ル人ハ万二一モ行ハレスト考ヘタルコトナ
ラン、郡奉行ヲ初メ郷役々皆同シ、サレ共広郷少モ志ヲ變セス、
前文ノ条々外ニモ每郷ノ救ニ成事業、疲勞ノ村々ハ功役ヲ起シ人
ノ益ヲ謀リ、百方手ヲ尽セ共、其意ヲ知モノナク、広郷ノ意ハ租
税金納ニ至ル迄ハ、牛馬・家屋ヲ売共自身雇ヒニ出ル共、更ニ心
ニカケス、然ラサレハ慣習ノ惡弊改正シ難シ、サレ共全納トナリ
タル以上ハ救済ノ方ヲ施ス可シト、サラハ收穫ヲ残ラス納メ飢餓
ノ備ヘナクンハ今官ニ米ノ貯ヘナシ、密ニ其備ヘヲ立テント申シ
タレハ、夫ハ尤ナリ、密ニ用意ス可シト聞キ、濱崎太平次ニ金ヲ
齎ラシ、肥後ヨリ米七千石ヲ積来リ山川ノ町ニイレタレ共、知ル
人ナシ、亦兼テ上見ニ慣タル所、或ハ不熟ノ郷々ヲ注意シ、農民
ノ益ニナルコトヲ施シ、人氣ノ勸立コトニ從事シ、此度ノ改正ハ
疑ナク租税金納スルコトヲ奨励シ督促ヲ嚴ニシタリケレハ、皆前
後ヲ顧ミスシテ納ルノ勢ニナリ、百二十余郷一村モ残ラス全納シ
タリ、百姓中ノ人氣進ミタルハ御藏ノ枘減シタルガ故ナリ、

本藩石ニ云如ク、御蔵入ト云田租ヲ納ル所各郷ニ凡五十、其内給地高四十万石ノ出来ヲ納ルヲ出物蔵ト云、其蔵毎ニ下代蔵役人ヲ置キ計算ヲ遂ケシメ、此下代蔵役人ヲ各局書役ノ救助ニシテ、亦他ニ讓ルヲ附屬ト唱ヘ士族ノ得益トセシコトナリ、各局ノ書役簿録ナリシヲ以テ、七年毎ニ功勞ノ賞トシテ一名ヲ与ル恒例トス、其蔵々ニ差等甲乙アツテ、各局ノ等級ニ因テ命スレハ他ニ讓リ、与フレハ甲乙ニ從ツテ出金スル故ニ、出納ノ間ニ利ヲ得ルヲ士族ノ貧困ヲ補フニ從事シ、更ニ其佗ノ売買ニ関セサル國風ナリシ、サレハ出納ノ利ハ百姓ノ収ヲ重クシ出ルヲ輕クスルヨリ、前ニ云如ク暴斂トナリ、大坂登セ米モ其他藩内ノ扶持皆輕クナリタル原因ナリ、別紙價表ニ照セハ、改革後ハ大坂登米大二価ヲ増シ、江戸純米・各島藩内ノ扶持、亦同シク月給十石与ヘタルハ十一石五斗与ヘタル如クナリタリ、是等ノ弊ノ生シタルモ必竟藩ノ財政至困トナリ、文化中ヨリ胚胎シ、イツトナク百事ニ及ホシ、夫々監督ノ人員モアレ共、後ニハ制スル能ハサルニ立至リ実ニ恐ル可キコト也、數十年ノ弊ヲ矯メ害ヲ除キタルハ実ニ難キコトト云可シ、前ノ蔵役ヲ讓ルハ前年七月ニテ、一年ヲ過キ納リノ耕目減シ大ニ失望スレ共如何トモスル能ハス、秋渡運賃手形ヲ以テ救フノ方ヲ設ケテ悉ク補フ、其方法ハクダクシキ故ニ略ス、

一本藩元和建臺ノ後政治簡樸、吉貴公ニ至ツテ時運ヲ察セラレ百制

度ヲ建ラレタルヲ、享保ノ御規則ト称シ各局皆奉ス、農政亦同シ、改革ノ時都テ其規則ニ從ツテ増益ス、耕作ノ法、古今ノ農書ニ徴シ、土地老農ノ言ヨリ取捨シ、郡奉行・地方檢者・郷役々々督促シ、期日ヲ爽ヘス一步ノ地ト雖モ空シクセス、年寄其下皆村々ニ司ル所アツテ疎ニスルコトアレハ罰ス、事々郷役ヨリ地方檢者ヘ達シ、受持郡奉行ヨリ時口ヲ過サス上申ス、亦堤防・道路修繕ヲ怠サラシム、

一農政改正ノ前ハ、専ラ日州辺ヘ藩内ノ百姓凶歳又ハ宗門嚴禁ニタヘス流民トナリタル多カリシカ、農政緒ニツキタルヲ聞テ帰ルモアリ、招イテ帰ルモアリ、残ラス帰リタリ、

一前ニ云ル七千石ノ予備ハ一石ヲ費サス、租米全納ノ後モ拝借ヲ願フ者モナク、翌年琉球ヘ二階堂右八郎・近藤彦左衛門・坂本休左衛門ヲ為警衛渡サル船ノ下荷トシテ山川ヨリ渡入レタリ、

「〇二三 国家柱石ノ諸家ノ家政ヲ改革・再建セシ事」

先年調所氏ニテ一タノ話ニ今家柄ノ衆所帶方困究ノ家多キ由、何レヨリカ直シタキコトナリ、何ツ方ヨリ手ヲ施ス可キヤト承リ、僕答シニハ、其通り承ルコトナリ、何レモ藩屏・干城ノ方々ナレハ事有ル日ニハ一方ノ任ニ当ラレステ不叶家々ナレハ、御改正アリ度シ、サラハ花岡ヨリ初メラレテハ如何ト申シタレハ、己ハ新城然ル

可シト考フトテ、其夜ハ夫迄ナリキ、三日過テ、所帶直ノ事清熙ノ
申ス如ク花岡宜シカル可シト思フハ、先夜田中四郎兵衛キタルカ、
即今ハ花岡ノ内ヲ聞山ナリ、此事ニ関スルニハ宗之丞カ手ニ付テス
ル一名ナクテハ成マイ、夫ハ新納熊五郎ハ幼年ヨリ能知ルカ、正直
ニシテ周密ノ性ナレハヨカル可ク思フ、田中御馬預ナレハ新納ハ書
役ニテ旁ヨカル可シ、熊五郎ヘ宗之丞ハ知テイルカトノコトナリシ
間、未一面ハセサレ共慥成者ト承ルト答ヘタレハ、明朝其方ヘ遣ス
可シトノ事ニテ、翌早朝来リシニ種々応対試ミタレハ、聞シニ違ハ
サリシ故、其旨ヲ申シタレハ、サラハ此趣キヲ上申スベシトテ、翌
日御聞ニ入り、其通り計フ可シト命セラレ、清熙其旨ヲ花岡ヘ伝ヘ、
田中・新納ト会シテ着手トナリ、都合長ク其年ヨリ納リノ物貴クナ
リ、内ノ用ヲ節シ細大残ラス行届キ、役人上野讓之助良実ノモノニ
テ新納ト心ヲ協セシ故ニ大ニ功ヲ奏ス、清熙ハ多忙ニテ、私宅ヘ
日々新納来ツテ百事ヲ指揮シテ能整ヒタリ、其後一日御趣法方ヘ出
席シタルニ、友野市助外ヨリ入りテ、唯今安芸殿御部屋ヨリ宗之丞
ヘ頼ムコトアリ、同道シテ来リ呉ヨトノコトナリト承リ、則チ参リ
タレハ、安芸殿ヨリ余義ナキ頼ミノ一条ハ、己ノ所帶方世上ニ困窮
ト云フコトアレ共、世ノ常ノ事ニアラス、雨天ニハ廊下ヲ傘ヲサシ、
少キ子共ヲ浜屋敷ヘ遣ルニ駕籠ヘ兩人モ乗セヤル次第ナル故、余ハ
察シ呉可シ、夫故自身ヨリ成丈ケ儉約シ下知スルコトナレ共、力ニ

及ハス、此上ハ兎角ニ御兄様ノ御蔭ナラテハ致シ方ナシ、此趣ヲ宗
之丞ヨリ笑左衛門殿ヘ申シ呉ヨト、御手ヲ席ヘツカセラレ承ハリシ
間、畏リ奉ルト申シ、其日笑左衛門殿ヘ其旨ヲ申シ、御子様ノ私式
ニ恐レ入タリ御所作、御トノ様御存生ニテ入ラセラレハ有マシキ御
儀ト実ハ落涙仕リタリト申セシカハ、成程難渋ノ事ハ聞及ヒタリ、
明日直ニ申シ上可シトノコトニテ、翌日御聞ニ入りタレハ、花岡ノ
手ノ序ニ改正ス可シ、是モ矢張同シ手ニテ宗之丞ト新納ニ申シ付可
シトノ御沙汰ナリシト承リ、問モナク笑左衛門殿ヲ今和泉屋敷ヘ召
シ、宗之丞・新納モ参リ、御附ハ猪俣ナリ、友野ハ兼テ出タル故参
リ、役人ハ矢野権太夫・辺見ハ左衛門ニテ、夫ヨリ新納日々出席、
清熙ハ多忙ニテ稀ニ出タレ共、新納朝夕参リ事々ニ談シ、矢野モ折
々来リ用ヲ節シ費ヲ省キ、安芸殿ニハ毎日其席ヘ御出、大小皆御聞
少モ遺漏ナク行届キ、其年ヨリ菜種・蠟共珍シキ高価ニテ、従前ニ
比スレハ雲泥ノ差ニテ、年末ニ至リ余金ヲ生シ、御邸中浜御邸漸次
ニ修繕、百事皆整ヒ、安芸殿御歎大形ナラス、清熙出レハ御邸中召
列ラレ、カクナリタリ、ケ様ニスヘシト、一々御示シアリタリ、其
頃御軍政更革、弁天波戸ヘ鑄製所ヲ建タルニ、土地狭ク浜邸ノ内借
地ヲ願タレハ、イカ程モ差支ナシト御許容、実ハ居住ノ人モ御移シ
御借地ニ出サレタリ、亦今和泉瀨崎ヨリ指宿宮ヶ浜ヘ往還ノ道ヲカ
ヘラルニモ、城山ノ下ヨリ町ヲ過キテ出地ノ中ヲ通シ、清熙掛ニテ

地方検者山下喜三次・前田新四郎ニテ、通路ノコト少シモ御厭ヒナ
ク開ケタリ、旧道ハ田貫ノ川涯ヨリ坂ヲ登リ、小牧ヘ馬繼所アツテ、
亦坂ヲ下リ、柴立湯ノ辺道悪ク道モ遠カリシニ、瀬崎ヨリ直道トナ
リ、其丈ケ道モ近ク、殊ニ指宿堺ノ辺高岸崩掛ノ所海中ヘ築添ノ評
義モアリタルヲ、今和泉田地等道トナリタル故ニ崩レノ後害モナク、
大ニ便利ニナリタルコトナリ、此御改正ノ始末ハ猪俣又ハ矢野權太
夫・辺見八左衛門存生ナレハ能覚得ノコトナレ共、其時分勤役ノ人
四十年前ノコトナレ共覚得タルモ有可也、

今和泉ノ御家政整ヒタル後序ニ重富モ直ス可シトノ命ニテ、矢張清
熙ト新納ヲ掛ラレ、亦種子・垂水モ同シク新納掛リタリ、其後家格
ノ御軍備手当不相調面々ハ家格ヲ下ケラル可シト被仰渡、一同家政
整ヒタルコトナリ、

新納夫迄ハ草牟田ヘ居住シタレ共、清熙カ宅ノ近所ナラネハ早朝夜
分諸家ノ用ヲ聞ニ不便ナルカ故ニ、春日社下畠山ノ宅ヲ御買入ニナ
リ召移サレタリ、其以来御改正ニ見擬ヒ諸家ニ波及シタルコトナリ、
是初ヨリノ御旨趣ニテ、重富・今和泉・垂水・種子・加治木・都城
等ヲ初メ、国家柱石ノ方々軍備ヲ整ヘラル標準ヲ示サル為ニ御手ヲ
施サレタリシニ、其佗ノ諸家迄一洗トナリタリ、

調
所
広
郷
履
歴

調所広郷履歴

『斉彬公史 本紀嘉永二己酉年』

参考 調所広郷履歴

』

〔一〕 調所広郷事績概略ニ付稲富笑左衛門陳述書

祖父調所笑左衛門広郷奉職中施政向ニ付事跡又ハ古書類差出候様拝承仕候得共、確タル書類モ無之、上申仕程之事跡逐一記臆仕居候人モ無之候得共、二三ヶ条古老ヨリ伝承ノ趣、左ニ陳述仕候、

一文化之頃ヨリ藩中ノ費用連年多ク、国用日二月ニ闕乏、大坂并京地之負債増加シ殆ント五百万両余ニ相及ヒ、藩吏屢方法ヲ設ルト雖モ弁償ノ道立タス、藩主斉興參勤交代之用途モ備ハラサリシ程之事ニテ、君臣拳テ苦痛之折柄、文政之末退隱三位重豪・当主宰相斉興ヨリ祖父広郷ハ財政改革ヲ命シタレトモ、素ヨリ會計之道ヲ知ラス、其任ニ堪ヘ難キヲ以テ再三固辭スト雖モ採用ナク、止ムヲ得ス登坂シテ銀主ヘ來談スレトモ、屢失策之末ナレハ用弁之道一円肯ンセス、然ルニ坂地之商估濱村孫兵衛（大坂商人、以下僉同シ）等二三ノ知己ヲ得、熟談シテ新組銀主（調所カ某主ナリ、濱村カ策

ヲ以テ新二銀主ヲ設ク、是ヨリ新古銀主ノ名アリ）ヲ設立スルノ策ヲ立、第一南島生産之砂糖ヲ資本ニシテ其他ノ物産ヲ精良ニシ国用ヲ支弁スルノ方法ヲ立、其処置嚴密ニシテ十四五ヶ年間ニ別紙扣留之通積金ヲ成セリ、

一城下甲突川ハ往古ヨリ霖雨之節洪水満漲シテ人民之困苦見ルニ忍ヒス、夫レカ為メ木橋モ毀損スル事有テ通行之便ヲ失ヒシニヨリ、浚方ニ着手シ、石橋（太鼓橋・眼鏡橋ノ初トス）ヲ架替シテ、竣工之後洪水之患無ク、且右土砂ヲ以テ川尻ヘ數町ノ練兵場ヲ新築セリ（天保山トモ唱フ、後ニハ訓練場ト單唱ス）、

一曾木川ハ全体岩脚盤石ヲ疊ミ水脈屈曲不便之場所ナレトモ、浚方ニ着手シテ通船之便ヲ開キ、竣工之後菱刈地方并米穀運搬其他ノ便利トナレリ、

一小林川ハ従前材木ヲ下スノ水路モ無ク不便ノ場所ナレトモ、是ニモ着手シテ其道ヲ開ケリ、

一藩主斉興国内兩度之巡見ニ付諸所道路之嶮難ヲ修理シテ人民ノ便利トナレリ、

一^⑤国府・出水兩郷ハ海辺全体干渴ニシテ新田ヲ築クニ便利之場所ナレハ、後年ノ洪益ヲ計リ國家ノ為メニ數拾町之新田ヲ開キ築セリ、一各郷農政之事ハ、享保之規則ニ基キ上見部下リノ習弊ヲ改良シ、受持郡奉行・地方檢者・郷役々・名主等ニ至ル迄懇篤規則ヲ教示

シ、民間ニ督促シテ良法ヲ遵守セシメシヨリ、爾來租税不納之農民ナク、庫藏充實シテ数万石之貯蓄アルニ至ル、又各郷ニ穀倉ヲ建築シテ凶荒之予備トナセリ、

一兵備ハ、古來ヨリ異國方ト唱ヘ、甲州流之兵法ニ倣ヒ五段備ヘノ軍制ヲ奉セシカトモ、即今ノ世態ニ適シ難キヲ看破シ、挙國一般西洋ノ銃隊ニ基キ軍律ヲ改良シ、大砲・小銃数万挺（方ハ多ニ過ク、千ヲ可トス）ヲ製造シ、火藥彈ヲ兵庫ニ充實シ、海岸要衝ノ地ハ巨額ノ費用ヲ厭ハス都テ砲台ヲ築キ、百二十余郷ニ至ル迄兵隊ヲ編成シ、領内何方ニテモ非常之節兵隊ニ応シ大砲・小銃ヲ繰出スノ規則ヨリ兵隊彈藥之運搬・人夫ノ手當ヲ定メシナリ、

一前之浜・指宿・山川・久志・坊泊・加世田・川内・阿久根・出水・波見・柏原・日州赤江等ヘ大船二十三反帆之船ヲ頭トシテ五反帆等之中船多艘新作シ、平常南諸島之砂糖運輸之為メニ便用シテ、非常之節ハ該船ヲ以テ糧米・彈藥等運搬ノ為メニ備置ケリ、

一弘化之初年頃旧主領内琉球國ヘ仏人來着、通商ト教宗之事件ヲ主張シタレトモ、右年間頃迄ハ開港ナトノ世態ニアラス、旧幕府ヨリ日本ノ國威ヲ海外ニ輝カシ、固有之武威ヲ示シテ寛猛之處分ヲ以テ接待スヘキノ命令嚴ナレトモ、素ヨリ戦具ノ備ハルヘキ孤島ニモアラス、又藩中之壯士輩ハ攘夷之説百出紛々タリト雖モ、一度戦端ヲ開クトキハ我國難ノミナラス 皇國之大困難ヲ彼地ニ於

テ醸出スノ訳ニシテ、幾重ニモ穩和之處分ニアラサレハ永年維持之道ナキヲ以テ渡海ノ將士ヘモ説諭シ、苦心憂慮スルコト數年間、死スルノ近キニ至テ終ニ滞留之仏人一時帰國シテ平和之局ヲ結ベリ、

右ケ条外ニ銃山・葉園方改革、諸所鑛山・谷山郷鈴山・大根占郷柞灰山・豎野并ニ苗代川焼物所改革・藍玉方・阿織屋等多端着手之由ニハ候得共、施行之事跡口唇ニ不殘伝失候ニ付、略文仕候、

鹿児島縣薩摩國鹿児島郡

鹿児島下伊敷村百八十番戸

士族

明治十五年午十二月

稻富笑左衛門

「〇二 島津重豪覺」

覺

一金五拾万両

右卯年ヨリ來ル子年迄相備候事、

一金納（一名御手伝金トモ唱フ）并非常手當（軍用金）別段有之度事、

古傳証文取返シ候事（大坂・江戸及ヒ鹿児島等、右新負債）、

右二ケ条之趣申付候事、

「〇三 島津重豪朱印書写」

写

年来改革幾度モ申付置候得共、其詮無之候処、此度趣意通行届満
足之至ニ候、就而ハ何レ万古不易之備無之候テハ実ニ改革トハ難
申、仍テ来卯年ヨリ来ル子年迄十ヶ年之間格別令精勤、申付置候
三ヶ条之極内用向濱村孫兵衛ヘモ申談、右年限中可致成就事、右
大業申付候上ハ、為筋ノ儀ハ勿論何篇不差置家老中ヘ申聞、時々
無滞其方存慮通取計可致、尤大坂表之儀ハ往返致候テハ及延引候
ニ付、取計置追而可申出候、此旨豊後守（齊興公）ヘモ申談急度
申付候条、異議有之間敷、仍テ如件、

天保元年

寅十二月

朱印

翁

調所笑左衛門江

「〇四 調所広郷受証写」

写

金五拾万両

右来卯年ヨリ来ル子年迄十ヶ年ニ御積金相備候様可仕候事、

但年之豊凶ニ依テハ年々御積金多少ハ可有御座候得共、十ヶ年

目ニハ都合可仕候、

一御金納（一名御子伝金トモ唱フ）并非常御手当（軍用金）モ成丈ケ右外

ニテ練合候様可仕候事、

一古借証文之儀ハ追テ取返候様手段可仕候事、

但銀主共存慮ニ寄忒対出来兼候分ハ不及是非、併夫々渡方相整
御差支無之様取計候ハ、取返候モ同様之儀ト奉存候、

右ハ年来御改革幾度モ被仰出候得共其詮無之候処、此度御趣意相
貫別テ御満足ニ被思召上候、就而ハ万古不易之御備不相建候テハ
実ニ御改革トハ難被思召上、仍テ来卯年ヨリ来ル子年迄十ヶ年之
間格別精勤仕、厚思召之御趣意奉汲受御請仕候様、右ニ付テハ御
為筋之儀ハ勿論、何篇不差置御家老中ヘ申聞、時々無滞私存慮通
取計候様、且又大坂表之儀ハ及往返候而ハ御間後相成候ニ付、諸
事取計置追テ申出候様承知仕、寔ニ大切成取扱向、殊ニ大造成御
備金旁容易御請難仕儀御座候得共、不輕御朱印ヲ以テ私式ヘ格別
之極密御内用向被為御仰付候儀、何共冥加至極身ニ余難有仕合奉
存候、依之濱村孫兵衛江モ申談、昼夜差ハマリ急度思召通御積金
等相備候様可仕候、

但右大業被仰付候付テハ、以来年分之御入価相増不申様、猶是

迄追々被仰出置候御減少筋ハ不及申、御産物御練登品等連々相
増候様、諸向一統掛心頭取扱可致旨、分而被仰渡度奉存候、

右者思召ヲ以テ被為仰付、格別成極密御内用之御趣意汲受奉畏候、

仍御受証如件、

天保元年寅十二月

調所笑左衛門

広郷印判

〔〇五 島津斉興朱印書写〕

写

一 去子年以来改革之趣法治定不相崩候様心掛之事、

一 産物之儀、時節不違様繰登方治定通可致事、

一 砂糖惣買入（官売買）之儀ハ、永年相続之儀治定堅固ニ候事、

右是迄之通猶亦当節分而規定相立候、齊宣江モ屹度申付置、聊違

背無之堅固ニ同意候条無疑念相心得出精可致、此趣濱村孫兵衛ハ

モ別段申達候間、猶江戸・大坂・国許役々江モ可申付置候、依テ

如件、

天保四癸巳年三月

興齊 朱印

調所笑左衛門江

〔〇六 島津斉興朱印書写〕

写

一 重豪君年来国家第一二候所帶方之儀ニ付深御配慮被成候得共、汲

受薄モノ共ニテ思召通難被行候処、去子年以来拙者ハ分ケテ被仰
談候趣ヲ以テ、分厘之緩ルミ無之様改革之道筋ヲ取守、当春迄モ
申談之上ニテ取計候処、無敢御遠行ニ付而ハ、此上之儀拙者一人
ニ候得ハ、猶以テ万代不朽之地基ヲ居、国家安全・万民快樂ニ至
候事ハ愈堅固ニ規定取守候事ニ候、右ニ付テハ其方ハ勿論、濱
村孫兵衛事差ハマリ、別紙ニモ申候通備金年限内ニ約定半方相満
候程之出精相見得候事作ラ、此末之処重豪公被為在候節之通、政
路不易之段少モ疑念無之一人可為精勤候、仍テ尚申聞候条如件、

天保四癸巳年三月

興齊 朱印

調所笑左衛門江

〔〇七 調所広郷履歴・業績〕

調所笑左衛門広郷事、本川崎良八ト称ス、安永五丙申二月五日

生、父川崎主右衛門次男、母ハ竹内与右衛門カ娘、天明八年戊申

調所清悦養子ト成テ調所友治ト改名ス、養母ハ月野某娘、

寛政二庚戌、表坊主被仰付、清悦ト改名、年拾五歳、

寛政十戊午正月十七日、中急ニテ被差立、同二月十日、江戸芝御

屋敷へ着相勤候、同九月十日、御隠居（重豪公）御附奥御茶道、

御役料米三拾俵、右之通御役被仰付、同廿七日、笑悦ト改名致シ、

年式拾三歳、

調所笑左衛門

一文化八年辛未正月十五日、御茶道頭、御役料米五拾俵、御役料銀

三枚三拾式匁、右之通御役替被仰付候、年三拾六歳、

一文化十年癸酉七月廿一日、御小納戸、被下方御法之通、右之通被

仰付候、同日笑左衛門卜改名、年三拾八歳、

一文化十二年乙亥七月廿一日、御小納戸頭取御用取次見習、被下方

御法之通、御小納戸兼務右之通被仰付候、年四拾歳、

一文化十五年戊寅正月、御使番、被下方御法之通、右之通被仰付候、

年四拾三歳、

一太平布 二疋

調所笑左衛門

一文政五年頃、町奉行、御役料御法之通、右之通御役替被仰付候、

年四拾七歳、

一文政中、小林地頭職被仰付候事、

一文政七年甲申十一月一日、御側御用人格、両御隠居様近衛公 齊宣公御統

料掛、右之通御役替被仰付候、

一文政八年己酉八月廿七日、御側御用人・御側役勤、右之通御役替

被仰付候、

一文政中、佐多地頭職繰替被仰付候事、

一御銀五拾枚

調所笑左衛門

右者此節大坂表御趣法替二付、初発ヨリ彼は骨折相勤万端御都合

取計候、為御褒美右之通拝領被仰付候、

右御格之通可申渡候、

文政十一年子三月

鳥津但馬鳥津 久風

一往定府被仰付候条可申渡候、

猪飼 央

一文政十一年戊子六月廿日、高五拾石、

右ハ御内用向之儀ニ付江戸・大阪へ被差越、御趣意通程能取計、格別骨折相勤候付、為御褒美拝領被仰付候条、可申渡旨被仰出候、

一文政十二年己丑五月、高百石、

右者此節大坂表御趣法替一件抜群骨入ニ付、思召ヲ以テ右之通拝領被仰付候、

一文政十二年己丑十二月三日、鹿屋地頭職被仰付候、

一天保二年辛卯十二月、大番頭、御役料高百八拾石、勤方は迄之通、右ハ格別致精勤御用立候付、思召ヲ以テ右之通御役替被仰付、年五拾六歳、

一天保二年辛卯十二月、高三百五拾石、銀拾九貫目

右者は迄多年御改革御趣法替之儀及度々被仰出候得共、思召通不行届連々御所帯方御難渋成立候付、去々子年取扱向分テ被仰出、度々致出坂御銀繰万端引受取計、御内用方一件之儀逆毛至極之御都合ニ相成、就中惣御買入方（官免ノ通唱）之儀者別而骨折御趣意通行届候様成立、旁以テ御高本行之通永々拝領被仰付候、且御合力高所務代銀之儀者不及引方ニ右之通被下置候、

一天保三年壬辰、御役料高三百石、三拾人賄料

右者は迄御所帯方御難渋之儀ニテ、先年米ヨリ追々御取縮向被仰渡候得共、去ル寅年御類焼引続御金納旁々ニ付、大坂表御金繰不行届必至之御難渋到来ニ付、太守様（齊興公）・大御隠居様（重豪公）

厚以思召御改革被仰出候處、度々出府者勿論、致上坂新組御銀主共示談等十分ニ相調、追々御改革之御規定モ相立至極之御都合相成、寔ニ不容易儀ヲ取扱抜群骨折致精勤、一段之儀被「思」召上候、依之格別之御取訳ヲ以テ、当御役ニテ当分被下置候御役料高二百貳拾石被下、都合右之通被下置候、左候而御合力所務代銀被下置候儀者追テ可申渡候、

右厚以思召三拾人賄料被成下、江戸并御同許ニテモ大坂等ヨリ之入組モ有之、外見ニモ相拘ハリ候ニ付、供列等之儀モ相応被仰付置候間、諸向下座各番所番人等之儀下座式礼等之儀、以来大目附同様相心得候様被仰出候、同年五月、

一天保三年壬辰二月、大目附格、勤方は迄之通、被下方惣テ是迄之通、年五拾七歳、

右之通御役「替」被仰付候、左候テ江戸・御国許共是迄之通御用部屋御趣法方御用專取扱、右御用透ニハ御家老座一間之内へ相詰居、表并御勝手方御家老御用モ承候様被仰付候、

右者御所帯方連年御難渋成立、其上近年難被捨置御入恤追湊ヒ、三都之御借財莫大ニテ、御産物大坂へ被繰登候テモ其詮薄、依而公辺御勤向モ難被整、誠ニ危急存亡之御時節御到来ニ付、

太守様（齊興公）・三位様（重豪公）深御配慮被遊厚思召ヲ以テ御改革被仰出、御国元・大坂等へ年々被差遣候處、御趣意通拍誠忠極

々之御都合ニ相向キ御満悦被思召上候、尤此節之御趣意至後年候而モ万一最通兼候時ハ、又候以前二倍シ御難渋弥増、御勤向ハ勿論御国中御扶助モ難被為整、其期ニ至リ如何様之御趣法取企候共其詮無之、昼夜此事而已

三位様類ニ御配慮被遊候、就テハ御老年ニ被為在候得共、今一度御国許へ御下向被遊、右等之御趣意巨細ニ御家老中へモ御直ニ被仰達、且大坂表御金繰之儀モ篤ト御指揮被成置度被思召上候得共、遠路之御旅行兼テ御台様（広大院殿）ヨリ堅御差留之御事、其上御老年ニ被為及、洵モ御旅行不被為整候故、深御勘考之上笑左衛門へ三位様御眼代被仰付候「間」、国許其外共諸事承届可致言上候、左候而此度之御趣意万代不朽有之候様屹度取扱可致候、勿論御趣意汲受薄者モ有之候ハ、不差置其段早速申上候様、訳而被仰付候、

右之通被仰付候旨、太守様（音與候）・三位様（重兼公）被仰出候付、去ル廿五日御格之通申渡候、

一同十月、四拾人賄料、

右者是迄三拾人賄料被下候処、御趣法方御用專取扱、表并御勝手方御家老方御用モ承候様被仰付置、度々京・大坂へ差越候付而ハ、右通之被下方ニ而者及難渋候段被聞召通候、依之思召ヲ以テ右之通被下置候、

「一」天保三壬辰十一月十二日、御家老格御側詰勤、御役料高千石、御合力高・所務代銀是迄之通、年五拾七歳、

右之通被仰付、御役料高被下置候、

右同日、右御家老格御側詰勤被仰付候付而ハ、公辺他所相掛候儀者御家老ト相唱、御前御用之儀ハ勿論御家老座へモ相詰、御家老方御用之儀何篇御家老同様名前ヲ以テ取扱、表・御勝手方御用ヲモ相勤、其外被掛置候儀共都テ是迄之通被仰付候事、

一天保四年癸巳三月、高五百石、

右者御改革一件初発ヨリ致取扱候処、追々其詮相見得、至此節拔群之功業故、御褒美被思召上候、依之右之通「拝領」被仰付候条、猶又出精相勤候様被仰付候、

一天保四年頃、御家老加判、同役同前御側詰兼務、御役料高千石、六拾人賄料、年五拾八歳、

右之通被仰付候、

一天保七丙申、御高五百石、

右之通拝領被仰付候事、

右者去ル亥年御趣法替被仰出、初発ヨリ右御内用引受取扱、御国許其外諸所江相掛拔群之骨折致精勤、是迄御褒美等モ被仰付置、御趣意通追々御改革之詮相立御満足被思召「上」、今般別段厚御内慮之趣被為在、右之通当三月廿五日於江戸拝領被仰付候条、

全可有所領候、仍如件、
(務力)

一弘化二乙巳、御高五百石、

右ハ御所帶方連年御難渋被為及、殊御借財年々致増長、既 公辺御勤向等モ難被為調程ニ相成候付、無御拋 故三位様江御相談被仰上、文政十一年子年ヨリ御改革之御趣法被相立、「右」御内用取扱初癸ヨリ被仰付、江戸・京・大坂其外江モ繁々被差出候処、

必至ニ差ハマリ昼夜掛心頭格別骨折致精勤候故、万端行届、殊ニ不容易極々御内用取扱被仰付置候処、御趣意通全ク相備リ、別而御仕合思召候、且又諸郷勸農一件ハ分テ被仰付置「候処」、是又御趣意深汲請致指揮候故、勞郷モ漸々榮立、今般 御巡見之郷々耕作等行届、且難場之川普請迄モ成就、運送等二付而ハ勞百姓共至極救助筋相成、一統進ミ立窮民開眉之時宜ニ成立、別而

御満足 思召候、畢竟御趣意厚汲受諸差凶行届候故ト被 思召上、先年 故三位様被仰談候 御趣意相貫キ、旁

御満悦 思召候、依之拔群之勤功難被捨置候ニ付、別段厚 思召ヲ以テ、為御褒美右之通知行拜領被 仰付候、

四月

猪飼 央

年号不相知、

銀五百枚

右者於長崎表唐物御商法之儀、公辺御差支之廉有之差留被置候得

共、琉球之儀全ク和漢通商ヲ以テ立行来候国柄之故、品々無御拋被仰立之趣相貫キ、此節不容易御儀ニハ候得共、別段之御取訊ヲ以テ都テ以前之通被成御免候段被仰渡、就而ハ御再願御發起ヨリ御内意向ハ勿論、昼夜心頭ニ掛ケ拔群骨折御都合相成候付、別段之思召ヲ以テ、為御褒美右之通御内々ヨリ拜領被 仰付候、

八月

島津豊後久宝

年号不相知、

一御高七百石

右之通御加増被仰付、

但事書不相知、

調所笑左衛門エ

右者文政子年頃ニ至而ハ所帶方極々差迫、公務者勿論家中扶助モ不行届必至之難渋ニ成立、日用之宛行亦ハ參勤下国之節出立差掛候迄モ路用調兼候、世上ヘ対シ面皮モ無之時宜ニ付、無拋 故三位様ヘ御相談之上、改革取扱專其方一人ヘ任セ申付候処、三都之

用都其外無滯相弁候儀全ク其方精勤之訳ニ候、然処其後吉凶之臨(途)

時費用并兩度之献金等太糲之金高ニ為相及事候得共、最早式拾余年ニモ相成未改革成就ニ不至、今通ニテハ際限之廉不相見得甚心痛之事ニ候、殊ニ其方事初癸ヨリノ趣意相貫取扱治定不致置候テ

ハ、白ラ不連続之向ニモ可成立之処、追々老年ニモ相成旁以難差

延事二候、然者来未年ヨリ酉年迄三ヶ年改革高之儀又候申付候、就而者此節ハ年限中猶亦必至ト差ハマリ昼夜相勵、屹度万端致全備、至後年規定不亂様可取計候、右付而者向々へ掛置候役々、人柄第一之事二候条、「各」改革中者都而具方エ吟味申付候、其外三都ハ勿論時宜次第長崎等エモ差越、国許勸農方並節儉取締・風俗改正・海岸妨禦于当迄モ掛リ申付候間、弥拙忠勤年限中ニハ屹度改革致成就、申付置趣意相貫キ候様可取計事、

(年月日脱ス、糺スベシ)

「〇ハ 改革前後ノ大坂仕登砂糖ト年次別斤当り値段並ニ利益額」

文政二年卯年

一 砂糖壹斤 代銀七分四厘六毛壹七三

同 三辰年

一 同 壹斤 同 五分四厘〇六六九五

同 四巳年

一 同 壹斤 同 五分四厘壹毛九三八

同 五午年

一 同 壹斤 同 七分貳厘壹毛壹壹八

同 六未年

一 同 壹斤 同 八分六厘八毛壹四八式

同 七申年

一 同 壹斤 同 七分五厘〇八四三五

同 八酉年

一 同 壹斤 同 七分七厘三毛壹壹八

同 九戌年

一 同 壹斤 同 七分壹厘五毛三八七七

同 十亥年

一 同 壹斤 同 六分九厘三毛五五

同 十一子年

一 同 壹斤 同 六分三厘貳毛六六四六

同 十二丑年

一 同 壹斤 同 五分貳厘九毛八七〇五五

以上、御改革以前十一ヶ年平均約一ヶ年六分八厘

天保元寅年

一 砂糖壹斤 代銀七分〇九八三六

同 貳卯年

一 同 壹斤 同 八分八厘貳毛六九四

同 三辰年

一 同 壹斤 同 壹匁一分貳毛六七八

同 四巳年

金ニシテ百二十六万六千両

—62—

成申候、然処近年者諸国和製

近年大寺及江紀州・駿州・遠州辺、或ハ土類等ニ出産、年々許可ニナレリ、砂糖殖

へ立、殊ニ昨年者国々別而豊作ニ而、旧冬ヨリ直段礮ト下落致、当

分ニ至リ猶以テ直下之方ニ罷成、甚心痛仕罷在候儀ニ御座候、当分

之通諸国甘蔗作方繁茂致候得者、是迄之直成ニ引立候処六ヶ敷被在、

左候得者第一之御産物見込違ニ罷成、大阪表御斤繰別而難渋仕事御

座候、依之昨年迄十ヶ年之廻シ直成并ニ当分之相場拾ヶ年并シニ見

積リ申候処、左之通御座候、

拾ヶ年分

一砂糖壹億貳千万斤

代銀八万四千貫目

但壹斤ニ付七分ツ、当分之相場ニ仕ル、

張紙本文

金ニシテ百四拾万両

一 同壹億貳千万斤

代銀拾四万千貫目

但壹斤ニ付壹匁壹分七厘五毛、昨亥年ヨリ以前拾ヶ年并シ

直成、

張紙本文

金ニシテ貳百三十六万両

差引

銀五万千貫目

金ニシテ九拾五万両

但以来之引入

「〇九 改革前後ノ大坂仕登米ト年次別総額並ニ石当り値段」

文政元寅年

一米壹万八千六百五拾石

但石ニ付四拾三匁四分三厘五毛

同 二卯年

一同壹万九千九百拾石

但石ニ付三拾四匁七厘八毛

同 三辰年

一同貳万三千百五拾石

但石ニ付四拾匁五分貳毛

同 四巳年

一同貳万貳千三百五拾石

但石ニ付四拾九匁九分壹厘九毛

同 五午年

一同貳万三千七百八十八石

但石ニ付四拾九匁八分貳毛

同 六未年

一同壹万六千四百十三石

但石二付五拾六匁四分壹厘貳毛

同 七申年

一同壹万五千五百石

但石二付五拾貳匁三厘壹毛

同 八酉年

一同壹万三千八百二十七石

但石二付六拾六匁九毛

同 九戌年

一同壹万貳千八百四十石

但石二付五拾匁五分九厘壹毛

同 十亥年

一同壹万五千九百拾石

但石二付四拾九匁三分貳厘貳毛

同 十一子年

一同壹万三千七百五十七石

但石二付七拾八匁八厘八毛

同 十二丑年

一同壹万四千四百拾石

六拾三匁五分六厘三毛

以上、拾貳ヶ年平均壹ヶ年壹万七千貳百拾壹石貳斗五升

代銀石二付五拾貳匁八分壹厘貳毛

天保元寅年

一米壹万五千五百拾石

但石二付七拾六匁四分七厘三毛

同 二卯年

一同八千五百三拾四石四斗

但石二付七拾匁壹分八厘七毛

同 四巳年

一同七千五百八拾四石

但石二付百拾貳匁三分三厘七毛

同 五午年

一同壹万貳千三百貳拾八石三斗貳升

但石二付七拾四匁六分六厘貳毛

同 六未年

一同壹万五千七百貳拾五石

但石二付九拾九匁六厘七毛

同 七申年

一同壹万貳千六百六拾三石貳斗

但石二付百五拾三匁六分三厘貳毛

同 八酉年

同 同壹万六千七百貳拾六石

但石二付百壹拾壹匁八厘

同 九戌年

同 同壹万貳千六百七拾貳石

但石二付百拾壹匁五分貳厘五毛

同 十亥年

同 同壹万五千石

但石二付七拾貳匁

以上、拾年平均壹ヶ年壹万貳千五百貳拾四石壹斗三升貳合

代銀石二付九拾六匁三分八厘三毛廻

右者大坂表御仕登米之儀、全体綿密之御規定者有之候得共、段々不行届罷成、御改革以前二相成候処、入実ハ壹俵二付三斗四升程^{〔宛〕}モ有之、右二準シ俵作等別而匁末ニ成立、船中取納場之洩米等過分ニ有之、大坂水揚場ニテ散米需取候者共之家部売買數十金ニモ相及ヒ候程之儀ニ成立、殊ニ米拵「等」モ不宜候ニ付、其時分ハ薩摩米ト申候得者米屋共望ミ不申振合故、直段モ格別下落仕候処、御改革ニ付以前之御規定ヲ本ト致シ猶不引足儀者増補仕候テ、米拵・取納拵目・俵作等迄綿密取調、何扁肥後米ヲ手本ニ致シ、大

坂ヨリ唐箕買下、亦者俵占道具等作調、連年手堅申渡候処追々行

届、当分ニ至リ候処、米性ハ致方モ無御座候得共、拵方・俵作・

入実ニ付而ハ諸国出產ヨリ上ニ罷成、大坂堂島ニ而モ評判立直リ

候、折柄去春御払口之儀相改候訳モ御座候故、一涯米問屋共氣請

宜敷罷成、御払口相進ミ至極之御都合罷成申候、

拾ヶ年御仕登高

一米拾三万石

代銀三千六百貫目

石二付貳拾目増

金ニシテ六万両

張紙

御改革以前御仕登米

一壹俵

升目三斗四升

御改革後

一壹俵

升目三斗九升

差引、壹俵二付五升増

御改革後拾ヶ年分御仕登セ高拾三万石ニ而米壹万九千五百石増

右者御改革以前米拵亦者入実等、相増直進ニ罷成候、御益右之通^{〔以後〕}

御座候、尤平均直成ヲ以テ差引候得者、右銀高ヨリモ格別相増候
得共、去ル巳年以來凶作ニ付例外高直ニ罷成申候故相除申候、

〔〇一〇 改革前後ノ大坂仕登生蠟ト年次別総額並ニ斤当り値段〕

文政二卯年

一生蠟五拾七万五千三百貳拾壹斤

但壹斤ニ付九分六厘五毛五四貳

同 三辰年

一同四拾六万九千五百四拾三斤

但壹斤ニ付七分壹厘八毛三貳〇五

同 四巳年

一同貳拾壹万五千百三拾九斤

但壹斤ニ付九分三厘六毛壹〇貳貳

同 五午年

一同三拾七万貳千四百拾三斤

但壹斤ニ付壹匁壹分六毛五五八

同 六未年

一同八万七千三百五拾八万

但壹斤ニ付壹匁三厘三毛六貳壹

同 七申年

一同三拾八万六千九拾貳斤

但壹斤ニ付九分貳厘貳毛六〇壹九

同 八酉年

一同貳拾三万八千五百貳拾斤

但壹斤ニ付七分九厘壹毛六八壹壹

同 九戌年

一同貳拾六万七千四百壹斤

但壹斤ニ付八分九厘〇八貳九

同 十亥年

一同貳拾六万七千七百九拾八斤

但壹斤ニ付壹匁八厘貳毛三七五

同 十一子年

一同貳拾四万四千拾七斤

但壹斤ニ付壹匁壹分四厘貳毛壹〇六

同 十二丑年

一同貳拾四万七千七拾四斤

但壹斤ニ付壹匁四分八厘貳毛

以上、拾一ヶ年平均一ヶ年三拾万五千三百三拾四斤

壹斤ニ付代銀壹匁壹分七毛廻リ

天保元寅年

一 同牛蠟拾六万六千六百貳拾壹斤

但壹斤二付壹匁六分三厘〇六貳

同 二卯年

一 同貳拾七万九千六百九拾壹斤

但壹斤二付壹匁六分三厘五毛壹貳

同 三辰年

一 同拾七万五百五拾斤

但壹斤二付壹匁七分四厘六毛〇九六

同 四巳年

一 同三拾七万四千四百四拾貳斤

但壹斤二付壹匁七分九厘七毛〇四七

同 五午年

一 同貳拾貳万四千四百五拾四斤

但壹斤二付壹匁八分七厘壹毛七五三

同 六未年

一 同三拾三万五百三拾七斤

但壹斤二付壹匁九分貳厘三毛三壹四

同 七申年

一 同三拾六万三千五百六拾三斤

但壹斤二付壹匁七分六厘六毛〇九六

外二野田蠟壹万四百八拾貳斤野田郷は蠟木多シ、故ニ通町トナレリ、

但壹斤二付壹匁九分七厘壹毛〇四三

同 八酉年

一 同拾五万五千百七拾壹斤

但壹斤二付壹匁八分八厘壹毛壹四貳

外二皿居蠟貳万五千九百七斤

但壹斤二付壹匁九分六厘八毛三貳九

野田蠟壹万六百斤

但壹斤二付壹匁九分三厘九毛三五八

同 九戌年

一 同拾三万四千五百四十六斤

但壹斤二付貳匁三分貳厘五毛四〇八

同 十亥年

一 同拾壹万七千四百拾四斤

但壹斤二付三匁五分七厘四毛

外二皿居蠟壹万千六百斤

但壹斤二付四匁五分貳厘九毛

同 十一子年

一 同貳拾三万八千四百八拾六斤

但壹斤二付二匁二分八厘四毛〇五貳

外二皿居蠟貳万五千七百五拾八斤

但壹斤二付三匁五分壹毛五九

以上、十一ヶ年平均一ヶ年貳拾二万九千七百拾壹斤

壹斤二付貳匁壹分三厘九毛廻シ

右者御改革以前者生蠟位格別下品ニ有之候処、段々手厚取扱申渡、且亦大坂蠟屋共儀掛占旁殊之外自俣成仕来之者ニ而、斤目欠過分ニ有之事御座候得共、何分外場所へ振向候儀モ調兼候付、精々俵作・斤目等入念積登セ、蠟屋へ掛渡候節度々出役致、嚴重之振合ヲ見セ申候処、近來者蠟屋共自然ト自俣之計ヒモ薄ク罷成、直段モ格別開ケ立申候、乍然一体之相場、諸国共ニ朽実不熟ニ而高直ニ罷成爲申儀御座候間、直増之銀高者不申上候、

「〇一一 改革前後ノ大坂仕登菜種子ト年次別總額並ニ石当リ値段」

一文政三辰年ヨリ同十二丑年迄拾ヶ年并壹ヶ年分

一菜種子三千貳百七拾五石六斗貳升四合

但百枹壹石二付六拾壹匁貳分八厘廻リ

右御改革以前

天保元寅年

一菜種子四千百五拾貳石九斗壹升九合

百枹壹石二付五拾七匁六分三厘貳毛

同 貳卯年

一同三千七百貳拾六石四斗

但百枹壹石二付六拾六匁壹分九厘九毛

右ニヶ年御改革被相初候時分ニ御座候得共、菜種子之儀者未以手付不申候故相除申候、

同 三辰年

一同四千石

但壹石二付七拾七匁三分四厘

同 四巳年

一同四千石六斗四升

但壹石二付九拾貳匁六分九厘四毛

同 五午年

一同四千石

但壹石二付百貳匁壹分八厘壹毛

同 六未年

一同四千石

但壹石二付百匁八分四厘五毛

同 七申年

一同四千石

但壹石二付百拾壹匁五分八厘貳毛

同 八酉年

一同四千石

但壹石二付百八匁九分五毛

同 九戌年

一同四千貳拾壹石四斗四升

但壹石二付九拾六匁壹分八厘四毛

同 十亥年

一同四千石

但壹石二付九拾四匁壹分五厘

以上、八ヶ年平均壹ヶ年四千石七斗六升、壹石二付九拾七匁

九分八厘六毛

右者菜種子之儀、以前者壹俵之人実乍漸三斗貳三升程モ有之、其上土砂交リ下品之菜種子勝チニ而、直段格別下落致シ居候処、御改革ニ付、取納仕向ハ勿論捨ヘ方等至極念入、俵作之儀ハ全体吹入ニ御座候処、是亦小キ品柄故洩レ捨リ過分ニ有之候ニ付、紙袋ニ入付其上ヲ俵入レニ仕調ヘ差登セ申候処、全ク散リ捨リ無之、入実十分ニ而位モ格別宜敷御座候間、直段モ別而相進ミ、当分諸国仕登菜種子之内第一之高直ニ御座候間、御利益張紙之通ニ相及ヒ申候、

張紙

一御改革以前升目

三斗貳三升

一菜種子壹俵

去ル申年ヨリ酉年迄

一同 壹俵 三斗七升

戌年ヨリ亥年迄

一同 壹俵 三斗八升

右之通御仕向行届粉目相増申候、

去ル辰年ヨリ亥年迄八ヶ年御仕登高

菜種子三万貳千石

代銀七百三拾六貫目

但御改革ニ付御仕向行届候分ニテ、壹石二付貳拾三匁増之

見賦

金ニシテ壹万貳千貳百六拾六両

「〇一二 改革前後ノ大坂仕登琉球鬱金ノ事」

一琉球鬱金之儀者、余国ニ類品モ無之一種ニテ格別ナル御産物之事ニ御座候処、先年来度々御仕向モ被相替候得共、其詮モ無之、右者畢竟拔荷過分ニ有之、上方表直段下落仕居候訳ニ御座候付、御改革以來沖永良部島并三島其外島々地方之出産モ無殘掘捨、琉球

ニ限り地面相究植付方申渡、猶又製法方之儀モ入念為取計、左候
テ拔荷取締向之儀、朱粉同様嚴重ニ取計、於京・大坂モ段々抜口
取締候処、追々直成開立、猶去ル申年京・大坂御私口之儀共相改、
壹斤五匁ニ直成相立、夫ヨリ当分迄押通御売捌相成来候処、一昨
年頃ヨリ抜口全ク差塞リ、勿論京・大坂商人共貯へ置候品モ私底
ニ及ヒ捌高格別相増、被開置候數万斤「之屯」モ無多事罷成申候
間、旧冬琉球へ作増之儀迄モ申越候時宜ニ成立、以來八年々三万
斤宛差登候仕向ニ治定仕置候、然ハ御改革以後御私之銀高、左之
通、

一鬱金壹万斤

代銀百貫目

但壹斤ニ付拾匁并

一同 九万斤

代銀千三百五拾貫目

但壹斤ニ付拾五匁ツ、

合銀千四百五拾貫目

但壹斤ニ付拾五匁ツ、

金ニシテ七千五百兩

「張紙

鬱金三万斤

代銀四百五拾貫目

但壹斤ニ付拾五匁宛

金ニシテ七千五百兩 「」

右者以來年々御私高、右之通治定仕置申候、

「〇一三 琉球朱粉ノ事」

一琉球口朱粉之儀若至極之上品ニテ、先年来御私向之儀モ御治定相
成居候得共、何分荷細之品ニ御座候得者、拔荷「御取締別而届兼
候付、御改革以來精々綿密之」取締申渡、琉球登船山川エ入津之
上者鎖細ニ改方致シ、猶隱密之手筋迄モ相用ヒ、於江戸・京・大
坂モ様々聞合取締向之儀連々申渡候処、乍漸抜口相止ミ、去ル戌
年ヨリ江戸朱座申請開ケ立、同年八百三拾包、亥年三千七百五拾
包、当年是迄三千七百七拾包相渡、大坂ニ而モ右ニ準シ捌立、且江
戸・大坂両朱座滞納銀モ式拾貫目余ニ相及居申候処、是以両所乍
ラ当年中ニハ皆納之賦ニ御座候、然者右御私銀高、凡之賦左之通、
江戸・大坂御私

朱粉壹万包 斤ニ付五千八百拾貳斤半

代銀三百三拾四貫八百目

但壹斤ニ付五拾七匁六分

金ニシテ五千五百八拾兩

右之通御改革以来御払相成申候、以来モ無油断御取締行届候得者、年々四五千包者御払可相成候付、御国元御用ノ朱粉払底仕候得者、琉球へ調文申越候手当モ仕置候時宜ニ成立申候、

「〇一四 国産薬種ノ事」

一御国産薬種之儀者、余国ニ勝レ上品之段ハ兼而承及候付、以前之仕向取調申候処、不行屈之儀而已御座候付、支配人滞納等モ過分ニ有之候間、御趣法立兼候ニ付、去ル申年御仕向相改、人柄御吟味之上御薬園奉行掛被仰付、滞納銀者新支配人エ為引請、一体之仕向キ綿密ニ申渡、出産之品者、大坂御仕登之外ハ近国売亦者御国用之御払相成、於京・大坂者見聞役之内別段掛置、御払向種々手ヲ付サセ申候処、追々御払口開ケ立、去ル秋迄御薬園方へ百貫目余之御利益相備リ、滞納銀モ無滞上納致シ、猶大坂直組モ漸々相進ミ、当分通御座候得者、往々者一廉ノ御国益罷成可申、尤是ヨリ猶又土地相応之薬品御仕立申上候「ハ、」御国益筋者勿論、採薬之者共産業ニ罷成申儀御座候間、当時折角薬種繁茂之儀ヲ吟味仕事御座候、

「〇一五 胡麻・雑紙・櫓木等、外ノ大坂仕登産物ノ事」

一大坂御仕登品之内胡麻・雑紙・櫓木等之儀モ、外品ニ進シ御改革

以来ハ細密之手数ニ取計差登、御払口ニ付而者種々吟味ヲ尽シ直進之方ニ取扱仕候ニ付、何レモ程々ニ必シ御利益相成候得共、取分ケ申上ル程之金高ニ相及不申候ニ付相省申候、且又当春於大坂被仰出候御趣意之通、是ヨリ重御産物御繰登之儀モ精々評議為仕、藍作種植方并生蠟出来高近年相減シ申候付、此節大坂ヨリ檀苗差下植試為致、又者蠟位余国産ヨリ相劣候付、右紋リ方之儀モ伝授ヲ為受、当冬ヨリ於御国元御試紋リノ儀モ取計、將亦近來椿殊之外相減シ候付、当分者御国用サヘモ差支候由御座候間、昨年出崎之節、肥前大村通行之砌、苗椿有功之者有之候ニ付、出水郷士之内同所へ差遣、苗椿フセ方之伝授ヲ為受、苗椿「買」入レ試植申付、猶「於」大坂表モ木之部村植木屋共へ委敷為承、其手筋モ御国元へ申越、当時精々御産物相増候様取扱仕候、

「〇一六 三都並ニ南都・国元ノ借財整理ノ事」

一三都・南都・御国元御借財之儀、御改革御発起迄之金高五百万両ニ相及、御利払等之道付兼候付、不得止事、応者被及御断、乍然何レモ無挽金筋之儀共、^(成方)追々トハ御返済之廉可相立旨訳テ被仰付置候処、其後五ケ年モ相過去ル申年ニ至リ、未御金繰乍御難波極内々御内用計ヲ以テ、京・大坂之分ハ本金千両ニ付四両ツ、ノ宛ヲ以テ年府本人之仕法相初、被渡置候証書取揚ケ預リ置、別段

通帳相渡、右金高書載候仕向ニ而、江戸之儀モ翌酉年ヨリ同様渡シ来リ申候處、莫大之御借財先無異議治定之形罷成申候、依之年々右為割済於大坂金貳万両差分、右之内ヨリ京都・江戸へモ差廻、御内用方掛之者共掛置、極密之計ヲ以テ渡方取扱為仕申事ニ御座候、然者此一条者御改革方肝要之大事ニ而中々右様之時宜ニ「者」至リ兼可申事ニ御座候處、全御威光之一筋ヲ以テ是程之治定ニ罷成申候得共、右御借財之内ニ者拾六万両ヲ以テ頭ニテ数万両之出金仕居候者共、僅カツ、ノ御割渡ニテハ内心承服可仕訳モ無御座候間、自今以後右ニ被掛置候御役々、御改革以前極々御難渋之御時節、無撓御改革被仰出候御趣意ヲ忘却仕、万一本意ヲ取失ヒ候時者、太粧之御借財亦々以前ニ立復リ御改革忽崩レ立可申儀者眼前ニ差見候、「左候」得者是迄深ク被遊御配慮候御事空敷相成候段奉恐入候儀ハ申上ルニ不及候得共、乍恐私ニモ御改革被仰付候以來昼夜心痛仕、千辛万苦ヲ経乍漸是程迄遅ヒ立候儀、誠ニ以テ残多次第奉存候、勿論其期ニ至リ候得者、譬え如何様之智術ヲ用ヒ申候テモ御趣法再興仕候儀無覚束、就而者御国家之御危難ニモ被為相拘候御事御座候間、往々御内用掛之御役々右之旨厚相心得、御趣意ヲ貫キ永年治定之御趣法相居リ、追而以時節預リ置候証書并渡置候通帳共ニ取返シ消シ除キ候上ナラテハ、実々被遊御安慮候御時節トハ難中上御座候間、右之趣為相含、聊緩怠之儀無之様

被掛置候御役々へモ申渡取扱為仕申候、

「〇一七 大井川渡川仕法改革ノ事」

一本金千七百両

一利金六百八十両

但去々戌年ヨリ来ル未年マテ拾ケ年分利息

右者大井川御渡川ノ節、川越シ共之賃錢金高二相及、殊ニ川開キ等之節者混雜ニ紛レ余計之門札（川札）モ相渡、何分行届兼候付、何卒致シ様ハ有之間敷ヤト常々相考居候折柄、島田宿御本亭置塩「藤」四郎ヨリ拝借之願申出、左候而過法之利息ヨリ相下ケ被下候ハ、夫丈ケ屯置候、御下国御渡川之節者賃錢不申受、右利息ヲ以テ川越共工相払候仕法仕度旨ヲモ願出申候付、本行之通御貸渡取計、左候テ元利年割之通、当年迄三ケ年大坂御屋敷へ相納メ、昨年御渡川ヨリ

右之仕法通相成、御益筋者勿論、川方ニ統別而難有カリ候様罷成候付、平日諸人通行ノ節迄モ都合宜敷罷成為申儀ニ御座候、

一金千両

利金貳百三拾四両
（イニハ）

但来ル已年ヨリ来ル戌年迄拾ケ年分之利息
（イニハ）

右者大井川ノ金谷宿ヨリ前条同断願出申候間、今般通「行」之節

御貸渡シ取計申候、左候而振合之儀ハ島田宿之向キニ準シ、来ル
寅年御参府之節ヨリ無賃錢ニ而御渡川相勤申候筈御座候、

張紙

本紙内実者御内用方付足輕ヲ以テ拝借願出、其方ヘ日々貸セ
イ聞かせ
申候処ヨリ願出申候時宜ニ成立申候、

「〇一八 益筋一手商売差止ノ事」

「御国「元」之儀者御改革以前者極々御金繰御難決ニ付、益筋願下
申儀有之、右者御礼銀何程可差上候付何品一手御売上、又ハ一手
商売被仰付度、亦者何商売之品何程候ニ付肩銀諸商人ガ口々ノ完高ヲ調
査シ幾分ヲ納メシメタリ、
大小商賣同シ、実ニ酷
法ノ極ナリト云フ何程ツ、請取候様被仰付度申出候者有之、追々
免許相成、後々者一日暮之振売之者迄モ肩銀ヲ取候様成立、夫丈

ケ諸品直段高料相成、諸人及迷惑、下々ニハ別テ差勞候、第一御
国之風俗ニモ相拘事御座候ニ付、御礼銀納方相減シ申儀ニ御座候
得共、御改革後者石休之儀者都而取揚、御礼銀前上納致シ居候者
ヘハ被返下、当分者一手受肩取体之儀免許之者ハ一切無之様罷成
申候、

「〇一九 上京出家・社人ノ入費節減ヲ計ル事」

「御領内寺院社家之面々、住職又ハ加階昇進等ニ付而者上京仕事御

座候処、土地柄不案内之事ニテ余計之入価ニ相及ヒ、或ハ諸所輪
番又ハ本山法用旁ニ付而モ上京致シ、長滞在ニ及ヒ、京都御屋敷
ヘハ出家・社人等無絶間程之儀ニ而、夫丈之入費ハ自ラ拝借等願
出「御物」御撥之事御座候処、御改革以来極内御手ヲ被入、夫々
都合取計候儀数多有之、既ニ聖護院之宮様入峰并閑束御下向ニ付、
飯隈山（大隅国肝付郡大崎郷ニアリ）儀者父子共供奉相勤中筈御座候
処、内済之計ヲ以テ不及其儀、其外大坂同分寺輪番交代并当千眼
寺・南泉院・大乘院住職等之始末、何レモ以前之振合トハ半方之
入価ニモ不及都合能相済、何事モ速ニ片付、長々滞京不仕候ニ付、
御賄料等ニ至リ格別減少仕申候、

「〇二〇 国元囲米ノ事」

「前々ヨリ異国方御囲米ハ、諸所御蔵々ニ而真赤米都合千九拾式石
七斗四升年々新米詰替相成来候処、去ル末年ヨリ別段御手許御内
用方御囲被仰出、追々当子年迄米壹万六千五百石御囲相成、年々
新米詰替被仰付置候、猶又近年中囲重三万石丈ハ囲置候様取計可
仕、漸々トハ是非五万石丈ケハ御囲不相成候而者、御領内数十万
之人体ニ御座候得者、去ル申年諸国飢饉類之儀共有之候時ハ行亘
兼、御備之註モ薄ク御座候ニ付、年々御繰合ヲ以テ囲重為取計候
積ニ御座候、乍然御領内之儀者全体米不足之御国ニ御座候間、之

レヨリ田地手入取替等行届カセ候儀者勿論、新田開発可仕場所モ有之候間、追々吟味仕申上候様可仕候、

「〇二一 国元借入銀整理ノ事」

一御国元往古ヨリ之御借入銀太分ニ相及居候、御改革後ハ元利共ニ不被成下候得共、後年之煩相成事御座候処、御借状差上切一名 獻金ノ所請免官ノ事ナリ願出候者共有之、願之通被仰付、身分品能資格昇級ノ通請、被仰付候処、追々差上切願出、都而願通被仰付候付、此金高太分ニ相及、最早「古」御借状残リ少ニ相成候事ニ御座候、

「〇二二 人別出銀・出米等免除ノ事」

先年来人別人別税出銀一名 戸税ノ并竈銀一名 竈税ノ、壹分三厘銀、五升重出米一名 諸士ノ
二石ニ玄米五升ヲ課シタリ等被仰付置候処、近来御領國中別而困窮仕居候段被聞召上、御仁恵ノ御思召ヲ以、壹匁銀「竈銀」并壹分三厘銀儀ハ三厘重丈五升重之内式升都而御免被仰付、右者御領内惣人体并給地総高頭竈数ニ相掛申儀ニ御座候得者、莫大之米錢ニ相及、屹度御繰合ニ相拘申候事ニ御座候得者不容易訊ニ御座候処、必竟者御改革以来乍御難渋モ大坂表御金繰相立候処ヨリ右之通被仰付候、「付」而者一統モ別而難有奉存候事ニ御座候、

「〇二三 西目筋飯屋並ニ通路修補ノ事」

一西目筋御飯屋御修甫「方」行届兼雨漏等多及破損居候付、去ル申年ヨリ御手元御内用方計ニテ諸々御飯屋御修甫追々取付、平板屋之儀ハ都テ瓦葺ニ調替、野田・伊集院地頭飯屋迄モ当春迄ニ都テ御修甫相済御丈夫相成候付、以来ハ御修甫方々間遠ニテ御出方格別薄ク罷成儀ニ御座候、且亦西目筋通路段々難場多ク道普請届兼候ニ付、是以テ手入申渡候処、追々行届、御通行之節ハ勿論、平日モ精々無油斷取扱方仕候様、毎度郷々へ申渡候事ニ御座候、

『島津家国事執掌史料卷之』

齊彬公史 本紀嘉永二己酉年

調所広郷履歴第二 』

「〇二四 炭・椎皮・椎木・柞灰山等、他国商売山差止ノ事」

「前々ヨリ商人其他国出炭山・椎皮山・椎木山・柞灰山等相願、田地用水差支無之場所ハ免許相成来、近年諸所山々殊之外伐難御手薄罷成候付、他国商売山都而差留方申渡、当分御国用迄差免候方ニ取究、追々山立候様山奉行へ取扱為仕申候、

「〇二五 大富小富差止ノ事」

「上町原田十次郎願立ニ而大富小富与申儀免許相成居、益銀千両ツ、二之丸御統料方へ上納相成来候処、愚昧之下々利欲ニ迷ヒ、朝夕入用之品迄モ相方付ケ富掛致シ、下々別而相勞レ候由相聞得候付、御改革ニ付而者御取止方之儀掛御役々へ吟味申渡候処、千両之上納金御取揚相成候而者二之丸御用差支相成候付、外ニ上納金高御入付無之候而者御取揚金之方ニハ難申上段申出候付、御内用方御差分金之内ヨリ千両二之丸へ差出、大富小富共ニ取止メ申渡

候、

「〇二六 国元藏々取納方仕向改革ノ事」

「御国元御藏々取納方之儀者、屹度被究置候御定法モ御座候処、数十年前ヨリ下代藏役人共風俗段々悪敷罷成、年々御払米入実相減シ、終ニハ米壹俵ニ枳日漸ク式斗九升迄ニ相成、諸人別而迷惑仕居、勿論御藏々ニ過分之欠米相建、江戸・大坂御統ケ米・島統ケ米欠立等ハ年々数百石ニ相及ヒ、別而御損失之事御座候処、御改革ニ付取納向之儀共御旧法ニ基キ相改メ嚴敷申渡候得共、何分從來之惡習速ニ立直リ兼候処、毎年諸郷御藏々ハ別段見聞役廻勤為仕、御城下御藏々ハ御勝手方掛見聞役掛置精々取締為仕候処、未申年頃ニ至リ大抵治定仕、当分者弥行届、御改革以前ニ比へ申候得者、張紙之通相及、一統御扶持方加増被仰付候同前ニ相当リ、別而難有奉存候事ニ御座候、尤御藏々欠米并諸所御統米欠米全ク無之、至極御益ニ御座候、

張紙

一米壹俵御定枳日三斗三升六合

但御改革前入実

米壹俵御定枳目三斗三升六合

一米壹俵式斗九升

但御改革前入実

一同 二斗四升

但当分入実

御扶持米四石中受候者

御改革以前之升目二而者

三石四斗四升八合

当分ハ

四石八升

「〇二七 江戸続米囲余石並二大坂囲米ノ事」

一江戸・京・大坂御続米之儀者、年分之御払高ヲ見賦リ差登候付、以前ハ余計之石高^注モ無御座候処、御改革以来御払向精微取計仕、別紙ニモ中上候通、江戸之儀者小枅計リ出枅（余剩ノ通證）迄モ屯ヘ囲置候程之儀ニ御座候得者、御払向モ段々取納^{約力}メ候処、是迄之余石最早半季程ハ相増居候付、漸々「ト」ハ一ケ年分丈ハ追送候振合ニ成立可申、其上大坂仕登米之内去ル申年ヨリ四千石、大坂御留守居其外役々立会切封ニ而御囲ヒ米申渡、年々新米詰替取計非常御備ヘニ致シ置キ、平日ハ何様之訳有之候而モ蔵出不仕筋ニ堅申渡置申候、尤追々者今千石囲方相重都合五千石御囲米相成候様取計仕考ニ御座候、

「〇二八 三都及び長崎・国元ノ蔵々弊習取締向ノ事」

一江戸御進物蔵・御台所蔵其外御蔵々、京・大坂・長崎御蔵々、御国元御蔵、其外諸郷御蔵々ニ至迄、百年来種々之習俗有之、下代蔵役人又ハ手伝等種々之手筋取企候儀及毎度、其節之御取締向吟味ヲ尽シ嚴重ニ被相替候へ者、又其向ニ応シ手段ヲ替へ様々悪意之儀共年々増長仕、嚴科ニ被行候者モ及数度候得共、夫ニモ見懲不申連々無絶間重罪之者出来候風俗ニ御座候処、御改革以来段々厚被仰出趣有之、御払之仕向相改、諸向手形引付御趣法方ヘ為差出免印之上入払相成候手数ニ相定、左候而御蔵入払相心得候見聞役御蔵々ヘ掛置、綿密之取締仕候処、其以後一切右体之儀無御座候、就而者累年太粧之金銀米錢無故御損失ニ相成候高ハ算当ニモ及兼、第一者御蔵之出入嚴重罷成、姦智愚昧之輩御法ヲ犯シ候儀モ無御座候、誠ニ以テ無此上御仁沢偏ニ御威徳ヲ以テ積年之悪習モ一変仕候儀、実ニ難有仕合奉存候、就而者猶又此以後御趣意相行レ候様向々ヘモ申渡、御取締ニ付而者精々行届候様見聞役共ヘ申付候、

「〇二九 江戸続米仕向改正ノ事」

一江戸御続米之儀者、全体九千八拾石之御規定「御座」候得共、右之内式千五拾石者現米御続ケニ不及、於御国元御払取計ヲ以テ代^{一御払取計代銀を以テ差控}

銀ヲ以テ差続、其余六千五百石程ハ出水・川内・肝付三方限ヨリ割合大坂へ差続候得バ、彼表借船之都合ヲ以テ大坂并兵庫ニ而積替申仕向ニ御座候處、先年者入実・俵共ニ不行届候付、江戸「御」取納之節モ過分之欠米「相」立、其上諸人へ御私相成候得者纔式斗八升程之俵モ有之、勿論御藏皆私之節者鼠切乱俵（小升斗）小升計之欠米等年々百石程ニモ相立為申儀御座候處、近年仕出元行届候上、大坂積替之仕向至テ手堅ク取計仕、俵毎ニ斤目札付ヲ以テ船頭ニ引渡、江戸取納向之儀モ右ニ準シ取扱仕事ニ御座候「處」、至極行届諸人申請米一統入実宜候付、別而難有奉存候儀者別紙ニ申上候通ニ而、御藏者私被成候節モ一切欠米無之、剩小私之節ハ出升有之候間、右者屯置別段差分申渡置候處、三百俵ニ相及ヒ申候、尤年々新米詰替置、年々御趣法掛御側御用人・物奉行・御金方見聞役立会嚴重相改相切封ニ仕候仕向ニ御座候、尤御続米之儀モ年々残粉有之候間、是又匪ヒ方之儀共御治定取計可申候、

「〇三〇 国元買物方藏仕向ノ事」

一御国元諸御買人物代私之儀、前々ヨリ金藏（金・米藏一郭ニアリ、故ニ金藏ト通唱ス）私ニ而御座候處、混雜之訳モ有之、去ル寅年ヨリ御買物方藏被召建、御買人物諸向キヨリ申出候節者、「都而」御趣法方御用人見届免印之上直段品柄吟味ヲ尽シ御買入相成、代銀

御買物方藏掛ニ被仰付、入私ニ付而者御金方勤ニモ立会、差引殘金銀錢現「物」ニ引合候様被仰付、右之通仕向被召建候ニ付、別而嚴重ニ而御費筋モ無之方ニ相成候、

「〇三一 領内藏々ノ斤量分銅統一ノ事」

一御国藏々斤量前々ヨリ格別不揃ニ有之、御損失相拘事御座候ニ付、於大坂唐金分銅拾組余為作調、且手本斤量數拾本相添被相下御藏々入付申渡、米并砂糖御仕登方ヘモ相渡、三島ヘモ差下、時々右分銅例シヲ以掛占受取渡致シ候様申渡候處、江戸・大坂モ右之仕向ニ而御続品掛請取仕候様罷成、当分ニ而者何方モ斤量相揃請取渡之次第相定申候、

「〇三二 三島經營ノ改革ニ関スル事」

一去ル巳年御改革付、三島砂糖惣御買入被仰出、三島方御役所（天島・喜界島・徳ノ島ヲ管轄ス、故ニ斯ク名唱ス）被召建、掛役々人撰ヲ以テ被仰付、惣御買入之仕向者勿論何篇瑣細逐吟味、夫々御治定相成、島詰代官見聞役等モ都テ人柄吟味ヲ以テ被仰付事御座候處、砂糖惣御買入ニ付而者御改革方第一之根本ニ而、格別詮立候儀者別紙算面立ヲ以テ申上候通御座候處、其以前者船之見聞等モ不行届、其上自物砂糖積入等之利欲ニ拘リ不相応之重荷積入、時節取後レ

難破船多ク、詰役々交代之節多人致命ニ相拘リ候儀多々有之、然
処御改革後ハ船々見分等モ行届、網碇走セ道具等入念、時節不取
後様差急、積荷之儀モ不相当不積入成丈輕日ニテ上下為仕候処、
難破船相少ク、詰役交代上下ニ付而者人命相拘候儀老モ無之、
誠ニ難有事ニ御座候、

「〇三三 受持郡奉行設置ノ事」

一御国中百姓共近年別而相勞レ、既ニ御高格護（耕作ノ通語）モ出来
兼候処多々有之、郡奉行人柄吟味之上郷々相分ケ受持被仰付候処、
皆々共混与引受、時々受持之郷々行廻リ諸下知致シ候付、田畠仕
付方取納方ニ付而モ追々行届、秋口御仕登米取調方等ハ勿論、其
外万事都合宜敷罷成、百姓共ニモ折角潤立候様取扱為仕中候、

「〇三四 国元厩入用金ノ支払改正ニ関スル事」

御国元御厩之儀、太分之御入価相及申ス場所ニテ、前々ヨリ段々
不行届之儀多々有之由相見得居候付、御改革ニ付而ハ御馬預リ人
撰ヲ以テ「掛」被仰付、前々ヨリ御厩ヘ相拘候上納銀都テ御物方
ヘ相納、御馬飼料其外小払用之分御厩蔵ヘ入付相成、其外之御払
ハ都而御物方ヨリ相払来候得共、右諸上納都而御馬預引受被仰付、
御馬飼料者勿論、御馬役預料銀米其外役々中間「等」ニ至ル迄被

下方、且御厩内御修甫料等都而御厩蔵納銀之内ヨリ引受相払候様
追々申渡候処、初発ハ掛御馬預モ難波申立候得共、御趣意深汲受
精々吟味、諸始末行届、繰合モ段々宜敷相成趣付、御馬方入目
並江戸御厩御定式御入用金、御在府年五百両、御在国年三百三拾
両宛、是又御国元御厩蔵納銀之内ヨリ引受差続候様申渡候処、同
断御受中出、當時猶又諸所始末行届候「方ニ」掛御馬預等吟味ヲ
尽シ申事御座候間、当分別而御都合宜御座候、

「〇三五 内用掛山奉行設置及ビ諸木仕立等仕向改正ニ関スル事」

一山奉行方諸木立方并御用材木取下方、諸人申請木御払方等ノ仕向、
前々ヨリ習俗ニ而行届兼候付、御改革後御内用掛山奉行被仰付、
定式外之儀ハ「定式山奉行ニ而取扱御取下、其外御臨時之儀者」
御内用掛山奉行方ニ而取扱候様被仰付、御役場モ別段被召建御用
取扱相成候処、掛之面々御趣意汲受格別吟味、以前ハ取り下シ
「方」モ百人山師ト申者共ヘ受負取下シ申付候仕向ニテ、賦外余計
之材木取下銀高太分追屯御払方繰合出来兼候事ニ御座候処、御改
革後受負取下シ差留、當時ハ山奉行見分賦方之上、掛見聞役付添
現取下ニテ余計之材木取下サマル様相成、取下銀一仕切ツ、払切
候仕向ニ取究候処、此以前ヨリ銀高格別相減シ、年分ニハ太分之
御出目ニ相成候、左候テ諸木仕建方モ定式外ニ取仕立方之儀、御

趣法掛御用人へモ右掛申渡置候処、亡有川藤左衛門別而差ハマリ、山奉行・郡奉行立会、御城下近在・諸郷迄モ不差障地面便利宜場所へ松・杉相仕立候処、最早相応ニ成長仕、此分モ太分之木数ニ相及ヒ、其後モ右役々々見分方ニ相廻シ、無厭年仕立方仕候、^(所)左候而諸人中請木御私之仕向モ相替へ嚴重之仕向ニ為取計申候、

「〇三六 国元諸仕向改正ニ関スル事」

一 御改革以來於御国元御仕向被召替候儀数多有之、第一三島御仕向替、諸郷受持郡奉行、寺社方御内用方掛、御厩御仕向替、御菓園方同断、御内用掛山奉行、其外向々迄モ都テ御改革之御趣意ヲ以テ取扱為仕候、別紙ヲ以テ大意申上候御役場モ御座候へ共、委細之儀者行届兼、且神社仏閣御創立又ハ御修理、且御殿廻諸々新^{イ諸所}御造立等之場所段々御座候得共、掛テハ行届不申候ニ付相省キ申候間、追而罷下候時分取調申上候様可仕候、

「〇三七 日州表御用船造立ノ事」

一 日州御仕登米之儀、年來他領御借船ヲ以テ被差登來候処、船主共慢氣差起積船御断等申出、見聞役等借入方ニ被遣候得者、過当之運賃重等申出、色々と積出及延引候儀ノミ有之、大坂表御繰合不都合ニ付、去ル丑年日州表御仕送船五六艘造立方之儀被仰出、同

年私御国元へ罷下候節、大坂ヨリ東目乗船直ニ日州へ相廻シ船造立之儀致下知置候様承知仕候処、大坂ヨリ平野屋安輔ト中者御内用ニ付御国元へ召列罷下候ニ付、東目筋差越候儀相調不中、小倉筋罷下日州表へモ差越申答ニ御座候処、御内用向別而多端ニテ其儀モ相調不申、依テ御趣法方書役御徒目付兼役之内言人御徒目付之場ニテ日州御用船取仕立掛申渡、御趣意之程細々申論、尤御時節柄之儀ニ候間、御物^(藩序ノ通唱)御出方不相掛造立相濟候様可取計旨申付差遣候処、日州四ヶ郷^(高岡・倉岡・綾・穆佐ノ四ヶ郷)町人共別而相勞レ居、赤江川口迄ハ五里程モ相隔居候付、容易ニ自力造立等相調向無御座、乍然御趣意之程再三申渡、段々手数ヲ尽シ御船拾六反「帆」二艘、高岡町同四艘追々造立等相調、當時都合六艘御物御出方ニ不掛相備へ、御仕登米式度漕ツ、相勤メ、右相仕廻候得者、江戸御用材木積船又ハ山川へ相廻葉種子積船且砂糖積替船等モ相勤メ候付、別而御用弁相成、右運賃御余勢銀者別段差分ケ置候御船御修甫用又ハ御造替用ニ備へ置申候、

但赤江川口延岡領之内、借地ニテ御船御囲場与申ヲ管ケ所造立、掛見聞役言人・附足輕言人相詰、右御用船出入差引并山產物取締相兼年分不明様相詰申候、

「〇三八 富福丸等四艘ヲ大坂仕登積船トスル事」

一富福丸

一富吉丸

一富徳丸

一富長丸

右者大坂御仕登米船積之儀者、浦船等之内ヨリ相勤メ申事ニ御座候処、大坂上下之上島々へ差下候得者時節後ニ罷成申候間、過半者代リ船トシテ長・防・阿州辺之借船ヲ差立来申候処、右諸所之船頭・水主共ハ到而不宜者ニテ、大坂屋荷俵面等疑敷廉モ御座候得共、他領者之故存分之取扱モ調兼、然ハ当時御産物何品ニ不依行届、大坂表商人共氣受モ立可中候折柄、右体不締ニ成立候テ者再ヒ人氣モ崩レ立可申者差見得中候付、御米其外御産物積船トシテ御本手金被「相」下、兼而御内用方へ召仕候者共等へ支配申付、旧冬於重富（郷ノ字加乙）御内用掛山奉行三島方掛付添、右之通致造立、富吉丸・富福丸者御米積船三上下ナカラ別テ早着致シ、富福丸ニハ御米一度積登候上三島へ差下、富長丸ハ当正月船卸致候付直ニ大島へ差下、式艘共ニ砂糖積登、右之運賃砂糖ヲ以テ本手金相補候仕法御座候、尤右様早上下致シ御繰登之内御用并ハ勿論、外船之積登荷ヨリモ俵面等格別宜御座候ニ付、外船々之取締ニモ証故ニ相成、格別御都合ニ罷成申事ニ御座候、

「〇三九 三島方御用船ノ事」

去ル丑寅年頃ヨリ以前ハ、島登等別而難破船多ク浦船余程致減少、

御仕送御用殊之外差支、新造立申渡候而モ船主共ニモ本手薄ク相成容易ニ造立調兼候向御座候間、御改革方御内用金之内ヨリ三島方へ本手金被「相」下、船主慥成者共吟味之上、譬へハ造立料千両之賦ニ候得者、右之内七百両又ハ五百両丈宛拝借申付新造立為致、返上方之儀者島方一ト上下何程ツ、ト五六年目ニハ皆納相成候仕向ニ相究、都而三島下リ申付候処、追々船主共ニモ難有染付、段々願出候者共有之、造立相重ミ、三島方御用船ト申名前ニ而三島方掛御役々支配申渡置候処、其内ニハ難破船ニ及候モ御座候得者、其節者又々押返シ本手金拝借為致造立、当分者右御用船拾余艘ニ相成、都而拾八反帆位ニ而島上下早仕廻相勵候付、別而運送宜ク、依テ繰合者秋口御仕登積船ヲモ相勤、御仕送方御用并至而宜御座候、

「〇四〇 改革以後ノ江戸新造立外諸作事ノ事」

御改革以来新御造立・御造替・御引直・御栖居替・開キ御修

甫等重立候分、左之通

一高輪御屋敷 御神殿御造立

一白銀御屋敷御引払

一中将様（齊宣公）高輪御屋敷へ 御引移

一堀端御屋敷御取入ニテ御物見御造立、其外御兵具蔵并御米蔵見聞

役御長屋・御兵具方御長屋御造立

一 桜田御屋敷御式台ヨリ御殿廻惣屋根葺替、御膳所廻開キ御修甫、
屏重御門御造替

一 大円寺惣開御修甫

一 上御屋敷（芝本邸ヲ云フ）ヨリ高輪西向・南向・田町、其外諸所小
板葺之場所惣瓦葺

一 上御屋敷奥御玄喚ヨリ朱御門御造立

一 「一高輪御屋敷鶴之渡惣御造立」

一 高輪御屋敷西御門通御長屋御類焼付惣御造立

一 上屋敷 御子様方御部屋御造立

一 上御屋敷大奥新 御殿御茶屋并御茶室、其外御待合御造立

一 上御屋敷御式台家根廻惣葺替

一 田町御屋敷十蔵四軒開キ御修甫、其外材木板蔵三ヶ所御造立

一 上御屋敷銅御門（銅板ヲ以テ屋根トス、故ニ通唱トナレリ）脇御長屋御造
立

立

一 上御屋敷御馬場小納戸土蔵御造立

一 三田御屋敷大奥開キ御修甫

一 上御屋敷 御休息所屋根廻惣葺替

一 印 御小座其外御栖居替

一 上御屋敷表 御休息所御小座御造立

一 上御屋敷表御門御造立 イ御造替

一 大円寺 御靈屋瓦家根惣葺替

一 玉川上水拔木板ヨリ上御屋敷迄樋枅御入替、其外御修甫

一 将監橋（芝藩邸ノ近地ナルカ故、掛ケ替修甫等一切藩ヨリ担当セリ）御掛替

一 上御屋敷外御庭石蔵御造立

一 同所御小納戸蔵式軒上屋根取除八卷仕直シ瓦葺

一 上御屋敷大奥土蔵式軒右同断

一 西向御屋敷御内用方土蔵御造立

一 田町御屋敷奥木屋并同所桶結所木挽木屋御造立 イ御造替

一 同所綿木屋御造立 イ飾

一 同所金物所御造立

一 同所張物「所」并塗物所開キ御修甫

一 同所九番御長屋ヨリ拾式番御長屋開キ修甫

一 上御屋敷新取添御用心御門前へ白金御長屋ヨリ御長屋御引直シ

一 上御屋敷三筋一番御長屋通り五拾七軒開キ御修甫

一 西向御屋敷橋川次郎兵衛被召置候御長屋造次栖居替土蔵開キ御修
甫

甫

一 西向御長屋土蔵開キ御修甫

一 谷中瑞輪寺 御靈屋御造立

一 日光遊城院御修甫

一上野明土院客殿ヨリ御座之間其外瓦屋根惣葺替

一上御屋敷銅御門角 御物見御造立

一上御屋敷御式台火之見上り段御造立

一上御屋敷屏重御門御造替
イ「御造立」

一高輪御屋敷玉突台（洋風ノ建設ナリキ）へ土蔵御造立

一田町御屋敷御台所土蔵式軒上屋根取除八巻仕直シ瓦葺

一西向御屋敷へ御長屋老軒御造立

一西向御屋敷中通御長屋老流惣開キ御修甫

一南向御屋敷御長屋四流御造立

一桜田御屋敷東御門通御長屋々根廻惣葺替、其外諸所御修甫

一南向御屋敷他屋敷境御長屋開御修甫

一田町御屋敷老丁目御貸屋開御修甫

一上御屋敷掃除方御引直

一上御屋敷御厩五疋建（御乗馬五匹ヲ定數、其他予備馬數頭アリタリ） 御馬

屋御造立

一上御屋敷御膳配方物置板蔵老棟御造立

一同所御進物蔵板倉老ケ所御造立
イ「板蔵」

一御上御屋敷大奥物置老ケ所御造立
イ「上御屋敷」

一上御屋敷 御馬見所御造立

一高輪御屋敷大奥土蔵開御修甫

「一高輪御屋敷表御門御造替」

一上御屋敷大奥新御殿御物干御造立

一同所御納戸御仕立物所御造次

一同所土蔵開御修甫

一田町御屋敷平御長屋式流開御修甫

一田町御屋敷番所式ケ所御造替

一田町御屋敷新御米取納場水蔵老ケ所御造立

一南向御屋敷新御取入土蔵御修甫

一大井御屋敷 御茶屋并御長屋廻小板葺之所瓦葺

一同所「御」塩硝蔵御造立

一同所御腰掛御作直

右之外、度々風痛、近衛様御入火之御番方、琉人參府、御下国方、

中将様（音宣公）・少將様御下向、且又御吉凶二付而者、諸調物等

皆共御作事方へ御拘候儀過分ニ御座候、

「〇四一 改革以後ノ京・大坂・伏見新造立外諸作事ノ事」

御改革以來、京・大坂・伏見御屋敷其外諸所新御造立「御造替」、

又者御修理等之場所、左之通、

一大坂御殿惣瓦葺諸所栖居替

一御休息所御栖居替

- 一御茶室御造立^{イ御造替}
- 一御門御造替
- 一御内用方土蔵御造立
- 一御長屋廻惣栖居替惣瓦葺
- 一内大客屋栖居替惣瓦葺
- 一日記所統見聞役詰所御造立惣瓦葺
- 一御留守居方土蔵御造立
- 一土佐堀浜石垣惣築替
- 一西之方土蔵開御修甫
- 一浜御屋敷御物見御造立
- 一右統御長屋栖居替惣瓦葺
- 一同所土蔵御造立
- 一新御長屋式軒御造立惣瓦葺
- 一中御屋敷御長屋栖居替惣瓦葺
- 一同所浜石垣築直カサ上ケ
- 一下屋敷御蔵々惣御修甫
- 一御長屋栖居替惣瓦葺
- 一水蔵宅軒御造立
- 一高輪通ヨリ北之方折廻シ御借屋御新立、同所東之方へ同断御借屋御造立
- 一同所東御屋敷西之方右御借屋開御修甫惣瓦葺、同所御長屋惣瓦葺
- 一同所御蔵之開御修甫
- 一伏見御殿惣開御修甫惣瓦葺
- 一京都御殿^{イ御茶室}（近衛家御裏御殿ヲ云フ）御栖居替惣瓦葺
- 一御茶台御造立
- 一四条通御屋敷（錦町）御取添
- 一御長屋廻惣栖居替惣瓦葺
- 一郁姫様（近衛家）桜木町御別荘御造立并御屋敷御取添
- 一堀川御屋敷御長屋栖居替惣瓦葺^{イ御蔵}
- 一東福寺塔頭東成寺開御修甫
- 一相国寺内林光院へ被為在御座候 松齡様御肖像（義弘公御肖像ヲ當時ノ京都御留守居山田二郎左衛門清安力ヲ賜シテ所望シ、鹿見島ニ護リ下リ大乗院ニ安置ス、事実清安カ伝ニ記ス）御帰殿
- 一字治黄檗山へ御位牌御安置
- 附、御預被置候御祠堂金被相渡御仕法替
- 一高野山 貫明様（義久公） 松齡様（義弘公）
- 御石塔地恵光院ヨリ御貰受、蓮金院へ御附托之上、
- 実窓様（義弘公御婦人）一唯様（久保公）御石塔迄都而御修理
- 一大信院様（重豪公）御石塔御建立^{イ追悼}
- 一島津義虎石塔并朝鮮戦亡追悼石碑其外石垣・石段等都而御修理

一蓮金院惣御修甫

以上

〔〇四二 作事方材木外諸品買入仕向改正ノ事〕

一御作事方御払之儀者、全体御所帶之半方（江戸・京都・大坂及ヒ鹿児島
其他神社仏閣等一切ノ費用夥シ）ニ相及ヒ候与申習ラワシ候儀ニ御座候

処、以前ハ江戸・京・大坂共別而御修甫方行届不申候処、御改革
以來重立候御造立・御修甫之分モ別紙式通之通ニ而、太柱成場所
数々ニ相及、定式御修甫方之儀者以前ニ相替無殘処行届申候ニ付
而者、右之御払ハ莫大之金高ニ相及為申儀ニ御座候処、御改革以
來材木其外諸色御買入方之仕向、以前之仕來ニ不拘、御作事奉行
諸所ヘ行キ廻リ精微ニ吟味ヲ尽シ直買等取計申候間、賦通ヨリハ
格別相減シ御益ニ罷成為申事ニ御座候、

〔〇四三 改革政治十年余ノ成果・今後ノ課題ニ付、調所広郷報告〕

一先年來御所帶方連々御不繰合被為成立、既ニ去ル戊亥子年頃ニハ
極々御難渋ニ而 御公務モ難被為整候付、無御摺御改革被仰出候、
右取扱御直私ヘ被仰付、誠ニ以恐入仕合奉存候、然処私事多年難
有御側ヘ被召仕、御勝手方經濟向之儀者全ク不案内ノ上、夫迄之
間毎度御趣法替被仰出、何レモ尽手教候得共御繰合立直兼候上之

儀ニ御座候得者、所詮御趣意通勤応シ可申儀難調奉存候、乍恐御
断申上候処御許容不被為在、猶又嚴命之趣承知仕、何共重疊奉恐
入御受申上、則上坂仕、古銀主（新古銀主ノ名及ヒ住所調ヘ記スベシ）

共ヘ無和理出銀頼入候得共、皆共手切レ之御断申出、又ハ不都合
之儀ヲ申出候者モ御座候間、不及是非古銀主共儀者申断リ、新銀
主頼入之儀取掛候処、夫迄及數度御借入金御返済筋御違約之末ニ
御座候得共、何様手堅キ仕法ニテ相談仕候テモ一切取受不申、其
内ニハ適々熟談ニ可至哉ト為存儀モ俄ニ手違罷成候、何分以前之
仕向見懲居候故一円染付兼、出銀御断申出候得共、再往御趣意理
解頼談仕候処、種々御難渋或難聞捨程之事モ承リ、毎度短慮モ差
起候得共、其意ニ任セ候得者不都合差見得候付、乍残念胸ヲ押ヘ
一向ニ出銀頼入為申次第ニテ、其時分ハ実ニ寢食ヲ忘レ、心痛為
仕儀ハ今更筆舌ニモ難尽御座候、然ル処段々日數ヲ経候内自然ト
実意相通候哉、銀主共疑心解立出銀可致氣受ニ成立候間、御改革
御趣法立之儀申談、凡内定仕置、猶出府之上御請可仕トノ儀ニ而、
亡平野屋彦兵衛等出府仕 御目見迄モ被仰付、猶亦万端治定之上
弥出銀御受申上、御借入相成、先差掛之御用途被相弁、其外難被
捨置御金筋等夫々手ヲ付、其余者都而御產物料ヲ以テ繰立候御仕
向相定、右ニ付而者第一江戸諸払御取縮メ、御產物仕方ヨリ大坂
表御売捌等之御手教精微ニ取計不仕候而者、年々御用分不引足候

付、其以前之御仕向一体相改、三都其外御借財一往元利御断ニテ御払屯之儀モ纔之内払ヲ以差延置、三島惣砂糖御買入者勿論、江戸・京・大坂・御国元向々不殘御改革被仰付候ニ付而者、俄ニ産業ヲ放レ戰事ヲ捨、或ハ年来之望ミヲ失ヒ、又ハ大損ニ及候者モ不少候付、御国中之誹謗皆私（広郷カ一身ニ蒐リタルハ事実ナリ）ヘ一婦仕、且三都御銀主等ハ太粧之出銀元利申断候付、其身上差禿候者モ有之、其上大金之御払屯纔之内払ヲ以テ申断候間、一統別而難渋仕候間、内心者仇敵ト存居候時宜御座候得者、御役々初至極危踏罷在、所詮私ニ於テハ御趣意成就不仕半途ニ而崩レ立可申哉ト存候振合ニテ、何レモ猶予為仕事御座候処、追々御改革御手厚被仰出、私儀モ重疊難有転役等被仰付被下候処、自然ト人情安堵仕、厚恩召無御抛御改革被仰付候 御趣意之程モ奉汲受、御役々一統精勤仕候様ニ成立申候間、私取扱向格別運ヒ立、尤毎年三都諸所へ被差出万事手ヲ付、御役々勤方之精疎見聞仕申上、御改革方へ被掛置候御役々ハ勿論、見聞役・書役等迄モ拔群精勤仕、御用立候者ハ別段之御取訳ヲ以テ御撰筆被仰付候処、向々勵立、面々受持之御用筋精勤仕候風俗ニ罷成、御改革モ最早六七分程ハ運ヒ来リ、其上年々太粧之御入価打続候得共兎ヤ角被相弁、殊ニ近年者常式臨時之御統金モ無滞差廻シ、諸御払相滞候儀モ無御座、勿論御修雨等迄モ行届、差当リ御不如意ノ廉相見得不申候ニ付、於

向々者御勝手向立直候儀ト相心得、尤御改革発起ヨリ八十ヶ年余モ相過候得者、其以前之儀ヲ存知候者相少ク、又ハ其時分ヨリ相勤居候者共ニモ追々御金繰相調候ニ随ヒ自然ト緩急之方ニ成行候付、当分ハ御困窮之御時節氣速ク罷成、一体何トナク不取締御座候間、物事御入価相増御払高相増候折柄、一昨年ヨリ第一之砂糖直成下落仕、右之訳ハ諸国共甘蔗作徳之利益ヲ覓、四国・中国・肥後・肥前并紀州・泉州、又ハ駿・遠・参等、又ハ関東迄モ植殖シ、当時和製砂糖大分之出来高ニ御座候得者、砂糖直成再ヒ進立可申期甚無心元、何共心痛仕居候事ニ御座候、然者御改革ニ付御産物御仕登御売捌之手続行届候故ヲ以テ、大坂御産物料高相嵩候ニ付、相応之御余金モ相備リ可申儀ニ御座候処、連年御費用相続、（御入賞）剩ハ兩度之御上納迄者莫大之金高ニ相及候付、未御所帯方御立延之御時節ニ不至候処、右通御改革モ浮成砂糖之直成下落仕候様ニ付而者、当分通被召置候得者不日御改革以前之御難渋ニ倍增之御時節到來可仕者一定奉存候間、実以不輕時機相当候付、此涯急度御儉約被仰出、御改革猶又嚴敷被仰渡、当時之御産物料ヲ以テ本ニ致シ、諸向御払省略ヲ加へ、大坂表御新借ニ不及様取計、於御（重方）国元金御産物繰登、是非御改革中御繰合立直リ、其詮相見得候様取扱可仕旨屹度被仰渡被下度奉存候、然ハ初而御改革被仰付、上坂仕金談取掛候付自分案前後行廻存慮ヲ究メ為罷在儀モ御座候処、（イ 時分案前後行廻）

不思儀ニ其事開ケ立、又者何程理解仕候而モ申解兼候儀者自ラ熟談相逐、其外多年之習俗・旧來之仕來ニ至ル迄少モ無用捨相改候付、一々時情ニ背キ候事而已御座候得共、如何様不慮之故障モ到來可仕哉ト掛念仕居候儀共、存外容易ク相行レ、將亦海上之運送・風旱之災殃等、御改革後ハ格外之大変モ無御座候、右等之儀篤ト勘考仕候得者、全御盛徳之御儀ハ申上ル迄モ無「御座」ク、且者兼々御國家御安全之御祈願御丹誠之御儀感通仕候故、御改革モ無御滯是程迄御都合能被為成立御儀ト誠ニ以テ恐入難有仕合奉存候、依之是迄取扱仕候条々、別紙以手扣書大意迄奉入

御聞候、以上、

閏正月

調所笑左衛門

「〇四四 五十万両全備報告ニ関スル調所広郷別紙手扣書」

御前ニ御届申上候

一小判金五拾万両也、

右者御改革被仰付、御産物直増等取扱年々御常式御臨時御入用者相備、其外別段金百万両極御内々御積金相備候様、併先ツ此涯五拾万両濱村孫兵衛申談御積金取計候様被仰付、御請書差上申候付、年々御常式御臨時外別段御金差分置候処、此度金五拾万両全備仕、御国元并当所御宝藏（大坂邸）へ御格護仕置候間、此段御届奉申

上候、以上、

辰三月三日

調所笑左衛門

天保十五甲辰三月、大坂於御休息所御直ニ差上候事、

「〇四五 調所、財政初メ藩政ノ諸改革ヲ進メシ事」

文政ノ末旧藩主三位重豪・宰相齊興ヨリ調所広郷へ財政改革ヲ命シタルヲ以テ、米ル嘉永元年広郷七拾三歳迄（戊申十二月十八日江戸邸ニ病死ス）二十年間一日之如ク夙夜懈ラズ年々鹿児島ヨリ大坂・京都・江戸へ往来シテ、大小百事残ル所ナク心ヲ尽シタルハ実ニ勉メタリト云可シ、文化之頃ヨリ藩中費用連年夥多、国用日ヲ追テ闕乏、大坂之負債増加シ、屢々藩吏方法ヲ改ムルト雖モ債事能ハス、三都・南都・領内都テ之負債五百万円ニ及、從來ノ銀主モ用達スル事一円背セス、齊興国元ヨリ西之宮へ着セシニ、大坂ヨリ東海道之旅費未タ備ハラサリシコトモアリ、又江戸滞府トナリタルモアリ、同所勤番之人員月給十三ヶ月程渡サリシ事モアリ、同地藩邸之金庫ニ南鐐一片アラサリシ事モアリ（事実ナリ、市広モ親ク聞ク処ナリ）、ソレカ為メ邸中ハ茫々タル生草ヲ刈リ馬草トセシコトモアリ、且旧來之成規ニシテ日用之諸品・人足ニ至リ外方ヨリ雇入ル、之請負人アレ共、右等之切迫ニ際シ百事違背手ヲ下スコト能ハス、新番馬廻之者使ニ出ルニ駕籠ニ乗ルコトヲ得ス、各

藩大小名ニモ困難之家多シト雖モ、我藩屏之如キ窮シタルハアラズ、其時高輪邸（重豪公）ニ祖父重豪アリ、白金邸（齊實公）ニ親父齊實アリ、本邸ニ当主齊興・世子齊彬アリ、其外兄弟・叔姪・姉妹多ク養子縁組、旧幕へ広大院之贈遺、亦京都ニハ近衛家等有テ、一時出納之定額アレトモ臨時之費用多クシテ如何ントモスル事能ハス、文政之末至難之極ニ至リ広郷へ改革ヲ命シタルナリ、広郷少年ヨリ君側ニ在テ金穀之道ヲ知ラス、堅ク辞スルモ免サス、止ヲ得ス登坂シテ銀主へ頼談スレトモ、従前屢大金ヲ出シ失約之末ナレハ肯セス、実ニ大海ニ浮ヘル孤舟之如ク更ニ生タル心モナカリシト語リシ、然ルニ坂地ノ商估濱村孫兵衛等二三之知己ヲ得、其策ヲ用ヒ新組銀主ヲ設立スルノ法ヲ立、第一三島産砂糖ヲ資本ニシテ其他之國産ヲ精良ニシテ國用ヲ支弁スルノ法ヲ立、其所置嚴密ニシテ秋毫モ漏サス、才ニ任シ能ヲ使ヒ、精ヲ究メ微ニ入り、年々巡廻シテ勤惰ト計算ト生産之良否・凡百之事務親ヲ見ル二十年間、死ニ臨ムマテ力ヲ尽シタル故ニ、多年荒蕪ニ属シタル芝・高輪・桜田・西向・南向・田町・堀端之諸邸ヨリ日光宿坊・上野増上寺宿坊・鎌倉相承院・大円寺修復ニ着手シ、堀端ニハ土蔵ヲ並立シテ火ヲ除キ、穀ヲ貯ヘ、西京ハ錦小路之邸・近衛家・東福寺支配即宗院等皆修繕シ、高野山蓮金院へ祖先之祭祀ヲ奉シ、宇治万福寺へ大信院初位牌ヲ納、祠堂金ヲ納メ、伏見之邸都テ修繕

シ、別ニ一邸之支弁トシテ過書方へ金ヲ借シ、通伏人ノ為同所居住兼春文殊之家ヲ改立シ、大坂上中下屋敷旅舎ハ皆新築、金庫モ殊ニ堅牢ニ改造シ、其他國産保護之為メ諸蔵ニ注意シテ修繕ヲ加ヘ、崎陽ノ邸モ同シク修繕シ、且藩内モ改革以前城内ヨリ二之丸其他之諸邸蔵々同シク修繕シ、神社仏閣迄ハ枚挙ニ遑アラス、且甲突川ハ古昔ヨリ霖雨之節洪水満漲シテ（事美市広モ親ク見聞シタリ）城下人民之困苦見ルニ忍ヒス、夫レカ為メ木橋モ毀損シテ通行ノ便ヲ失ヒシヨリ、更ニ浚方ニ着手シテ石橋ヲ架替シ、曾木川ヲ浚ヘテ通船之便ヲ開キ、小林川モ材木ヲ下ス之道ヲ開キ、齊興国内再度之巡見通路之險難ヲ平ニシ、百里余之道路ヲ修メ、國府・出水之新田（大隅國分郷小村及ヒ浜ノ市岡所新田、又ハ出水郷庄村ヲ云フ）ヲ新築シ、又各郷農政享保之旧規ニ基キ猶良法ヲ採リ、上見部下之習弊ヲ改メ、受持郡奉行・地方検者・郷役々・名主等ニ懇篤規則ヲ教示シ、農民ニ督促シテ良法ヲ遵守セシメシ以來租税全納トナリ、庫蔵充實シテ數万石之貯石アルニ至ル、各郷ニ穀倉ヲ建立シテ凶荒ニ備ヘ、且兵備ハ古來ヨリ異國方ト名ツケ甲州流之兵法ニ倣ヒ五段備之軍制ヲ奉セシカトモ、方今之世態ニ適シ難キヲ看破シテ、拳國一般西洋之銃隊ニ基キ軍律ヲ改メ、大砲、小銃數万挺（万ノ字多ニ過ク、千ノ字糧當）ヲ製造シ、火藥・銃彈ヲ兵庫ニ貯ヘ、海岸要樞之地ハ都テ台場ヲ築キ、城下ヨリ百二十余郷ニ至ル

迄兵隊ヲ編制シ、領内何方ニテモ非常之節兵隊ニ応シ大砲・小銃ヲ繰出ス之規則ヨリ、兵糧・彈藥之運搬人夫之手当ヲ定メ、又前之浜・指宿・山川・久志・泊・坊・加世田・川内・阿久根・出水・

波見・柏原等へ二十三艘、三島方・琉球方用船ニ供シ、非常之節ハ該船ヲ以テ糧米・彈藥等運搬之用ニ供ヘ、日州赤江ニモ三五艘之用船ヲ繋キ、平日ハ年貢米運送ニ用ヒシモ、非常之節ハ前件同断之為ニ設ケシコトナリ、尤江戸・京都平常之經費ハ坂地ヨリ定期日ヲ違ヘス送金シテ、臨時之經費ハ其際幾許ヲ送金シ、鹿児島之用途ハ夫々租税ヨリ支弁シテ、三島・琉球ヲ初メ其支局ヘ資金ヲ備ヘ置テ本局ヘ予備之金ヲ貯ヘ、宝蔵ト号シ置、国家一大難事ニアラサレハ開封スル事ヲ得サル、為メニ斉興之朱印ヲ以テ封シタリ、右之如ク、城内ヨリ城下中各郷神社仏閣ニ至ル迄残ル所ナク、江戸・京都・大坂・伏見・長崎・三島島々迄モ改正シ、農政ヲ改良セシ以來、租税皆納・兵制調理シ府庫充實シタルハ、是重豪之命ヲ以テ広郷ヲ挙ケ、斉興能ク其志ヲ守リ始終節儉、加ルニ英断威重有テ下ヲ御シ、広郷受命以來奮勵不撓、才ニ任シ能ヲ使ヒ、夙ニ起キ夜ニ寢、毎年城下ヲ發シテ下之関迄十一日、中国路十五六日、東海道十二日、凡四十日、往来八十一日間ハ旅途ニ費シ、每朝鷄鳴ニ起テ日暮ニ旅宿ス、予初テ随從セシハ広郷六十二歳也、七十三歳死（十一月十八日）ニ至ル迄十三年之間、公

事ヲ談シ客ニ接スル、情容ヲ見ル事ナシ、実ニ勤メタリト云フ可シ、是ヲ以テ古來未曾有之偉功ヲ立シ所以ナリ、

(参考) 調所広郷履歴・事績概略

調所広郷は、十五日より茶道坊主となり、二十三の時初めて江戸に出たるに、高輪老公の側茶道を命せられ、甚だ御心に適ひ、漸次に登用せられ茶道頭となり、亦転じて髪を生し小納戸に挙げらる、是古来稀なる事なり、夫より小納戸頭取次となる。此用取次と云は、側役と等しき職にて、其時老公英明の御名高く、殊に外戚の勢有て、各藩の侯伯名流門に満るの時なるに、老公の愛顧を得る故に広郷も自ら声望を得て、佗の猜忌を生し、四十三の時側を離れて使番に転し、町奉行となり、亦高輪・白金両邸の資金を供する唐物係り用人となり、五十三の時斉興公の側用人兼側役となり、再び君側に侍す。少年より君側に而已侍したるは世情に疏き習なりしに、広郷十年間君側を遠ざけられ、性快達にして酒を好み、人と交ること廣く、和して能く接するか故に、士族の風習より市中の形況・情態を暗したるは、後に国務を司るがために設けられたる如し、其頃各藩の財政至困の極に至り、懸下各郷皆夫か為に苦みたるも、具に視、詳に聞と雖も、藩の財政には関せざる職務にて、更に窺ひ知らざる所なり、国政を執の日、才に任じ能を使ひ良実の人を用ひたるは、深く時体に通曉して大に開悟せし所ありしか、然れば十年間君側を離れたる

は、天の啓きたる大幸と云可きか、文政の末に至り既に国家興廢の機に臨み、大坂の銀主等皆出金せず、如何共する能はず、然るに菊池東原なる者、密かに両公へ申旨有つて、其の情実を探偵の為、調所広郷東原と同行し、姓名を変し、木曾路を経て出坂し、具に聞て江戸に帰り復命す、是に於て両公協議策を決せられ、改革の重任を老公より広郷へ命せらるると雖、広郷財政を知らざるを以堅く辞す、初め席一間余り隔られたるか、常に傍に携へる長脇差を持たず、膝元へ詰寄り、笑左衛門は豊後守か側役ではないかと云れたる故、不肖の私難有御側役相勤候と申したれば、側役と云は主人と存亡を共にする職なるか、か程に危急に迫りたる時に命する儀を辞すると云は如何の心得かと、大に氣色を損し命せられ、止を得ず御受仕ると申たれば、其後老公と斉興・斉彬両公、左近殿列席にて再び命せられ、出坂して辛ふして平野屋五兵衛を本に立、新組銀主設ることを謀り、平野屋彦兵衛・濱村孫兵衛同行にて江戸に出たことは別紙に載たる故略す、偕両名と同行して亦大坂に出る時、広郷の子安之進江戸に在て年十歳なるを残して書記篠原藤助へ託して出発するに、品川駅迄送り来り、既に別に臨んで安之進満眼に涙を浮へたり、広郷見て夫ぢやから品川へ送ること勿れと云ひしことなりと、呵て駕籠に乗りたり、其席に濱村孫兵衛有て涙を流し、幼き児を後に残し武士は厳しきものぢや、士には成度ないと申したる由、是大坂へ

列れては妨とならんと思ひしならん、老公此事を聞き玉ひ、安之進を御前に召され慰諭し玉ひ、菓子數種を推高く賜りたりし由、濱村の話に、調所さんの初て大坂に出玉ひたる時は何事も御存なく、一事を施さるに夫てよいかくと仰せられ、夫は御無理はない、即今て申さは伊集院平さんをあの所に居へた様で御存の筈がない、然るに今と成ては私共ではよつても付ませぬ、奇妙な御方ぢやと申したりしか、外にも類したりしこと有りし、事に敏にして心を用ること密なりし故なるべし、亦碇山将曹の言に、物は十分を極とす、広郷の思慮は十三分に至ると、一事業を起すには其言の如し、猶晩年に及んで益々思慮を加へ、予は今日迄幸に失策と思ふことなし、是より過なからんことを要すと、一事を施すに熟考す可しと數日を経て決す、事を謹む、概ね是の如し、亦果斷する日には即席に決す、故に人を用ゆる慎重なるを好み粗漏なるを忌む、事を聞くに晷を移し、食を忘れ、夜を探せ共倦ことなし、鹿兒島を發する、亦大坂を立日には客室に満て雜沓至て忙はしと雖、客を辭し避くることなし、心中別に閑日月あるか如し、事を任し業を施すことを委するに、たまたま其人の過失を告ぐる人あれば詳に聞く、少しも意にさはさます、其人過失知らざる如し、亦予は大任を担ひたれば人を好悪むこと能はず、唯御用立人は用ひざる能はずと、亦常の言に、予は上手の事を為さるよりも下手の爲すを好むと、亦氣味よきことはする勿

れ、大に快きことは後に害ありと、若き時は角力を好み、自らも取り、士族中の名手なりし由、酒を好み、豪放の風あつて快氣を帶ひ、貧しけれども財を輕し、家にたん石の貯へなくして氣宇快然、初て見へたる人男女老少皆歎ひ親み、亦人を使ふに、酒を過し、財に吝なる、遊廓に蕩する等知て知らざる如し、唯事務を勉めざるは深く忌む、囲碁・将棋を惡み、茶花を弄せず、皆寸陰を惜む意ならん、家老に任せられし以来、酒は猷酬に限り、三都に在て角力の話もせず、節儉は公の御行実(矢力)に擬ひたるか、鼻紙入・煙草入皆小倉木綿、煙管真鍮、座右の煙草盆亦銅金物、紙は常は尺邊紙、失立枯竹、衣服恩賜の外夏の袴諏訪平の類、余はをして知るへし、平日玩好食膳魚と鶏卵は用ゆ、齒なかりし故概ね豆腐、何にても朝より夜半迄來客、御改革の初天保十年頃より年々鹿兒島を立て御国道中凡四五日、九州路十一日、中国路十四日、大坂に三十日間、伏見を経て西京錦邸、近衛家の用を経て、東海道十四五日、年末江戸に出、各邸御近親方の事より大御台所御事迄残らず終るを恒例とす、是御改革初より命せられたることなるべし、然るに二十余年間七十三迄怠りたること無きは、実に勉たりと云可し、広郷か初め茶道にて、二十三の時江戸詰にて江戸に出たるは至つて貧困なりし由、然るに高輪老公の御間に達し奥茶道に命せられ、御左右に召使われ、大に御心に適ひ、表に居る日とかはり衣服其他恩賜も多く家計も豊かなりしなら

ん、然るに文化十五年寅正月御使番を命せられ、年四十三、多年の間御恩沢に浴し御側を離れ、亦大に困苦に成りたれとも更に心とせず、広郷の妻の話を、家貯なくして日々客を集め、亦春は桜、秋は紅葉に縦飲し、家の有無は問はず、妻は家に帰り其の費を供したりと、其頃なりしか、重久佐次右衛門、此人は今貧困なれとも後は出世すへき人なりと、屢酒肴を贈り器具を備へたりし由なり、広郷が使番に転したるは、老公の御意より出たるは宰相公の御居間の御栖居替ある時、其絵図を笑左衛門に可否を問可しと命せられたる、其絵図の折端に心を屈せずして勉む可しと御記しありたる由なり、文政八年、御側御用人御側役と命せられし年は五十の時なり、高輪老公を重すること、君の厳と父の慈を兼たる如し、御生前に立られたることは害あれとも廢せず、江戸に出れば三日を過ずして神前に拝し、凡一時間も私語す、是御改革の景況を今日己に言如く言へしと命せられたる故、御霊を恐れ、御国元より京・坂・江戸の事残らず申すことなりと、江戸に在る日三五度御神殿に詣して亦同し、齊興公に事るは大に趣を異にしたるか、此公は一度聞玉ひしことは年を経ても忘れ玉はず、今日の御行実、亦事を申すことを深く懐む可し、若過て施さるるに至れば少も止め玉ふこと能はず、予教君に事へたれとも此君の如きはあらすと、恐る、こと雷霆の如し、事を申すに思慮を尽くす至らざる所なしと雖、少く欠漏あれば貸されず、君側

を退いて頭をかき、今日も亦叩かれたりと云ひしこと度々ありし、然れども公の幼き御時より侍したるを以て、愛情子の如く、大坂にていつも三日の御滞坂となりたるに、一日は、江戸堀広郷の官宅より続に浜御殿と唱へたる一室に臨まる、ことなりしか、前方より室中の掃除床の下厨の中迄白見、室内・天井・畳下迄同じ、床掛物・床置・屏風・敷物・手拭迄心を用ひ、茶果・器具皆見て定め、御中飯より御肴等大坂有名の八百屋源七に命じて献立を出させ、前日君側の側役・小納戸・茶道を呼て見せ、昔日公の御好御食味は心得たれとも、口味は時々替る事なれば今日の御口に適ふ様に示す可しと云へは、皆君の献立に是非の申す可なしと辞すれとも、強て詢へは、されば此品に爰し杯と定め、源七に献立を定め、更に珍奇の品を好まず新鮮を専とす、菓子屋高岡丹後を呼て、前日試の菓子を出させ、情報其他にも是にて好かと問ひ、明日臨ませらるれば側を退こと能はず、皆心を用て整理す可しと云、其日は早く公に謁して駕を請ひ、門外に迎て側に候す、八百屋は早天より膳室に來り、麻上下・覆面して銅の包丁より初め、清潔謹嚴を究む、凡午前より臨ませらるより、茶果中食畢而、大坂中の時情、国産の良否、御改革以前の疏なりしより今日良品となり代価の各国に冠たる船運搬、大坂荷着、人札、代金の納め、邸中処方、亦伏見西京邸中の寺務、諸寺社司等の官職交代等迄具上し、昼後より一席を隔て高崎御留守居、金平僕等、

薩摩屋仁兵衛、新組御銀主森元半左衛門・白山彦五郎、或いは在坂の僧徒も交へられたるもあり、一席にて酒肴を随意に進められ、琴絃亦書画もなし、晩に及て帰殿の時は門外にて送て帰り、子の左門をして君臨て辱を謝し奉り、其日の供方を三席に招て饗す。終て夜更ると雖、八百屋源七を初め其日の勞を謝し益す、広郷本卑職より出たりと雖、高輪老公の側に侍する二十年、老公名声籍甚、侯伯名流門に満ち、老公側ら習技芸、書画・劍銃・馬・鷹・典札・医薬・漢書・蘭説精通し玉ひ、座客毎に満つ、広郷常に其間に在て応接するを以て自ら其風習に化し、賓客に應對し、起居進退大藩の老たるに愧す、亦老公の風に擬ひたるか、人の勞に報ふに一夕の宿と雖、切の謝する可きは必ず厚くす、故に東海道・中国路の旅宿大に称譽を得たり、宰相公には御幼年より奉侍したるを以て、御嚴正なるには恐ると雖も、忠愛の情甚た厚く、大坂にて懇侍し奉る等少も阿り諂ふ意なく、年々五十日間の長途を慰め奉らんか為、次に坂中財政の地たるか故に、景況を申すの爲なり、公も亦寵遇他に殊にして、清熙等にも御直に命せらるべきことも広郷か手を経て命せられたり、是広郷に大小内外御委任なりし故に、其心を失はさらしめんとの尊意か、素より御幼年より馴れ仕へ奉りたる故に、他に仰せられざる君側の事、御近親の御間・婦女子の事も皆廣郷命せられたるか、御財政の事は一人に命せられ、御君側亦同しく他の知らざる多端の事

多かりしなる可し、君臣の間右の如く親密なりしを以て、広郷か家庭に一社を建て、御老公の尊像と斉興公の御寿像とを鎮座し、今に祭り奉る由なり、広郷人の恩あるに報ふ至て篤く、初めて生したる時、畠山氏の老婆に済生の恩を受けたるとて、彼家に報ふ事至て厚し、亦村田元阿弥に茶花の技より教を受けたる逆、死後子の甫阿弥に懇にす、亦豎山武兵衛は正直の性にて教を受たる多く、其子の武兵衛へ親戚の如くす、町田善助貧窮の日近隣にて濟ひたること多かりしか、殊に親愛す、重久佐次右衛門か貧窮の時助けたる故か、至て愛す、桐野太兵衛も同じく其孫の孫太郎を親愛し、白蠟の精蠟の品を善くする等自金を費して伝を受させたる類、外にも多かりしならん、右等一時の恩恵を報ふ、是の如し、矧んや老公・宰相公の御大恩を荷ひ、身卑職より拔擢せられ三千石の大祿を賜り、古今未曾有の殊遇を蒙りたるか故に、広郷七十を越したる日、清熙申すには、君今日大任を他へ委ねられ後より見て指揮せられ如何あるべきやと申したれば、夫は功成り名遂けてかと聞き、申さは命の如しと答へたれば、熟考すへしと、三日過て汝か言ふこと、予は死に就迄勤るの考なり、左心得可しとの答にて、死を以報ひ奉る志明なり、此事は意に背くことは思ふと雖も、権一人に帰し忌む人多を聞き申したるなり、亦三都南都の大負債は、天保六年の初冬返償の方を立られたれとも、御領内数百年の御貸上金物奉行方の根帳に在て、多

年の事にて御借状所持するもあり、紛失するもあり、甚た紛はしきも多くありし、広郷考ふるに是亦是節一洗せされは、後年には何程の苦情を生せんも計り難し、其頃小番・新番を望むものあり、士族を望むもあり、郷士、御小人を望むの類も余多ありしに、現金は不用なり、古御借状の類を以て昇級を願はんには金額の多少によつて望を得可しと示されしより、願人搜索を究め一時に多年の負債消却となりたり、夫等の類より多年負債消却となりたり、夫等の類より多年諸局に年勞あつて昇級する御広敷用人・番頭・表の新番・馬廻祿を益す類數百あれとも、概ね広郷に關係するを以て依頼せざる能はず、自ら権一手に帰するか如し、是年々江戸各邸の人員勤惰、京錦邸・近衛邸・裏伏見・大坂・長崎皆知る所なれば、都て聞かざるなし、清熙等に云ふ、諸局年勞勤惰亦上の意より出ることは例に従ひ施行す、改革に關する要路の人員に至ては汝等に議せすして任することなしと、広郷尤人を見るの明あり、御改革の初用ひたる一人も退けたるなく、皆其能を尽さしむ。常に笑ひしことあり。^(なりカ)御改革の初、江戸物奉行を新納四郎右衛門かすめにより町田善右衛門に命ず、其後四郎右衛門來りて今朝は断の為に参りたりと云ふ、夫は事新敷ことかな、何事かと問ひたれば、町田善右衛門のことなり、随分宜しからんと考へたるにあれば庄屋限りなりと云たる故、御広敷番頭に転したり、世上には庄屋ぎりあるに困ると云ひしことあり、

善右衛門大迫村の庄屋たる時、其村の者共集り年重を談せしに、一人かべに向て黙するあり、他より老父は何故黙するかと問ひしかば、あんな庄屋小村に長くをるものと云ひしに、果して町田監物の用達に転し、庄屋中の良なりし由、職高くなれば庄屋限りか在るから困ると笑ひたり、晩年には人材なし、どうもしかたがない、諏訪の税部ぢやの千眼寺の坊主等も出さうぢやないかと云ふ、亦鷲頭洞水杯も穩居なれとも出して見たり杯と、屢嘆きたり、改革の初より詰の家老あれとも、其他の事務新納四郎右衛門老練なるを以て司らせ家老の輔となり、其他の事務・大御台所姻縁の侯伯の事は、早川環に司らせたる由、新納江戸に在れとも、質素節儉、公服は鮮なれとも在宿は紋羽の衣服、毎晩酒を広烏薬罐を火鉢にかけ、別に肴を設けず、外席に出ることなし、火羽織・頭巾等古けれども屑とせず、金方は初重田郷左衛門、後ちに中村源助、當繕は田中仲次郎・物奉行岸良長兵衛、後に橋口左左衛門・最上孫左衛門、大坂は小森新藏・後に田中善左衛門・金方有川勘助・宮里八兵衛、伏見田尻次兵衛、京都小森新藏、副役に赤井直之進・金方赤井清次、大坂見聞役菱刈七左衛門・丸田泰藏・田畑仲左衛門、京都山田市郎左衛門・堀川近衛殿御裏名越彦太夫・伊集院太郎右衛門・山田一郎左衛門、何れも其職を終へたり、鹿兒島亦同し、三原藤五郎経福に財務を司らせ、従前江戸・京・大坂、藩内鹿兒島に二十余、各郷に租税を納る

六十程の蔵有て、四五十年前より出納を過つもの絶す、殊に財政不整より猶多かりしを、改革以来各蔵の出納を厳にし、監督検査人を選ひ秋毫も犯すこと能はず、故に一人の罪に陥りたるなく、改革の末天保十二年より嘉永元年迄八年間の如く、新田・道路・橋梁・川浚・社寺の造営・修繕・両度巡見・各郷修繕・軍政更革・大砲・小銃の鑄製・彈藥製造、其費拏て数へ難しと雖、各職皆其任に勝へたる、以て一人の功を終へざるなく、半にして退けたるなく、是皆才を選て其職に堪へざるなく、広郷常の言に才に大小あり、任するに随て力を展すもありと、其間三原の功勳からず、前新納言の如く、卑職には善くても庄屋限りありと笑ひたり、草牟田誓光寺の地藏堂より寺家まで當繼したるは公の命なるべし、伊敷不動堂亦同、其頃妙谷寺新造となり、玉江橋を架したる頃にて、廣郷より下町芝田次郎左衛門・長崎武八郎等に命して、不動堂の下に二三カ所、誓光寺の下に一戸、酒肴・蕎麦等を置て人の望に任す可しと命したり、県下を去る一里の地にて、遊歩の地に供せしなり、石炭を求ること甚しく、何方にても礪石に似たる有と聞は皆掘らしむ、筑後三池より礪夫を呼て搜索す、清熙考には其頃未だ蒸汽船・蒸汽機械なき時なれば、此国は山林多く不用の様に考へたるに、今にして見れば考ことありしなる可し、亦財政の本は三島の砂糖なるに、漸次に肥後・肥前・四国・泉州・駿・遠・参等繁殖し、若も箱根を超て東北海に

至らんに此国の砂糖の価低して大に困苦の秋に及はん、因て砂糖に代る國産を今日より接穂として用意すへしと、亦甲突川を浚へたる後に、川口にて大坂川口の浚に擬し、砂利を天保山に揚ることを懈らす、亦沿川の村々、岡岸の山野を堅く開くことを禁し、沿川に崩落さるる爲にす、竹木を植て田畑の堤防の用に備へたるは、若川より海へ土砂を洗出し、俗に云ふなべの淵を埋るときは、神瀬の外を通船せんには大不便に至るへしと憂へたり、亦百姓は権現様の飢さす殺さすと仰せ置かれたる由、今参河辺の農家を心を付て見る可し、豊饒の家見へすと、亦農政緒に付きたる日に、郡奉行を初め各郷租税平等ならず、改正なくは有すと云人多かりしに、先此俵に置可しと棄置たり、熟ら考ふるに、享保の度改正となりたる由なれとも、百二十余郷一手に出る如くは改め難し、方位によつて寒暖等しからず。土質の異、人民の習慣同一なる能はず、容易に換難きこと多かりし、亦農民はいつまでも農民なるべし、亦驕らしむ可らず、或る学者の言の如く、百姓を愛するとして床の上の置物の如くす可すと、亦砂糖の価低くなりたる年、外に産物を殖さんと需むれとも俄に良産なき時、沖の永良部の一島を諸人交易を停め三島に同しくせんと云ひしか、尤もなり、去ながら残らす利を網しては下々立難しと、屋久島は改革方より度外にしたる故に、彼島も善く法を処せんには利益を生せんと云ひしに、屋久は大目附司りて見聞役の爲にする島

なれば手を下すへからすと、亦山水車は改革方より度外視したるに、市中より利益を願ふに山水車の支配を願ふ者多く、此業種子を大坂に出せは其利多かりしを以て、併て大坂に登せんと請ひたるに、残らず藩内の利を網して下の苦しみなると免さず、他の殖産を起すの事を云ふには微物も棄す、胸中別略あるか如し、偕

島津家を遡て考ふれば、今薩隅日の領主と称すれども、大永中に至ては四分五裂となり、纔の領と為りしを、日新公・貴久公、伊作・阿多・加世田を復せられ、鹿兒島・吉田・蒲生の地、菱刈・真幸に及ひたるは義久公・義弘公・歳久公・家久公の御功なるべし、其後伊東御取合御兵威盛なるに依り、肥後・筑後へ御出張、終に大坂と御戦争となり、豊太閤の征薩となりしは天正十五年にて、多年自他国戦争の末、五年にして朝鮮の役、後七年慶長五年関ヶ原の役あり、其罪を謝せん為、義久公・家久公上京、国内の鎮定より朝鮮の役軍費に苦みたるは、古書に詳なり、其後東京に桜田邸を初各邸を立、上野造営、日光・美濃川修繕、増上寺造営、王子原大追物、竹姫君入興、其上芝高輪邸の延焼、藩内風旱、火災、琉球人参府等絶ることなく、限りある国産の応ずる能はず、皆負債となり、加るに榮翁公長せらるゝに従ひ、英邁の資を以て聖堂を立、演武場を開き、医学館を設け、源右府より命せられたる歴官を建、六百有余年の神社・仏寺造営再興し、折しも子孫皆孫多く、大御台所の入御・近衛殿へ

入興・大諸侯へ養子婚家概ね虚蔵なく、其費枚挙す可らず、文化・文政に及んで大坂の財政を改め、人を換ふれども出納応ずる所にあらず、入費は年毎に増し、利子日を追て長し、銀主共一金も出さざるに至り、江戸の月給十三ヶ月渡すこと能はず、日用の給金亦同し、邸中草長し馬草とし、百事をして知る可し、既に参勤交代することを得ず滞府となり、亦鹿兒島より西京に着せられたるに、東海道の旅費備はらさるもあり、既に国家存亡の秋に臨み、栄翁・斉興両公寢食を安んぜられざるに及び、菊池東原か密に申したるを採て、広郷と東原とを大坂に出し、彼地の情実を詳にして江戸に帰り復命す、其時其方を施されても行はれ難く、再命されたる時は実に国家の存亡を思し召されたる事にて、平野屋彦兵衛に外御庭にて、世に路頭に立て居ると云ふことあれども、立て居る所でない、寝て居るから左様心得よと、仰されたるは実の御心にて、今にして考へても月給を十三ヶ月渡さすに能も今日を過したり、年末御城坊主等に歳暮の贈りの二千疋千疋と云ふ類渡さず、日々邸中掃除の夫も表門・玄関等に限り、蔵に南鐮一片ありたることもあり、其余はをして知る可し、其頃江戸各邸より諸局、京・伏見・大坂の苦難察す可し、清熙六七年を過て、天保六年に大坂に出たる故知す、夫より即今江戸の用を備へ、彦兵衛・孫兵衛と大坂に出て再来の用を供することは濱村か策に出、広郷は鹿兒島へ下り国産の改良に従事したり、此高木

五兵衛を本にして、新組銀主を設立し、夫より入費多端の際産物料の不連続なるを補ひ、江戸の用を補ひたるは、全く濱村が力にして、至難の事なりしは残る書に詳なり、実に御改革中の大功と云ふ可し。三島の改革は至難にして、夫迄諸人交易なりしを藩に惣買入することなれば、三島風を異にし皆慣習あり、大島は運搬の船に碇泊し、種々弊習ありて、統一にするは、今にして考ふれば何程庄制を以て法を設けても行れ難きことなるに、宮之原源之丞・肥後八右衛門、見聞役附役にも皆人を選ぶこと其任に堪へたるを以て、年々に砂糖も位を益し、入樽斤目も宜く、大坂の品価を益し、従て琉球に波及し、高田尚五郎が創めたる砂糖に及ひたる而已ならず、其他の琉球・沖の永良部の産も品価を益したりしことなり、米・菜種子・蠟・胡麻・硫黄・明礬・牛馬皮・椎木・椎皮・椎茸・鬱金・海人草の藩より産とするもあり、商人をして司らするもあり、其他山野の採葉亦培養を藩より盛に供へ、専ら菜種子を作りたる、藩内の菜種子二十万石に及び、鹿児島より各郷余多油屋ありて粕多き故に、国分・指宿・出水等の煙草培養饒かなりし所以なり、其他上・下・西田町の事業、亦各郷町村浦々等の処分、風教、神社・仏寺の修繕、橋梁・堤防・道路の修め、土木の費を省きたる類、挙て尽し難し。茲に於て百姓安堵、郷里を離れ隣県へ流散したるも残らず復帰し、谷山の獄中より上下町の仮監舎迄空虚となり、評定所も閑日となりたるこ

(附カ)

ともあり、鹿児島城内より二丸其外諸局残らず修繕、新に建たる織屋、木綿織屋、藍玉所、牛馬鯨骨所、各郷に支局立たる数ヶ所、出水庄浜の塩浜、高江新田の修繕、水引藍玉所、伊集院より出水までの仮屋、諸所の石橋、鹿児島中突川・稲荷川の石橋、山川筋道路石橋、天保山を川の上砂を以て築き、年中砂揚・川浚へして水害を除き、上稲荷川下の土砂を以て祇園の台場を築き後年の水害を除き、大社は水引新田宮・指宿新宮・東霧島社・雛森社・皇子の権現・西原八幡・忠元靈社・高屋大明神・大汝社・^(給カ)垢良新八幡新造、猶漏たる多かる可し、修繕の多きは数へず、大寺は南林寺・妙国寺・般若院・勅詔院・龍翔寺、其他小寺小社は略す、兵政の更革に弁天渡戸に大砲・小銃の鑄製所、滝の上に弾薬製造所、古の蔵数ヶ所、大龍寺馬場訓練所、軍神堂、大砲・小銃の蔵、海岸佐多・小根占より台場を築き、城下洲崎・桜島・山川は海口なるを以て地頭仮屋と正隆寺を新造、港内の為に指宿大山崎に台場を築き、大砲・小銃運搬の為に、谷山・喜入・今和泉・指宿へ車路を開き、其他軍備の為に手を施されしこと際限なし、文久三年異船と前の浜にて戦争の日、大に為となりたるか、江戸にては芝の本邸は云ふに及はず、桜田・高輪南向・西向・堀端・田町・品川・大井の諸邸より、上野宿坊・明玉院、増上寺、源寿院、鎌倉相承院、菩提所残らず修繕造営、西京錦邸より近衛殿裏大円寺、堀川邸、東福寺即宗院、伏見邸、宇治

黄檗山え祠堂金を納め、高野山蓮金院修繕、大坂上屋敷、休息所を
始め新営、客屋留守居役宅新造、宝蔵新造、表門、同蔵々修繕、中
下屋敷數軒の蔵々新造、稻荷社、客屋、川端水蔵、水除の類皆全備
し、米千石と金數千両、江戸予備として堀端の蔵に納、米二千石を
大坂より西京の予備とし、伏見の邸年中の入費として過書座へ金を
貸し利子を以て其用に供し、江戸・西京の月々の用金は日を定めて
為替の方を定め、鹿兒島は諸局に資金を供したるは、三島方・唐物
方・雜紙方・織屋・木綿織屋・牛馬鯨骨方・藍玉方・寺社方・採藥
方、其他も人を選て司らせ、出納を計算するの法を嚴にす、財政は
従前より勝手係家老の特任たるに、改革に及んで広郷に委任し、家
老も亦參政す、去れ共利害得失を議するは趣法方の側用人亦用人の
職とする所にて、其副に調掛數名あつて議を殊にすれば、其可否は
家老決をとる、金の出納は御趣法掛御用人に司らせ、出納は広郷証
文を以て物奉行券を以て監督を嚴にす、広郷茶道坊主たりしを栄翁
公の側茶道に命せられ、深く心に適ひ、髪を生し、小納戸側役に等
しく召使はれ、広郷か精神洞察せられ、宰相公も亦幼年より召使は
れ、協議の上改革の大任を命せられたるに、漸次に功を奏するに従
ひ、古今未曾有家老職眼代を命せられ、各局才に任し能使ひ成功に
至りし故、所有高三千石を与へられ、風教・土木・軍政・農商務・
勸業、皆宰相公の意を奉して更改矯正、国平に、民安く、財充ち、

穀饒に、獄舎空虚、刑措に至り、天保七年の凶荒にも餓民少なく、
風旱の災もなく、宰相公の天幸を得られたると、威重を奉して広郷
か廉潔寛容にして民に畏たるの器あつて、改革の命を奉してより二
十余年一日の如く勉めたるは、君に報する忠愛の情篤き所以にして、
嘉永元年の冬江戸邸にて没す、

明治十七年八月

海老原雍齋記

〔近世社会経済叢書〕ヨリ補収)

既刊史料名

集	史料名	集	史料名
1	薩藩政要録	19	薩藩先公貴翰(乾)
2	丁丑日誌(下)	20	〃(坤)
2	〃(上)	21	小松帯刀傳・履歴・記事
3	薩摩国新田神社文書	22	小松帯刀日記
4	一向宗禁制関係史料	23	新修薩摩鹿兒島藩領国・郡・郷・村・浦・町附(上)
5	薩摩国山田文書	24	〃(下)
6	諸家大概・別本諸家大概職掌紀原・御家譜	25	三州御治世要覧(三五・三八)
7	薩摩国阿多郡史料	26	桂久武日記
8	山田聖采自記	27	明赫集(上)
9	御登御道中日帳御下向列朝制度	28	要用集(下)
10	明治元年戊辰戦役関係史料	29	〃(下)
11	伊能忠敬の鹿兒島測量関係史料並に解説	30	桂久武書翰
12	管窺愚考・雲遊雜記傳	31	本藩地理拾遺集上(薩摩国)
13	川上忠塞一流家譜	32	〃下(大隅国・諸縣国)
14	本藩人物誌	33	江夏十郎関係文書(上・下)
15	薩陽過去帳	34	示現流関係史料
16	備忘	35	樺山玄佐自記並維丁未筆
17	家久公御養子御願一件抄	36	樺山紹剣自記
18	鹿兒島縣地誌(上)	37	島津世禄記
19	薩藩舊士文章	38	島津世禄家
20	薩藩舊士文章	39	譯司冥加録・漂流民関係史料

平成十一年度

鹿兒島県史料刊行委員会委員

(五十音順)

尾口義男	鹿兒島県歴史資料センター 黎明館調査史料室長
唐鎌祐祥	鹿兒島短期大学 附属図書館事務長
芳即正	鹿兒島純心女子短期大学 非常勤講師
五味克夫	鹿兒島大学名誉教授
下堂園純治	第一予備校講師
晋哲哉	蒲生町長
堂満幸子	鹿兒島県歴史資料センター 黎明館史料編纂委員
畠中彬	錦江湾高等学校教諭
原口泉	鹿兒島大学教授
前床重治	大島高等学校校長
宮下満郎	鹿兒島市文化財審議会委員
山田尚二	西郷南洲顕彰館長
吉元正幸	串木野高等学校校長

薩摩藩天保改革関係史料 一

(鹿児島県史料集 第三十九集)

平成十二年三月

発行 鹿児島市城山町五十一
鹿児島県立図書館内
鹿児島県史料刊行会

電話 〇九九―二四―九五一一
FAX 〇九九―二四―五八二四

印刷 鹿児島市中央町二十七―十六
かわち印刷有限会社
電話 〇九九―五四―五〇五四

